
車イス少女

君鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

車イス少女

【Nコード】

N7291V

【作者名】

君鳥

【あらすじ】

高校三年生の春。桜の花びらが舞い散る坂道で、少年は車イスの少女に出会った。足は動かず、自力では歩けない彼女。しかし、その心は鳥のように軽かった。晴れ時々シリアス。黒髪の乙女とイチャイチャする改訂版です。

1 - 1 ・桜並木と車イス

— 1 —

四月一日。

赤坂和隆（かずたか）は桜並木の下を歩いていった。

風に吹き上げられた桜の花びらたちが踊るように宙を舞う。

桜をひとひら掴もうとして手を差し伸ばしたが、それは生きているみたいに和隆の手をするりとすり抜け、風に吹かれて彼方へと飛んでいった。

日差しはポカポカと温かく、いい陽気だった。絶好の始業式日である。

和隆は抜けるような青空と満開の桜を見上げながら呟いた。

「今日から三年生か……」

高校一年生、入学したての頃はブカブカだったこの制服も、いつの間にだか体にぴったり合うようになり、そして今では少しきつい程だった。

母親に制服を新調したいと言うと、「あんたは無駄に背が伸び過ぎなのよ。後一年なんだからその制服で頑張つて」と言われた。「伸びてばかりいないでたまには縮みなさい！」などと無茶なことをのたまう。そんな、尺取り虫じゃないんだから。

みんなもう登校し終えたのだろう、和隆の他に通学路を歩いている生徒の姿はなかった。

しかし和隆は急がない。

このペースならギリギリ間に合うだろうと高をくくり、のんびりと桜を堪能しながら歩いていった。

「こつも暖かいと、またどこかに旅に出たくなるなあ」

春は出会いの季節だ。

新たな旅立ちの季節だ。

愛車の自転車にまたがって、風の吹くまま気の向くまま、春の陽気に誘われてどこか遠くへフラフラと旅行に出かけたくなる。

しかし、かといって新学期早々学校をサボるほどの度胸はないし、春休み中もツーリングに行ってきたばかりだ。これ以上フラフラしている、またぞろ母親に文句を言われてしまうだろう。

和隆はあくびを噛み殺しつつ、仕方なく通学路をとると歩いていた。

入学以来、和隆の人生は絵に描いたように平々凡々としていた。

何かを見つけたくて、何かを成したくて。

時折友達を誘って、あるいは一人で、バッグ一つ背負ってチャリンコ旅行に出かけたりするが、ロバが旅に出たところで馬になって帰ってくる訳もなし。大抵、大した事件に巻き込まれることも大きな飛躍を遂げることもなく、そのままの姿で帰ってくるのが常だった。

どこか遠くに出掛けても、ただひたすらその場足踏みをさせられているような……空回りをし続けているような徒労感に苛まれるだけだった。何かを成さねばならないという焦燥感が増すだけだった。何者にもなれない自分の体を持て余す。

今日からまた、何の変哲もない日常が始まる。

新しい教室で新しい教科書を受け取り、去年とは少し違ったメンバ―で授業を受け、受験という目に見えない魔物に急き立てられるような日々が始まる。

同じことの繰り返し。

退屈のリフレイン。

和隆は、またそんな日々が始まるのだと、思っていた。

変わり映えのしない、判で押したような日々が始まるのだと思っていた。

そう。

この道の角を、曲がるまでは。

前方に人影が見えた。

遅刻ギリギリの時間だというのに、和隆の他にも登校中の人物がいた。

「ん……？」

その人物は、車イスに乗っていた。

桜の花びらが舞い降る道を、ゆつくりと車イスの車輪を転がして進んでいる。

車イスの背もたれから、黒髪に包まれた頭部が見えた。女学生、

女の子のようだ。

通りに風が吹き抜けた。

風が枝々を揺らし、桜の木々はざわざわと波打った。まるで踊るようにひらひらと桜の花びらが舞い、穏やかな春風が少女の髪を撫でていく。

少女は車イスを進ませる手を休ませ、片方の手で髪の毛を押さえた。

春の息吹を感じるように、気持ちよさそうに少女は澄んだ青空を見上げた。桜の木々の隙間から差し込む木漏れ日が、少女の顔をまだらに照らす。

——桜並木と車イスの少女。

その光景は、まるで一枚の絵画のように見えた。

和隆は少女の後ろ姿を見詰めて呟いた。

「……うちの生徒か？」

少女はよしと頷き、車イスのタイヤの外側についた持ち手——ハンドリムに手を添えて、再び車イスを進ませだした。

「いーち、にいーい、さんまの、しっぱ……」

少女は何か、奇妙な歌のようなものを口ずさみだした。

言葉を一つ喋ると同時に、ハンドリムを握る手にぐっと力を込めている。一生懸命、リズムカルに両手を動かして車イスの車輪を前に押し出している。

「ごーりーらーの、むーすーこー……なっぱ、はっぱ……くーさーあーたー、とうふっ！」

学校というものは津波対策や、土地の値段が安いからという理由で高台のような場所に建っていることが多く、和隆の通う高校もまた、坂の上にあった。

坂といっても健常者にはどうということもない、ごく緩やかな登り坂だ。

しかし、車イスの人間にとってはこんな緩やかな坂でも大変だろう。見た所電動車イスでもないようだし。大変そうである。

和隆はカバンを肩に抱え直し、小走りに走りだした。

少女に駆け寄り、声をかける。

「よお、後ろ押すの手伝おうか？」

「うわっ!？」

突然声をかけられ、少女はびっくりしたように歌うのを止めて顔を上げた。

車イスに座っているので、少女の頭は和隆の胸の辺りの高さにあ

った。

和隆と同じブレザーの制服に身を包んでいる。膝にはベージュ色の膝掛けがかけられてあった。

車イスを後ろから押す時に介助人が握るグリップの部分には、小さなスヌーピーの人形がぶら下がっていた。とぼけたような表情をして、プラプラと揺れている。

制服の首に巻いたリボンの色は赤。和隆と同じ新三年生だ。

（うちの学校に、車イスの女の子なんていたっけか？）

和隆は記憶を手繰り寄せながら少女の顔を覗きこんだ。見知らぬ顔である。

「その学校の生徒だよな？ 後ろ押すの、手伝おうか？」

もう一度問いかけると、少女は困惑したように呟いた。

「あー、っと……」

和隆の顔を見上げる。

「お、お構いなく……」

間に合っていますという風に、彼女は片手を挙げた。

「大丈夫か？ きつそうに見えるけど」

少女は少し息が上がっていた。肩が小さく上下し、額に汗も浮いている。

彼女はにこつと優しく微笑んで答えた。

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫。先に行つて。君まで遅刻してしまうよ」

（関西弁……？）

少女の喋る言葉は標準語ではなく、微妙に訛りが感じられた。「ありがとう」というセリフも、「ありがとお」と下に伸ばし気味だったし。この独特のイントネーション、近畿方言というのだろうか？ 関西方面のものだ。

少女は「よいしょ！」と掛け声を出して、止まってしまった車イスを再び前進させ始めた。

先に行つてと言われても、車イスの女の子を見捨てて自分だけ先に行くのも気が引ける。

和隆は歩くペースを落とし、なんとなく少女の横を歩き出した。

桜並木を並んで歩く。

グリップにくくりつけられたスヌーピーが揺れる。

キュルキュルと車イスが軋む音だけが、静かに響いた。

「ねえ……」

少女が喋りかけてきた。

「ん？」

「さっきの聞こえた？」

「聞こえたって、何が？」

「ええと、その……私の独り言っていうか、鼻歌っていうか……」

「ああ、『ごーりーらーの、むーすーこー』とか口ずさんでたあれか？」

そう答えると、彼女はあちゃーと顔を覆った。

「やっぱ聞こえとったんか。恥ずかしいな」

誰もいないと思って気持ち良く歌を歌っていたら、いきなり背後から自転車が駆け抜けて行って、慌てて音量を押さえて口をつぐむあの感じ。彼女は恥ずかしそうに頬を染めた。

「でも、伸びのある、いい歌声だったよ」

そう感想を述べると、彼女は余計に恥ずかしそうに顔を赤らめ、にやはたと照れ笑いを浮かべた。

「今の歌、数え唄ってやつだっけ？　すげー久しぶりに聞いた気がする」

「ん……。なんかね、こうやって歌を歌いながら漕いでると、テンポが取りやすいんよ。腕振りの。それに数を数えるこの歌やったら、『一歩ずつ着実に、前に進んでる！』って感じがするし」

「へえ……」

和隆は興味深そうに少女の顔を見下ろした。

「でも俺が知ってるのと、だいぶ違うな」

そう言つと、彼女は「そうなん？」と言つて子猫のように小首を傾げた。黒い髪がさらりと揺れる。

「違つて、歌の歌詞が？」

「ああ。俺が子供の頃は『いち、にい、さんまに、しいたけ、でっこん、ぼっこん、ちゅーちゅー、かりかり……』とか歌つてた気がする」

和隆が指を折り曲げながら教えると、彼女は不思議そうな顔をして聞き返してきた。

「ちゅーちゅー、かりかり？」

「そ。ちゅうちゅう、かりかり。で、最後は『ですとんぱっ』って言つて締めるんだ」

「ですとんぱっ？」

彼女は初めて聞いた外国語をリピートするように、真面目な顔をして口の中で「ですとんぱっ、ですとんぱっ……？」と繰り返していた。

「ですとんぱっ……。そんな言葉、初めて聞いた気がする。どういう意味なんかな？」

「さあ？　俺も知らないまま歌ってたわ」

そもそも『さんまにしいたけ、でっこん、ぼっこん……』の時点で意味不明である。

「でもなんか、可愛い感じがするね」

少女はそのフリースが気に入ったのか、車イスを操りながら、楽しげに「ちゅーちゅー、かりかり、ですとんぱっ」と口ずさんでいた。それに合わせて、リズムカルに腕を動かす。

和隆は足を動かしながら、隣を進む少女の事をそっと見下ろして観察した。

少女は、綺麗な黒髪をしていた。

背の肩甲骨辺りまで伸びたロングストレート。こういうのを烏の濡れ羽色というのだろう。漆黒のように艶やかでしっとりとしていて、日光を反射して天使の輪っかが出来ていた。

しかし、ヘアスタイルにはあまりこだわりがない性質なのか、髪の毛先は伸ばしっぱなしで不揃いだし、前髪も少々長過ぎの感があった。なんとなく貞子っぽい。

髪の毛の隙間から覗く黒目がちな瞳は、大きくてぱっちりとしていた。長いまつげ。目鼻立ちの整った端正な顔立ち。なかなかの美少女である。

流れるような動作で細い腕を動かし、車イスを前に漕ぎだす。

前方を見詰めて一心に車イスを漕いでいる彼女の横顔は凜としていて、そこには、そこいらの女子高生にはない意志の強さのようなものが感じられた。

朝靄にけぶる澄んだ湖のような、凜然とした雰囲気。障害なんて物ともせず、我が道を行く、という感じ。

こんな顔をして学校に登校する少女を、和隆は他に知らない。

綺麗だな。

容姿云々ではなく、彼女の存在そのものが……彼女の纏う空気が、凜として高く見えた。

「綺麗やな」

唐突に少女が言った。

別にやましいことを考えていたわけではないが、じつと少女の事を眺めていた和隆は、一瞬心が読まれたのかと思ってドキリとした。若干どもり気味に尋ね返す。

「え？ な、なにが？」

「桜。綺麗やね」

彼女は頭上を見上げた。

「あ、ああ……」

二人の頭上には、まるで薄桃色の雲が漂うように満開の桜が咲いていた。ひらりひらりと花びらが宙を舞う。何の変哲もないただの通学路も、桜が咲いているだけで、映画の舞台になったかのようにドラマチックな景色に映った。

うちの学校前の桜並木は市内でも有名だった。この桜並木を歩きたくてこの高校に進学を決めた生徒もいるとかいないとか。

和隆は少女に尋ねた。

「もしかして、転校生？」

彼女はこくりと頷いた。

「うん。この春こっちに越してきてん」

三年で編入というのも珍しいな。しかも車イスの少女が、ただの公立高校に転校してくるなんて。

「通学路がこんなにも綺麗やったら、明日からこの坂道を行くのも、頑張れそうやわ」

彼女は眩しそうに目を細めて、桜の木々を見上げていた。

二人は高校の裏門に到着した。

「あー……」

少女は裏門を見詰めて呟いた。

「そうか、ここは坂やった……」

裏門の入り口は急斜面になっていた。今まで辿ってきた緩やかな道とは違い、結構な傾斜である。長さは五メートルもない小さな坂だが、車イスの人間にはかなり厳しいだろう勾配だった。ちよつとした小山である。

「この坂は一人じゃ無理だろ。手を貸すぜ」

和隆は少女の背後に回り込もうとしたが、しかし、少女はふるふると首を横に振った。

「ううん。一人でやってみるわ」

「でも結構な坂だぞ？」

「今日から毎日、一人でこの学校に登校しなあかんのやからね。自分一人でも登れる道か、試してみたい」

彼女は挑戦的な口調で言った。

少女は車イスを動かして、学校の裏門と向き直った。

まるでスタート直前の短距離走の選手のように、ゴールである坂の頂上を見詰める。

「よし……！」

少女はハンドリムに指をかけた。

位置について。

よい……ドン。

少女は勢いをつけて坂に挑みかかった。

長い黒髪が翻る。

しかし、無情にも、車イスは斜面の途中で止まってしまった。後ちよつとで登りきれるというのに、そこから前に進めない。

「んんっ……！」

少女はハンドリムを掴む手に力を込めて、体を前のめりに倒して懸命に踏ん張ったが、車輪は遅々として前に進まなかった。

踏ん張りきれず、ぐぐぐつと、徐々にタイヤが斜面を後退しだす。ハンドリムを掴む指が汗で滑り、少女を乗せた車イスは真つ逆さまに坂を逆走しかけた。

「あっ……！」

少女は慌ててブレーキをかけようとしたが、遅かった。

車イスが斜面に対して半回転し、少女の体が車イスから放り出された。坂の下に向けて投げ出される。

「きゃあ……！」

「危ない！」

後方で少女のアタックを見守っていた和隆は、とっさに駆け出し、両手を広げて少女を受け止めようとした。何とか少女の体をキャッチする。

が、衝撃を吸収しきれずに体勢を崩し、二人はそのままどさつと地面に倒れ込んだ。

「痛っ……！」

少女を受け止めるのに必死で、受け身を取る暇がなかった。強か腰を打ちつけてしまい、小さく呻く。

腕の中の少女が慌てて顔を挙げた。

「ご、ごめん……！　だ、大丈夫！？」

「そっちこそ……怪我はないか？」

少女は和隆に抱きつくように……和隆に覆いかぶさるように地面に倒れ込んでいた。

物凄い密着感。

少女の小さなふくらみが、和隆の胸板に触れていた。

目と鼻の先に、少女の顔があった。桜のように薄桃色をした小振りの唇が、目の前にある。

「あっ……」

至近距離で目と目があった。

数秒間。

まるで時が止まったかのように、二人はじっとお互いの瞳を見詰めて合っていた。

すぐ側で、倒れた車イスの車輪がカラカラと音を立てて空転していた。二人の体に、雨のようにひらひらと桜の花びらが舞い落ちる。

二人は顔を赤らめて、慌てて視線を逸らした。

「ご、ごめん、今退くから……！」

少女は慌てて和隆の上から退こうとしたが、足が動かずままならない。和隆の胸の上であたふたとしていた。

見た所、少女に怪我はないようだ。

和隆はほっと安堵の息を吐き出しながら、彼女の額にチョップを繰り返した。

「とりあえず落ち着け」

最近の女子高生は制服のスカートを膝上十数センチと短く改造してはいている者が多かったが、彼女は逆に、膝下丈の長めのスカートをはいていた。

倒れたショックで少女の下半身を覆っていた膝掛けはどこかに吹き飛び、スカートがめくれ上がって少女の生足が露わになっていた。その足は、ゾツとするほどか細く見えた。

もう何年も自分の足で立って歩いたことがないような、細く脆弱

な足。靴下のゴムも、細い足首を締めつけきれずにスカスカ気味になっただけ。

何だか見てはいけないものを目の当たりにしたような気がして、和隆は言葉に詰まり、思わず視線を逸らしていた。

乱れたスカートの裾を指先で払って手早く直し、少女を傍らに座らせる。

和隆は転倒した車イスを持ってきた。

「一人で座れるか？」

「うん。そこ置いといてくれる？ 自分で上がれるから……」

少女は車イスを引き寄せ、自力でその座席に這い上がった。両足を引きずりながら体勢を整え、後ろ向きに肘掛けに両手をついて、よいしょと体を持ち上げる。

その動作を見ながら、和隆は心の中で呟いた。

（本当に、足、動かないんだな……）

彼女は自分の太ももを両手で掴み、まるで物を扱うかのような手付きで、自分の両足を持ち上げていた。車イスの足乗せ、フットレストの上に足を下ろす。

そこまでやって、少女はようやくふうと一息ついた。

和隆の顔を見上げ、少女は申し訳なさそうに謝った。

「ほんまごめんな、ありがとう……助かりました」

「何にしても、怪我がなくて良かったよ」

和隆は放り出されたベージュの膝掛けを拾い、砂ぼこりを払って少女に渡した。

腰に手を当てて忠告する。

「あんまり無茶な事するなよ？ やっぱりこの坂は一人では無理だね。一人では通ろうとしない方がいい」

「うん、そうやね……」

彼女は車イス生活者である自分の限界、一人で行動出来る範囲の限界を知って、やるせなさそうに頷いた。

「行けると思っただけだなあ……」

顔にすつと影が落ちる。

このまま放つてはおけないな。

和隆は気落ちしている彼女に声をかけた。

「これから下駄箱の方に行くのか？ 俺が後ろ押して連れて行つてやろうか？」

しかし、少女はふるふると首を振って答えた。

「いや、そこまで面倒はかけられないわ。向こうで先生と会う事になってるし、そこまでは一人でも行けるから……。うん、大丈夫です」

和隆に心配をかけないようにと、少女は健気に明るい声を出していた。

「そうか？」

「支えてくれてありがとう……。じゃあ、私は行くわ」

彼女は礼を言っ、一人で車イスを操り、校舎の向こうに去って行った。

が、渡り廊下を横切ろうとして、そのちょっとした段差に車イスのタイヤが引っかかってしまい、立ち往生していた。

「ん、あれ……？」

少女は足元を見下ろして、車イスをガシंगाシンと前後させていた。

何だか見ていてひやひやするな。

「やっぱ手伝おうかー？」

口元に手を当てて後ろから声をかけると、「大丈夫、平気ですよー」という気丈な返事が返ってきた。

少女は一度車イスを引いて勢いをつけて、なんとか段差を乗り越えた。

和隆の方を振り返って照れ臭そうにはにかんで笑い、小さく手を振って、今度こそ彼女は本当に去っていった。

その姿が校舎の向こうに消える。

和隆は少女が見えなくなるまで、その後ろ姿を見守っていた。

その後、振り返って背後にある裏門を見詰めた。

学校裏の急勾配。

どこにでもあるような、ちょっとした登り坂。

普通の人には何でもないような坂だけど、彼女のような車イスの人間には……一人では越えられない道だった。

ここは古い学校だ。

校内にエレベーターは付いていないし、バリアフリー化もされていない。

一人では階段を上り下り出来ないし、わずか一センチの、ハイハイをする赤ん坊にだって簡単に乗り越えられる段差にも、彼女はいちいちつまづくことになる。

こんな設備の整っていない公立の高校に転入してきて、彼女はやっていけるのだろうか？

そんな事を考えてながら、少女の去っていった方向を見詰める。

と、学校のチャイムが鳴った。

「しまった、完全に遅刻だ」

和隆は腕時計を見下ろし、慌てて下駄箱の方に走り出した。

1 - 1 桜並木と車イス（後書き）

これは以前、別の場所に投稿したものに細かい修正を加えた改訂版です。

知ってる人も知らない人も、よければよろしくお願いします。

1 - 2・遙係り

―2―

下駄箱で靴を履き替え、和隆は校舎の四階に上がった。これから一年間お世話になることになる3 - 1の教室に向かう。

もう先生が来てHRを始めているだろうと思い教室の後ろからこっそり中に入ろうとしたが、教室の引き戸は滑りが悪く、予想以上にガタガタと大きな音を立てた。

席についていた生徒たちが一斉にこちらを振り向く。

和隆はしまったという顔をしながらキョロキョロと教室の中を見回したが、教卓のどこにも、教師の姿はなかった。

「……あれ、先生はまだか？」

「なんだ、赤坂かよ」

現れたのが先生ではないと知ったクラスメートたちは、居住まいを崩してそれぞれ友達らとの雑談に戻った。席から離れたりして、休み時間中のようにガヤガヤと騒がしくなる。

とりあえず初日から遅刻扱いされるのは免れたようだ。和隆はふうと安堵の息を漏らし、自分の席を探した。

「高三に進級した早々遅刻してやってくるとは、大物ですな」

一番後ろの席についていた男子生徒が声をかけてきた。

それは中学の頃から付き合いのある旧友、渡辺若文（わかふみ）だった。「よっス！」と嬉しそうに手を挙げる。

「おお、若文。また一緒のクラスか」

和隆も手を挙げて答えた。

彼とはこれで中学高校と六年間、全部同じクラスだ。

二人の名字は赤坂と渡辺なので、出席番号順に並ぶと一番前と後ろになる。初めて出会った頃は席も遠く接点はなかったのだが、いつの間にか親しい間柄になっていた。

「また一年一緒だな」

彼は嬉しそうにニコニコと笑っていた。

「いい加減お前の顔も見飽きたよ」

「そう言っなよ。俺とお前の仲じゃなあい」

なぜか彼は、お姉口調で媚を売ってきた。

若文はずりずりとイスを引きずり、座イスごと体をこちらに向けた。

「ところでさー、和隆。春休み中お前の携帯に電話が繋がらなかったんだけど、どうかしたのか？」

和隆は何気ない口調で答えた。

「ああ、ちよつとな」

「ちよつと、なんだよ？」

「ちよつと讃岐うどん食いたくなつたから、香川まで食べに行つたんだ」

そう答えると、彼は訝しげに「香川あ？」と言って眉をひそめた。

「香川って……あの、四国の？」

「うん」

「県庁所在地が高松の？」

「うん。いいとこだったよ。うどんも美味かつたし」

「一人で行つてきたのか？」

「ああ。えっちらおっちら自転車で」

彼は驚きの表情を作り、大仰に叫んだ。

「自転車でっ!？」

「なんだよ、変な声出して？」

「いや、『ちよつと自転車で行ってきました』って言うけど、ここから四国まで四百キロ近くあるじゃん。それを全部、自転車で走破したのか？」

和隆は平然とした顔でまあなと答えた。

「さすがに日帰りですって訳にはいかなかったから、公園とかで野宿しながら行ってきた。途中で携帯の電池が切れたことには気付いたんだけど、まあいいかーって思っ

「はあ……」

「ついでに吉野にも寄って、桜見ながらお餅食ってきたよ。さすが桜の名所だな。すげー綺麗だった、吉野」

「はあ……」

「で、これがお土産」

和隆はゴソゴソとカバンを漁り、友人に香川県で買ってきた携帯電話のストラップを手渡した。

それは、その地方の名産品などを模したご当地マスコット、うどんのゆるキャラのストラップだった。

彼は手渡されたストラップを空中でプラプラと揺らし、呆れ顔をしていた。

「相変わらず無駄に行動力あるよな、お前。帰宅部のくせに」

「帰宅部なのは関係ないだろ」

「まったく。お前のせいで、俺の携帯は重くなる一方だよ」

若文はぶつくさ文句を言いながら、ポケットから自分の携帯電話を取り出した。

その携帯には、すでに十数個のゆるキャラのストラップがくくりつけられてあった。全国津々浦々のご当地マスコットたち。みな和

隆が一人旅に出掛けては、旅先で買ってきたものだ。

どこか遠くに出掛けては、ご当地マスコットのストラップを買って帰ってくる。それが目下のところの和隆のライフワークだった。学生の身なのであまり時間も金もないが、いつか四十七都道府県、すべてのゆるキャラを制覇したい。

「こんなにプレゼントされてもいらねえっの」

彼は愚痴をこぼしながらも、新たにプレゼントされたゆるキャラのストラップを携帯電話にくくりつけていた。

「邪魔くさいなら、わざわざ全部付けなくてもいいんだぞ？」

そう忠告したが、彼は真面目な表情をして首を振った。

「いや、まあ、せっかくお前が買ってきてくれた物だし」

割かし律儀な奴である。

「それにね、こういう物を一杯付けてたら、初対面の女の子とも話しやすいんだよね」

和隆は首を傾げて問い返した。

「女の子？」

「話の取っ掛かりになるんだよ。これは何県のどこどこで買った、なんとかっていうキャラクターで……とか」

つまり、ナンパ目的で付けているのか？ 会話のきっかけを作るいい話の種になるからと？

「何とかとハサミは使いようってね」

彼は得意げな顔をして、ゆるキャラだらけの携帯をジャラジャラと振って見せた。

「これ全部、俺が自分でツーリングして買って来たって事になってるから。そこんとこの口裏合わせは、よろしく！」

ビシッと、軍人のように敬礼をしてくる。

和隆は苦笑しながら肩をすくめた。
「ま、いいけどね」

若文は新たに加わったうどんのゆるキャラを眺めながら、質問してきた。

「お前、休みのたびにどこか出掛けてるけど、そんなに暇なの？」

「別に暇って訳じゃないけど」

「チャリンコーつで日本中フラフラしやがって。そんなに体力有り余ってるなら、何か部活でも入れればいいのに」

和隆は高一高二と、ずっと帰宅部で過ごしてきた。

部活なり趣味なり恋愛なり。一心に打ち込めるものがあればまた違ったのだろうが、自分が長期休暇のたびに自転車に乗ってフラフラと旅行に出かけるのは……彼の言うとおり、体力が有り余っているせいだろう。

何かをしたい、何かを成さねばならないという焦燥感はあるのだが、自分の体の使い方が分からない。

で、有り余る体力を持て余して、スナフキンのように気まぐれな旅をする。

そんな和隆を小馬鹿にするように、あるいは少し羨ましそうな顔をして、彼は「この根なし草め」とやかみ言葉を口にした。

「もしかして今日遅刻したのも、そのせいかな？ 今朝ツーリングから帰ってきたとか？」

「いや、それとこれとは無関係だよ」

「だったらなんで？」

「登校中な、学校のすぐそこで……」

裏門の方を指差しながら遅れた訳を説明しようとしたが、和隆は車イスの少女の名前を聞いていないことに気付いた。

「あー……なんだっけ？」

中途半端なところで言葉を区切った和隆を見詰め、若文は首を傾げた。

「なんだよ？」

「ああ、いや……。まあ、いつか。後で話すよ」

じきに先生が来てしまう。和隆は手を振って若文の席から離れた。みんな出席番号順に座っているらしく、和隆の席は廊下側の一番前だった。夏は天国のように涼しいけれど、冬は地獄のように寒い席だ。和隆はカバンを置いて席に着いた。

— 3 —

しばらくして担任の教師がやって来た。

三十代の、眼鏡をかけた線の細い男。

一重の瞳とキラリと鋭い銀縁眼鏡のせいだろうか。何となくつつきにくい印象がある教師だった。

担任は「遅くなってまない」だとか、「これから一年よろしく」などと簡単に挨拶し、その後教卓に手をつき、重大発表をするように勿体ぶった態度で生徒たちの顔を見回した。

「えー、突然だが、このクラスに転校生が加わることになった」
その言葉に和隆は反応した。

「……転校生？」

「高三で編入なんて珍しいな」

クラスメートたちもざわざわと色めき立つ。

「さっそく紹介しよう。入ってきて」

担任が廊下に声をかけた。

全員の視線が教室の扉に注目する。

ガラガラと軋んだ音を立てて、ゆっくりと引き戸が開かれた。
転校生が現れる。

皆の視線を一身に受けて3・1の教室にしずしずと入って来たのは、車イスに乗った少女だった。

貞子のように前髪が長すぎの感がある、ベージュ色の膝掛けをかけた女の子。車イスのグリップには、スヌーピーの人形がぶら下がっていた。和隆が桜並木の下で出会った、さっきの子だ。

少女は緊張した面持ちで両腕を動かし、車イスの車輪を回して教室の中に入って来た。

しんと静まり返った教室に、車イスの軋む音が静かに響く。

少女は教卓の横まで移動し、車イスを半回転させてみんなの方を向いた。

誰かが呟いた。

「車イス……」

転校生はどんな奴だと期待して教室の入り口を見詰めていたクラスメートたちは、面食らったような、期待を裏切られたような顔をしていた。

可愛い子だったらいいな、だとか、格好いい男の子だったらどうしよう、などとワクワクしながら待っていたクラスメートたちは、車イスの少女を見た瞬間、一様に口をつぐみ、異物でも見るような目をして少女のことを見詰めていた。

——転校生は障害者。

教室の空気が凍りついたような気がした。

「関西からの転校生、春川遥さんだ」

そんな空気に気付いているのかいないのか、担任は構わず少女のことを紹介した。

「見ての通り足が不自由で車イス生活を送っているの、色々不自由することもあるだろう。みんなで助け合い、力になってあげるように」

教室内はしんと静まりかえっていた。

担任はみんなの顔を見回し、返事を期待するようにもう一度「力になってあげるよーに」と繰り返したが、誰も返事をする事が出来なかった。

クラスメートたちは戸惑い気味にお互いに顔を見合わせ、ひそひそと小声で喋りだした。言葉にならないざわめきが、さざ波のように教室中を行き交う。

何も、障害者を初めて見た訳ではない。

誰しも町中や病院などで、車イスに乗った人間を見たことがあるだろう。

でもそれは、あくまでも「自分には関係のない赤の他人」だった。町中で車イスの人を見かけても、すぐに視線を逸らして通り過ぎる。それで許される程度の距離感。その程度の関係性。

まさか自分と同じ学校、同じクラスに車イスの身体障害者が転入してくるようになるとは夢にも思わなかったに違いない。みんなどう反応したものかと戸惑い、困惑していた。

障害者。

車イスの女の子。

それがクラスメートになると言う事。

和隆は体を起こし、じっと少女のことを見詰めていた。

「はい、君からも挨拶して」

担任が遥の肩に手を置いて促した。

遥は頷き、みんなの顔を見回した。心持ち背筋を伸ばす。

「私は……」

その時、和隆と少女の目が合った。

まさか別れてすぐにこんな風にして再会するとは思っていなかったのだろう、彼女は驚いたように目を見張っていた。

和隆が黙って頷くと、彼女もこくと頷いた。

大きく息を吸い込み、改めて正面を向いて自己紹介をする。

「兵庫県から来ました、春川遥です。こんな体なのでみなさんには色々と迷惑をかけると思いますが、よろしくお願いします」

彼女は膝に手を置いて、深々と頭を下げた。

初めての挨拶という事で方言を抑えようとしていたようだが、関西特有の独特のイントネーションは隠し切れてはいなかった。けれど、よく通る澄んだ声だった。

「みんな仲良くなー」

担任が拍手をして転校生を迎え入れた。それに釣られるように何人かの生徒がパチパチと手を叩いたが、多くの者は手を動かさずに黙っていた。

パチパチパチ。

まばらすぎる拍手が、白けたような空気の教室に響く。

微妙に間が開いた。

「ええと……」

担任はゴホンと咳払いをして、気を取り直して喋り出した。

「この通り、彼女は両足が不自由だ。階段の上がり下りも一人では出来ないし、トイレに行くのも難しい。そこでこのクラスでは、『遥係り』というものを作ることにする」

「……遥係り？」

誰かが尋ね返した。

「みんなも知つての通り、この学校にはエレベーターもないし、車イス用のトイレもないからな。誰かが手を貸してやらなければ、こ

の子はこの学校で生活出来ないだろう。だから明日から、毎日交代でお前たちには遥の世話をしてもらいたい」

言葉を続ける。

「男子は階段の上がり下りを、女子はトイレの時に、彼女に手を貸してやるんだ」

「ええー!？」

そのセリフを聞いた瞬間、一斉にブーイングが起こった。

明確な言葉にはならなかったさざ波のようなひそひそ声が、大きな津波になった。教室中が騒がしくなる。

「何だよそれ!？」

「聞いてねーよ!」

生徒たちは口々に文句を言った。

この反応を予想し、予め覚悟していたのだろう。車イスに座る彼女は、今にも泣き出しそうな感じで、力なく自虐的に微笑していた。顔を俯かせる。

…… ああ、またか。

そうつ風風に、彼女は全てを諦めたような顔をしていた。

「なんで私たちがそんなことしなくちゃならないんですか!？」

ある女子が叫ぶ。

「今年は受験だっていうのに、他人の世話なんか焼いてる暇ないよ」

「なんでこんな子がうちのクラスに……」

少女の小さな体に、鋭いナイフにも似た言葉が雨のように降り注いだ。

ざわめきは治まらない。

担任はため息交じりに言った。

「仕方ないだろ、障害者なんだから」

仕方ないだろ、障害者なんだから。

本人は意識せずに、何の気もなしに呟いたのだろうが、その言葉が遥の胸の奥深くにぐさりと突き刺さり、心をえぐったのが分かった。

予め覚悟をしていたとはいえ、心を鎧で覆い尽くすことなんて出来やしない。

言葉はいつでも残酷だ。

たやすく人の心を傷付ける。

少女の肩がビクツと震え、膝の上に置かれた彼女の両手が硬くなったのが分かった。痛みに耐えるように、ぎゅっと拳を握りしめている。

遥は居たたまれなさそうに顔を伏せていた。長すぎる前髪の陰に隠れて、彼女の表情が見えなくなる。

学校というある種の社会の縮図の中で、その刺々しいすさんだ空気にさらされて……遥の肩は、小さく震えていた。まるで雨の中の子犬のように。寄る辺ない子猫のように。

思えば先程担任の言った「お前たちには遥の世話をしてもらいたい」というセリフもひどい物だった。まるで厄介な生き物をクラスで飼うことになった、みたいな言い草だ。担任自身、遥のことを「面倒な物を背負いこまされたものだ」とでも思っているのかもしれない。

萎縮してじつと痛みに耐えている少女を見詰め、和隆は自分でも気付かぬうちに立ち上がっていた。

バンツ！ と大きく机を叩く。

突然立ち上がった和隆に驚き、クラスメートたちは口をつぐんだ。教室内は一転、水を打ったようにしんと静まり返った。みんなの

視線が和隆に集まる。

一拍の間。

「……まだ話の途中だろ。黙って聞けよ」

言い終わった瞬間には、和隆は己の不甲斐なさを呪っていた。
情けない。

なんという低能さだ。

もっと他に、言うべきことがあっただろう。

これが映画やドラマの主人公ならば、人々の視線に触れるようないいセリフを吐いてこの場を丸く収めていたのだろうが、決まりが悪くて、居たたまれなくて……ただのガキである和隆には、そんな言葉しか出てこなかった。

和隆はわざとガタンツと大きな音を立てて、乱暴に椅子に座った。誰とも目を合わさず、むすっとした顔をしてじっと正面を睨みつける。

遥は俯かせた顔を上げて、目をパチクリさせて和隆の顔を見詰めていた。

そして感謝するように目を細め、彼女は声には出さずに「ありがとう」と口の形だけで言った。

照れくさくなって、和隆は視線を逸らした。

教室内が静かになったので、担任は仕切り直した。

「ええと……と、とにかく！ 彼女は人の助けがないと学校生活を送れないんだ。みんなにも力を貸してもらおうぞ」

担任は強制的に言い、教室の最前列にいる和隆の方を指差した。

「ちょうどいい、赤坂。初めての遥係りはお前に任そう。まずは出席番号が一番の男女、赤坂と石川が遥の面倒をみてやるんだ」

和隆はチラリと横目で、隣の席の女子の様子を盗み見た。

彼女は髪の毛を茶色に染めていて、HR中だというのに、我関せずという風に爪の手入れをしていた。見るからに今時の女子高生、

という感じの女の子である。

名前を呼ばれた彼女は眉間にシワを寄せて、舌打ちしながら小声で呟いた。

「うつわ、最悪……」

忌々しげに遥の事を睨んでいた。

担任は「この話は以上！」と手を打って話を終えた。

教卓の隣りにいる遥に言う。

「君も席に着きなさい。席はあそこだ」

「はい」

遥は車イスのハンドリムに両手をかけて、動かした。ゆっくりと車イスを前進させて、机の間を抜けて自分の席に向かう。

その一挙手一投足を観察するように、クラスメートたちはじつと遥の事を見詰めていた。

みんなはひそひそと声をひそめて、あるいは聞えよがしに囁いていた。

「車イスだなんて面倒くせえな……」

「このクラス、ハズレだわ……」

「なんで俺らのクラスに……」

「障害者用の学校行けばいいのに……」

理不尽なナイフのような言葉が飛び交う。

敵意といってもいいほどきつい眼差しが、少女には注がれていた。そんな中、彼女はピンと背筋を伸ばして車イスを進めていた。そこには先程までの怯えや、委縮した雰囲気はなくなっていた。

こんな所でくじけるな、負けるものと強くまっすぐな瞳をしている。

遥の席は予め椅子が撤去されていた。彼女は自分の席に車イスこ

と納まり、じつと黒板を見詰めた。

その顔は、差別や障害など、この世のすべての物に真っ向から勝負を挑むように、凜としていた。

1 - 2 ・ 遙 係 り (後 書 き)

念のためおことわり。

設定が設定だけにアレな描写も出てきますが、障害を持つ方を貶めるもの、差別や偏見を助長するものではありません。

1 - 3 ・ポケットにスノーピー

— 4 —

翌日、桜並木の下を通って登校。相変わらずポカポカといい陽気だった。

昨日は遅刻してしまったが、和隆は今日は時間通りに登校していた。前後に高校生の群れが歩いている。

裏門から学校に入り、欠伸交じりに玄関へ向かった。

下駄箱で靴を履き替えようとしたのだが、そこには見知らぬ外履きの靴が納まっていた。

「誰のだ、これ？」

俺の上履きはどこにいったんだと辺りをキョロキョロと見回して、気付いた。ここは去年まで使っていた、二年生の下駄箱だ。

どうやらまだ眠気が取れていないらしい。和隆は頭をかきかき三年の下駄箱へと移動し、自分の使い古された上履きを発見した。

屈んで靴を履き替えていると、「よーッス」と声をかけられた。

そこには旧友の若文が立っていた。

「おはよーさん」

挨拶を交わす。

彼は下駄箱から自分の靴を引っ張り出しながら言った。

「いやあ、間違えて二年の方の下駄箱に行っちゃったわ」

「ああ、俺も」

「俺たちも、もう三年生になったんだよなあ。慣れるまで時間かかりそうだな」

「な」

靴を履き替え、並んで廊下を歩いた。

階段を見上げ、若文はげんなりした表情を作って肩を落とした。

「今日から毎日、四階まで上がっていかなきやいけないのか……嫌になるな」

朝っぱらからグロッキーになっていた。

「なんでエレベーターないのかな、この学校」

「公立だもん、仕方ねーよ」

そんな詮無い会話をしながら、二人は階段に足をかけた。

「あー……」

階段を五段目まで登った所で、和隆は思い出した。

「ん、どうした？」

若文が振り返る。

「もう来てんのかな？」

「誰が？」

「春川遥」

「ああ……そっぴやお前、遥係りだったか」

二人は階段を下りて下駄箱に戻った。

彼女の靴箱を調べると、そこには白い上履きがきちんと揃えて並んでいた。どうやらまだ登校してはいないらしい。

遥が登校してくるのを待たなければいけない。

「若文は先に教室行っていいよ」

和隆はそう言ったのだが、彼は「俺も付き合っよ」と気さくに答えた。

一人では裏門を上がって来れないから、多分彼女は、学校の周りをぐるりと回って正門の方からやって来るだろう。二人はグラウンドを横切って正門へと向かった。

校門の所には、登校してくる生徒たちに朝の声かけをしている教師が立っていた。

「車イスに乗った三年の女子って、もう登校してきました？」

「いいや、見てないな」

教師はスカートが短すぎな女生徒を見つけては、「その女子、スカートの裾を短くしすぎだ。もっと下ろしなさい！」などと注意していた。

二人は教師の脇に立って遙が登校してくるのを待った。

ポケットに手をつ込み、手持ち無沙汰に空を見上げる。

若文が口を開いた。

「先生が転校生って言った時は『どんな子だろう？ 可愛い女の子だったらいいなあ』とか思ったけど、まさか車イスの女の子だったとはねえ」

何気なく言ったその言葉に、和隆は半ば鼻白んで旧友のことを睨みつけた。

「ああ？ なんだよ、お前まで何か文句があんのかよ？」

「いや、文句はないよ」

「じゃあなんだよ？」

「他意はないよ。ただ少し驚いたってだけで……何怒ってんのさ？」

若文は突然不機嫌そうな顔をして怒り出した和隆を見詰め、首を傾げた。

「……別に。なんでもねーよ」

和隆は仏頂面をしてそっぽを向いた。

昨日のクラスメートたちの態度を思い出したら、なんだか余計にむかつ腹が立ってきた。

彼女は何も、悪いことはしていない。

ただ車イスに乗っているだけだ。

足が動かず、車イスに乗っているだけだ。

一番辛いのは彼女自身であるはずなのに、それなのになぜ、彼女があんな矢面に立たされなければならないのか。

教室の前で萎縮して、じっと拳を固めて耐え忍んでいる彼女の姿が脳裏に蘇ってきた。

和隆は苛立ちを紛らわせるために、ふんと勢いよく鼻を鳴らした。

若文が言葉を続けた。

「車イスに乗ってたけど、彼女、どれくらい足が悪いのかな？」

「……どれくらいって？」

「手すりや補助器具があれば何とか歩けるくらいなのか、本当にまったく足が動かないのか。それによっちゃ俺たちの仕事……っていうか、接し方も変わって来るじゃん？」

和隆は昨日の教師の口ぶりを思い返した。

あれは「全治何ヶ月かの怪我を負ったので、完治するまでの間みんなで面倒を見てあげましょう」だとか、そんな感じではなかった。彼女は恐らく、この先一生、車イス生活なのだろう。

裏門で見た彼女の細い足を思い出す。あの感じでは、自分で立つこともままならないのではないだろうか。

しばらくして遙が登校してきた。

腕を大きく動かして車イスを前進させて、桜の花びらの舞う道をやってくる。

その後ろには車イスを押して補佐してくれる者の姿はなく、相変わらず彼女は一人だった。足元を見下ろし、機械のように規則的な動作で車イスを転がしている。口パクで何かを呟いてるのが見て取

れた。また昨日のように、心の中で「いいーい、にいいーい、さんまのしっぱ……」と数え唄を歌っているのかもしれない

緩やかな坂を登り切って学校の敷地内に入り、彼女はふうと大きく息をついた。

和隆と若文は少女に歩み寄り、声をかけた。

「おはよう、春川」

突然声をかけられ、彼女は驚いたように顔を上げた。

「あ……お、おはよう」

上履きに履き替えているのにこんな所に突っ立っていた和隆らを見上げ、遥は不思議そうに首を傾げた。

「こんな所で何やってるん？ 誰か友達でも待ってたん？」

「お前を待ってた」

「え？」

「ええと、ほら、その……遥係り」

和隆が言つと、彼女は「あ、ああ……」と頷き、申し訳そうに顔をしかめた。

「そうか、私が登校してくるのを待っててくれたんか……。わざわざごめんな」

彼女はひどく恐縮していた。

並んでグラウンドを横切りながら、遥が和隆に言った。

「昨日はHRの時、庇ってくれてありがとうね」

「別に……俺は何もしてないよ」

実際、和隆は何もしていなかった。

冷たい言葉の雨に打たれる彼女を見て居たたまれない気持ちになつて、何とかしてやりたいと思っただけで、結局何も出来なかった。ただ立ち上がって、お前ら静かにしろよ、などと学級委員長的なセ

リフを吐いただけだ。

それでも彼女はうつんと首を振った。

「みんながああいう反応するのは、無理ないと思う。私やって逆の立場やったら、面倒だな、同じクラスにはなりたくないな、って思ってたかもしれないし……。それなのに、あんな空気の中、みんなのことをいさめてくれて……。だから、ありがとう」

彼女はぺこりと頭を下げた。

顔を上げて、嬉しそうに目を細めて微笑む。長い髪の毛がさらりと揺れる。

改めてこんな風にお礼を言われても恥ずかしい。何となくばつが悪くなり、和隆はもう一度「俺は何もしてないよ」と言った。

「ええと、二人の名前は……赤坂和隆くん、やつけ？」

「ああ。で、こっちは渡辺若文」

「以後よろしく！」

隣を歩く若文は、八十年代の好青年のようにピツと指を振って挨拶した。

「赤坂くんには裏門の時といい、お世話になりっぱなしやなあ」

「裏門？ なになにに、裏門で何かあったの？」

若文が首を突っ込んできた。

遥が簡単に説明する。

「裏門の所はちょっとした坂になってるやんか？ 昨日の朝、そこを無理に通ろうとして倒れそうになったのを、赤坂くんが助けてくれてん」

「へえ、そんなことしてたんだ、お前」

「まあ……な」

あの時は倒れそうになった遥を受け止めようとして、思わず彼女

を抱きしめる形になってしまった。

その時のことを……超至近距離でお互いに見詰め合った時のことを思い出し、和隆はなんとなく気まずい気分になって赤くなった。ちらりと遙のことを見下ろすと、遙も和隆のことを、ちらりと長い髪の毛の隙間から見上げているところだった。

一瞬、二人の視線が絡み合う。

まるで小学生の男女のように、二人は顔を赤らめて慌てて視線を逸らした。

急に赤くなってそわそわしだした二人を見て、「どうしたんだ？」と若文が不思議そうに首を傾げていた。

「そ、そんなことより、それ何なん？」

話を変えるべく、遙が若文のポケットからジャラジャラと覗いているたくさんさんの携帯ストラップを指差した。

「ずいぶんと沢山、ストラップを付けてるんやね？ それ全部、ご当地もののゆるキャラ人形？」

「ん？ おお、よくぞ聞いてくれました！ これはね、実は今年の春休みに自転車で香川に行った時に買ってきた奴で……」

彼は和隆が買ってきたストラップを使って、さっそく楽しげな口調でナンパトークをしていた。

一行は校舎の玄関前に到着した。

下駄箱が並んでいるフロアに上がるには三段の小さな階段を上らなければならないのだが、そのたった三段の段差ですら、車イスの彼女は自力では登れなかった。教員用の下駄箱の方に設けられているスロープを使い、大きく迂回して段差をクリアする。

3 - 1の下駄箱へ。

「よしよ、っと」

彼女は下半身を覆っていたベージュ色の膝掛けをめくり、自分の足を持ち上げた。車イスのフットレストに乗せていた足を引き寄せ、靴を脱がし、上履きに履き替える。

靴を履き替えるという常人には何でもない動作も、車イスの彼女には大変そうだった。

上履きも外履きも全然汚れておらず、新品同様にピカピカのままだった。

靴を履き替えている彼女の姿を見守りながら、和隆はひとり言のように呟いた。

「やっぱり靴、履き替えるんだな」

何気なく口にしてしまったが、すぐにハッと気付いた。

今のは、嫌味だっただろうか？

どうせ歩けないんだし、わざわざ靴を履き替える必要があるの？
だとか、そんな悪意のある風に受け取られはしないだろうか？

「あ、いや、その……」

慌ててフオローしようとしてあたふたとしている和隆を見て、遥は静かに微笑んだ。

「そんなに気を遣わんというて。普通に接してくれてかまへんよ」
逆に気を遣われてしまった。

和隆は気まづげに口をつぐんだ。

「……すまん」

普通に接してくれと言われても、なかなか難しいものがあつた。
今まで車イスの人間と触れ合ったこともないし、なんだか気後れしてしまう。

意識しないようにと意識するたびに、その思いは強くなってしま

った。頭のどこか片隅で、「障害者」という単語がチラチラとちらつく。

和隆は遙に尋ねた。

「靴を履かせるの、手伝おうか？」

「ううん、大丈夫。平気。自分で出来ることは、なるべく自分でするようにしてるから。時間がかかってごめんやけど」

「そんなことは気にするなよ。なあ？」

同意を求めるように話を振ると、隣の若文も頷いた。

「ああ。ゆっくり自分のペースでやりやあいさ」

膝掛けがめくれ、スカートの裾から細い足が覗いていた。

ふと、和隆の脳裏に、ある疑問が浮かんできた。

この子はいつから、車イスで生活をしているんだろう？

生まれつき足が悪いのだろうか？ それとも最近、事故か病気を
して車イス生活に？

まだ出会って二日目だし、足のことを訊くのは失礼だろうか？

もし話にくい事だったら、質問するのも悪いし……。

そんな事をゴチャゴチャと考えていると、隣に突っ立っていた若文が遙に尋ねかけた。

「ところでさ、どうして遙ちゃんは車イスに乗ってんの？ 生まれ
つきの病気が何か？」

「うおい！」

和隆は思わず盛大にツッコんだ。

旧友の首根っこを掴んで後ろを向かせ、ひそひそと忠告した。

「おい、いきなり何を言いだすんだよ、若文！？」

「いや、だって気になるじゃん？」

旧友はあっけらかんとした表情をしていた。

「同じクラスメートなんだし、いつか誰かが訊くでしょ？」

彼は基本的には気さくなイイ奴なのだが、ノリが軽いのが玉に傷である。遠慮という言葉を知らんのか。

「だからって、もつと言いつつとか、タイミングってもんがあるだろ」

「そうかな？」

「そうだよ」

ひそひそと内緒話をしていると、背後の遥が笑って言った。

「ええよ、ええよ。何でも質問してくれて」

彼女はまるで動じてはいなかった。

和隆は複雑な表情を浮かべながら、遥の顔を見詰めた。

自分は、一方的に彼女に対して気を回し過ぎているのだろうか？

これではまるで、腫れ物に触れるような……おっかなびつくりとした対応だ。これならばまだ、若文の接し方の方が着飾らないというか、誠実なのではないかという気もした。

距離感が分からない。

そんな和隆の戸惑いや躊躇いもひっくりくるめて、彼女は優しく微笑んでいた。

「聞いてもつまらん話やけど……」

そう前置きして、遥は先程の若文の質問に答えた。

「中一の時にな、交通事故に遭ってしもてん。で、車体に足が挟まって……それから足が動かなくなった」

彼女は話しながら、ベージュ色の膝掛けに隠れた足をさすった。

中学一年生。

小学校を卒業し、ようやく個人の世界が広がり始めた頃ではないか。

何もかもがこれからというまさにその時、彼女はいきなり両足を

失い、車イスでの生活を余儀なくされてしまった。

その時の彼女の絶望は、いかほどだっただろう。

「そっか……」

和隆は当たり前のように動き、思うがままに歩くことが出来る自分の足をチラリと見下ろした。

三人の間に気まずい沈黙が生じた。

周りの生徒たちの明るく楽しげな話し声が、いやに大きくうるさく聞こえた。学生たちの軽やかな足音が、和隆らの傍らを通り過ぎていく。

気まずい空気を振り払うかのように、遙が切り出した。

「ねえ、スヌーピーって知ってる？」

「……スヌーピー？」

和隆は小首を傾げた。あの世界一有名な白いビーグル犬のことか？ 遙の座る車イスのグリップ部分には、小さなスヌーピーの人形がぶら下がっていた。よく見ると学生カバンにも、別種のスヌーピーのキーホルダーが取り付けられてあった。

「私はスヌーピーが大好きやねんけど、ある話の中で、スヌーピーがこんな事を考えるシーンがあるねん。『YOU PLAY WITH THE CARDS YOU'RE DEALT. WHAT EVER THAT MEANS』って」

彼女は綺麗な発音である英文を読み上げた。

「……どういう意味？」

「『配られたカードで勝負するしかないのさ。それがどういう意味であれ』って感じかな」

犬のくせに中々深いことを言う奴だな、と思った。

というか、あいつは喋れたのか？

遙は自分の足を見下ろした。

「人間生きていれば、色々あるわ。宝くじに当選する人がいる一方で、お金を騙し取られる人がいる。大きな花を咲かせる人がいる一方で、蕾のまま枯れてしまう人がいる……。この足が……。この不幸が私に配られたカードなら、私はそれを受け取って、全力で勝負するまだけだよ」

そう語る彼女の横顔は、自分の前に立ちただかる障壁などには屈しない強さがあつた。

気高さ、凛々しさといつてもいい。

車イスの少女。

自力では歩けない彼女。

和隆は「自分と同一年なのに、こんな体になってしまつて可哀想に」などと勝手に引け目を感じて痛ましい気持ちになっていたが、けれど彼女は、そんな他人の独善的な同情や気遣いとは別の次元に立っていた。

その魂の在り方は孤高である。

思わずちよつと見惚れてしまった。

少し格好つけ過ぎたと思つたのか、彼女は照れたようにはにかなかった。

「さすがスノーピー、いいこと言うよね」

遙はとぼけたような顔をして揺れているキーホルダーを、こつんと指先で突つついた。

1 - 4 学校の階段

— 5 —

靴を履き替え、三人は校舎の中に入った。

その方が楽だろうと思って和隆は車イスの後ろを押してやろうとしたのだが、彼女はそれを断った。

「あ、いいよ。自分で押してくから」

「ん、なんで？」

和隆は首を捻った。

「人に任せりゃいいのに。背後に立たれるのが嫌なのか？」

「ゴルゴ13みたいだな」

若文と共に口を揃えて不思議がると、彼女は「ちやうねん」と言っ
て困ったような顔をした。

「自分でカバーできる範囲のことは、全部自分でやろうと思っ
てるから……」

極力人に迷惑をかけないようにと心掛けているらしい。

和隆は感心したように言った。

「はあ、真面目だなー。遠慮してないでもっと人に頼ればいいのに」

「あんまり人頼みばっかしてても、甘え癖がついちやうしね」

「俺は立ってる者なら親でも使うがな」

しかし、いくら遥がそう思っている、自分で出来ることの限界
はある。

三人の前に階段が立ちふさがった。

さすがの彼女も、自力ではこの階段は上がれないだろう。

和隆らの通う高校は、鉄筋コンクリート造りの古い学校だ。エレ

ベーターなんてハイカラな物はこの校舎にはない。

「さて……」

和隆は腰に手を当てて階段を見上げた。

どうしたものか。どうやって遙を四階まで連れて行けばいいんだ？
本人に尋ねてみた。

「車イスに乗せたままでも行けるか？　こう、両脇から車イスの肘掛けとかを持つて」

「うん、それでもいいけど……」

実際に試してみよう。和隆は若文に指示を出した。

「若文、そっちを持つてくれ」

「合点」

二人は自分のカバンを肩に担ぎ、少女が乗った車イスを両脇から挟んだ。屈んで肘掛けとフレーム部分を掴む。

「春川、しっかり肘掛け掴んでろよ」

「うん」

タイミングを計り、二人は一気に車イスを持ち上げた。

「せーの！」

しかし、持ち上げる勢いと高さがズレてしまった。

遙に乗せた車イスはあばれ神輿のように空中で斜めに傾き、遙は危うく車イスから転げ落ちそうになった。

「きゃあ!？」

「やばい、下ろせ下ろせ！」

二人は慌てて車イスを地面に下ろした。

「あ、危ないな……」

数段の段差ならともかく、この方法で校舎の四階まで遙を連れていくのは危険だった。安定感に難がある。階段を上っている途中で

バランスでも崩したら、階下に真つ逆さまだ。もう少し人手があれば、遙を囲って上がっていけるのだろうか……。

和隆は遙に質問した。

「昨日はどうやって四階まで上がって来たんだ？」

「先生におんぶしてもらった」

「おんぶかあ……」

まあ、それが一番安定した運び方だろう。

「他にどんな方法があるの？ 階段の移動法」

「ええと……こうやってだっこしていくとか」

遙は両腕を前に持ち上げ、お姫様だっこのようなポーズを取った。

「お姫様だっこかあ……」

介護の世界ではメジャーなやり方なのだろうが、いくら足が悪いからとはいえ、同級生の女の子をみんなの前でおんぶにだっこするのは何だか気恥しいな……。

思春期の少年の心は微妙である。和隆は「うーん……」と呻いて頭をかいた。

「なんならこう、肩に担いでつてくてもええよ」

遙は首の後ろで人を背負いこむようなジェスチャーをした。

消防士などが負傷した人間を運ぶ時の担ぎ方、ファイヤーマンズキャリアってやつか？ 素人がそんな難易度の高い抱え方をしたら、それこそ危険な気がした。バックフリップ気味に階段を転げ落ちるぞ。

どうしたものと迷っていると、若文がポンと和隆の肩を叩いた。

「気張れよ、和隆！」

「ああ、何が？」

彼は顔を近付け、ひそひそと耳打ちしてきた。

「美少女をおんぶにだつこと、大接近出来るんだぜ？　むしろこれは、ラッキーな事ではないだろうか！」

若文は非常に大真面目な顔をしていた。

「……お前は一体、何を考えてるんだよ？」

呆れ顔をする和隆。

「よつ、羨ましいぞ、この野郎！」

「だったらお前がお姫様だっこしていけよ」

「俺の遥係りはまだまだ先だもん」

彼は他人事のように飄々と軽口を叩いていた。基本的には気さくなイイ奴なのだが、ノリが軽いのが玉に傷である。たまに友達を止めたくなってくる。

「いくらお触りし放題だからって、変なところを触ったら駄目だからねっ」

「うっせえ、バカ」

「あの……」

「ごによごによと小声で囁き合っていると、不安げな顔をした遥が声をかけてきた。

「どうかしたん？」

「や、なんでもないよ」

こんな所でいつまでも押し問答していても仕方ない。和隆はおんぶをして彼女を連れて上がることに決めた。さすがにお姫様だっこは恥ずかしい。

何だか緊張してきた。

転倒しかけた彼女を抱きとめたこともあったが、あれは無意識の、とっさの行動だ。改めて女の子の体に触れるとなつて、和隆の体は無意味にしゃちほこばっていた。

和隆は車イスの前に背中を向けてしゃがんだ。

「ええと……ほら、乗れよ」

不器用な口調で言いつける。

「ごめん、もうちょっと近付いてもらっていい？」

「こ、こうか？」

和隆はしゃがんだまま、言われた通りにズリズリと少し後退した。

遥はお尻をずらして車イスの前方に移動し、身を乗り出して和隆の肩に手をかけた。

「じゃあ、いきます」

「おう」

自分では結構近付いたつもりでも、実際には、二人の間は距離が開いていたらしい。遥は少し勢いをつけて、半ばダイブするように和隆の背中に飛び乗って来た。

「うおうっ!？」

思わず前のめりに倒れそうになる。

背中 of 遥が慌てて謝った。

「ご、ごめん! 大丈夫!？」

「い、いや、こっちこそ……」

人をおんぶするなんて久しぶりの事だった。

（えーっと……あれ? 手ってどこを持てばいいんだっけ……?）

後ろ手に手を重ね合わせてお尻を支えるんだっけ? それとも太ももの部分を持って背負うんだっけ?

和隆は一瞬混乱してまごついた。

（ああ、普通太ももを持つんだよな）

和隆はなんとか体勢を立て直し、スカートを押さえるように彼女の太ももを抱えた。

「いいか? 立つぞ」

遥の動かない足が、反動でぶらぶらと揺れた。

「おおー、結構高いな」

和隆はクラスの中でも背が高い方だった。四六時中座って生活している遥にとつては、この程度の目線の高さでも「高所」になるらしい。

「ごめんね、重くない？」

和隆の肩にちょこんと手をかけ、恐縮するように遥が言った。すまなそうに体を小さく縮こませている。

遥の頭が、和隆のすぐ横にあった。

彼女が何かを喋るたびに、耳に息が吹きかかって少しこそばゆかった。

背中に、彼女の小さな胸のふくらみが触れている。

まるで背中に全神経が集中したみたい、和隆は背中越しに彼女の体温を感じていた。背中越しに、とくんとくと彼女の心臓が脈打っているのを感じる。いや、さすがにそれは気のせいかな？ 若文が変なことを言うもんだから、変に意識してしまったではないか。

和隆はどもり気味に答えた。

「べ、別に重くないよ」

実際、遥の体は軽かった。

元々小柄な体型をしているとはいえ、少々軽すぎな気がした。四十キロ前半。あるいは、体重は三十キロ代なのではないだろうか？ ちゃんと物を食ってるのか、こいつ？

和隆はよいしょと遥の体を抱え直した。

「若文、悪いけど俺のカバンと車イス頼むわ」

「ん、分かった」

若文は和隆の荷物と、空になった車イスを持ち上げた。
「渡辺くんも、手伝ってもらってごめんね。ありがとう」

「いって事よ。気にしなさんな」

「じゃあ、行くか」

和隆は最初の一步を踏み出した。

和隆は遥を背負ったまま階段を上り始めた。

背中の上で、遥が緊張して硬くなっているのが分かった。遠慮がちに和隆の肩に手をかけて、そわそわとしている。そりゃまあ、ろくすっぽ知りもしない男におんぶをされるのは、居心地のいいものではないだろう。

周囲の生徒が、興味深そうに和隆たち一行の様子を眺めていた。会話がなく、なんとなく間が持たない。

気まずい空気を埋めるように、遥が話しかけてきた。

「赤坂くんって背中広いね」

お世辞を言ってきた。

和隆は軽く笑いながら答えた。

「なんだよ、お世辞を言っても何も出ねえぞ」

「お世辞とちゃうよ。背も高くて脚も長いし」

「母親にはもつと縮め縮めって言われるけどな」

「なんかお父さんにおんぶされてるの思い出すわ」

ポンポンと背中を叩かれた。

まさかこの年で、同い年の女の子にお父さんを彷彿とさせるなんて言われるとは思っていなかった。

「もしかしてそれは、俺がお父さん世代並みに老けて見えるってことか？」

「冗談めかして尋ねると、彼女は慌てたように「そういう意味とはちゃうよ！」と言って首を振った。

いくら少女の体重が軽いとはいえ、人一人おぶって校舎を四階まで上がるというのは、なかなか骨が折れる仕事だった。

何とか四階まで上がりきる。

「到着、つと」

若文が担いできた折りたたみ式の車イスを広げ、和隆はゆっくりと、その上に遙を下した。

「大丈夫か？ 下すぞ」

「うん……」

和隆はゆっくりと腰を落とし、慎重に遙を車イスに座らせた。

その後、安堵の息を吐き出してトントんと腰を叩く。

「ふう……。なんとか上がってこれたな」

なんだか無駄に肩がこった。

車イスの上で居住まいを正し、遙は改めて二人に感謝と謝罪の言葉と言った。

「連れてきてくれてありがとう。ほんまごめんな」

「なんだかこいつは、さっきから謝ってばっかだな。」

ありがとうという言葉の前後に、ごめんなさいという言葉がやってくる。彼女はこの先、何度人に「ごめんなさい、ありがとう」と言っては、頭を下げなければならぬのだろうか？

和隆は半ば怒ったように答えた。

「いいよ、そんなに謝らなくなつて。同じクラスメイトなんだし。困った時はお互い様だろ？」

「うん、ありがとう……」

彼女は感謝するように目を伏せた。

和隆は思った。

遥はこれから毎日、違う男子に代わる代わるおんぶされて階段を上って来なければならぬのか。

（気まずいだろうな……）

自力では歩けないのだから仕方がないとはいえ、彼女も年頃の娘さんだ。階を移動するたびに男子に体を預けておんぶにだつこでは辛いだろう。遥係りのことをよく思っていない者も多いようだし。

何か他に、方法はないのだろうか？ 車イスでの移動法。後で調べてみよう。

学校がエレベーターを設置・導入してくれるのが一番いいのだろうが、まず無理だろうなあ。工事だけで数千万円以上かかるだろうし。

三人は3 - 1の教室に移動した。

「おはよー」

扉をくぐり、遥が教室のみんなに声をかけた。

遥が手を挙げて挨拶をしても、返って来る反応は鈍かった。

聞こえないフリをしてスルーする者、かろうじて「おはよー」と返事をするも、すぐに視線を逸らして友達との会話に熱中するフリをする者など、まちまちである。

一晚経って、それぞれクラスメートに車イスの女の子が加わるという事実を受け止めたようだが、まだどこか、ぎこちない空気が漂っていた。

遥は持ち上げた手を所在なげに下ろし、居心地悪げな表情を浮かべた。

こればかりは時間が解決してくれるのを待つしかないか。いずれ彼女も、自然と3 - 1の教室に馴染む日が来るはずだ。来るだろう。来るべきである。一日も早く、その日が来ることを願う。

「運んでもらってありがとうね」

もう一度和隆らにお礼を言って、遙は自分で車イスを操って、立ち並ぶ机の間をすり抜けて自分の席へと向かった。

和隆は黒板の隅、日直の所に赤いチョークで遙係りという言葉が書かれてあることに気がついた。

その下に赤坂と、女子の石川の名前が並んでいる。

「ん……？」

しかしよく見ると、それは遙係りではなく、『運係り』と書かれてあった。

（誰だ、これを書いたのは……。わざとか……。？）

誰かが運んであげなければ、教室にやって来れない遙ちゃん……。和隆はチツと舌打ちし、乱暴に黒板の文字をかき消した。

1 - 5 ・ トイレ

― 6 ―

チャイムが鳴り、和隆らの日常が始まった。

足が不自由な障害者といっても、机について授業を受ける分には、春川遥は一般の生徒と何ら変わりなかった。むしろ私語もなく、真面目に授業を受けている姿は模範的である。なかなか頭もいいようだった。

古典の授業中、ちょっとした事件が起きた。

古典の担当教師はおじいちゃんといってもいいほどの年齢の老眼の教師なのだが、その老教師が、教科書を読み上げるようにと遥を差した。

澄んだよく通る声で、しずしずと教科書を読み上げる遥。

「座ったまま読むとは何事ですか。立って読みなさい、立って」

車イスに気付かず、老教師は席についたまま教科書を読む遥に対して怒り出した。

一瞬教室が凍りついたように気まずい空気になったが、「先生、

春川は車イスです」と和隆がフォローを入れて事なきを得た。

「ああ、そうでしたか……すみませんでした」

教師は気まずそうな顔をして言葉尻を濁した。

そんな事もありつつ、授業は滞りなく進んでいった。

休み時間。

転校生があれば……ましてやそれが黒髪的美少女となれば、クラスメートたちがその机を取り囲んで競うように質問攻めにするのが世の通例というものだが、誰も遥の机には近付かなかった。

小学生でもなし、自分から遙にちよつかいをかけて悪戯をしたりからかったりする人間はいなかったが、同時に、彼女に話しかける人間もいなかった。

中には彼女を氣遣って話しかけようとする者もいたが、実際に声をかけるには至らなかった。

理由は簡単。

どう接すればいいか分からない。

その一言に尽きる。

チラチラと横目で盗み見たりするのだが、多くの者は、地雷を踏むのを恐れて遠巻きにしていた。

そんなこんなであつという間に四時間目の授業が終わり、昼休み、昼食の時間となった。

「和隆、飯食いに行こうぜー」

若文が弁当箱の入った包みを持って和隆の席にやって来た。和隆も持参した弁当をカバンから取り出す。

「どこ行く？」

「せっかくのいい天気だし、外に行こう」

昼食は基本的に校内ならばどこで食べてもいいことになっていた。生徒たちは主に、屋上や中庭で食べる屋外組、移動するのが面倒な教室組、などに分かれることになる。

外で桜を見ながら食べるのも乙だろう。

和隆は頷いて立ち上がったが、黒板に書き直された『遙係り』の文字が目に入った。

「あー、そうだ……」

ある事に思い至る。

「ちよつと待ってて」

若文に断り、和隆は遙の席に歩み寄った。

遙は自分の机にかじりつき、教科書も仕舞わずにじっと俯いていた。何してんだ？　と思いながら、その後頭部を見下ろす。

人影に気付き、遙が顔を挙げた。

「……何？」

「春川ってお昼どうすんの？　弁当とか持ってきてる？　購買で買うつもりなら、付き合うけど」

購買部は一階にある。一人では移動出来ないだろう。なんなら自分が使いつ走りとなって買ってきてもいい。

「ああ、うん……。お弁当があるから大丈夫……教室で食べるから……」

遙の返事には元気がなかった。

というか、なんだか顔色を悪くして辛そうにしていた。ひどく具合が悪そうだった。

和隆は眉をひそめてその場にしゃがんだ。机越しに彼女の顔を覗きこむ。

「おい、どうした。気分でも悪いのか？　保健室に連れて行くのか？」

心配して尋ねかけると、彼女は長い髪をぶんぶん振り回して首を左右に振った。

「ち、ちやうねん、気分が悪いわけやないねん。ただちょっと……」

「ただ、何だ？」

遙は顔を伏せて言い淀んだ。

何やらもぞもぞと体を揺すっている。

「あの、えと……」

「何？」

彼女は恥ずかしそうに顔を赤らめながら小声で呟いた。

「お、おしつこに行きたい……」

「……はい？」

和隆は小首を傾げた。

一瞬「だったらトイレに行けばいいじゃない」などと当たり前なセリフを吐いて切り返しかけたが、すぐに思い出した。

（ああ、そうか。一人では行けない……のか？）

膝掛けに覆われた彼女の足を見下ろす。

和隆は同じ遙係りである女生徒、石川某の姿を探して振り返ったが、彼女の席はもぬけの殻だった。

「あれ、石川は？」

若文が廊下を指差しながら答えた。

「弁当を持って、他のクラスの女子たちと一緒にどっか行つたよ」

和隆は軽く舌打ちした。あの女、遙係りのことを完全に忘れているな。あるいは、忘れた振りをしてシカトしているのか……。そういえば休み時間になるたびに、彼女はよそのクラスに遊びに行っていた気がする。

「おい、大丈夫か？」

遙は猫背気味に体を折り曲げて、もじもじしていた。顔が青い。

額には脂汗が浮いていた。この様子だと四時間目の授業が始まるより以前……大分前からトイレを我慢していたな。

「なんでそんなに我慢してたんだよ。他の……近くにいる女子とかに頼めば良かったじゃないか」

「だ、だつて……」

彼女は気まずそうに目を伏せた。

そりゃあまだ親しくもないクラスメートに「トイレに連れて行つて」とは頼みづらいだろうが、こればかりは仕方ないじゃないか。

「おい、誰か付き合ってやれよ」

大声で言うのもなんだし、和隆は声をひそめて教室に残っている女子たちに声をかけた。

が、全員にスルーされてしまった。おしゃべりに熱中している振りをして、こちらを見ようともせず知らんぷりをしている。

近くを歩いていた女子を捕まえたが、パシッと手を払われた。

「今日の遙係りは、あんたと石川さんでしょ。あんたたちが何とかしなさいよ」

つれない返事をして、つんとそっぽを向いて去って行った。

「なんだよ、クラスメート甲斐のない奴め」

これだから最近の若い奴は……などとぶつぶつ文句を呟きながらその背中を睨みつける。

「そうだ、鶴木は……」

このクラスには、女だてらに剣道部の部長をやっている女子がいる。面倒見のいい性格をしている彼女ならば、嫌な顔をせずに引き受けてくれるのではないか。

そう思って和隆は教室内に視線を走らせたのだが、生憎と、鶴木舞花の姿は見当たらなかった。昼休みも休まずに、竹刀持って練習に向かったらしい。

「ええい、くそ。おい誰か……」

他に頼めそうな奴はいないかとキョロキョロと辺りを見回した時、和隆の制服の裾を、遙がぎゅっと掴んだ。

もう片方の手で自分の下腹部を押さえ、すぐるような瞳で、上目遣いに和隆のことを見詰めてきた。

「もっ……漏っちゃいそう……」

そんなことを言われ、和隆は大いに慌てた。

「ちょ……」

まずい、このままでは非常にまずい。

高校生にもなつて教室でお漏らしというのは、かなりのレベルの恥辱である。転校早々登校拒否になるかもしれない。

「ちょ、ちよつと待て、もう少し我慢しろ！ 落ち着け！ 頑張れ！」

あまり意味があるとは思えないエールを送った。

背に腹は代えられないという風に、息も絶え絶えというように、遥が言った。

「ご、ごめんやけど、君が付き合ってくれへんかな……？ その……トイレ行くの……」

「ええつ、俺がか！？」

和隆は狼狽した。

階段の上がり下りなどの力仕事ならば一向に構わないが、さすがに女子トイレに連れていくというのは、気後れした。お互いに思春期真っただ中の少女少女なのだ。気兼ねする、なんてレベルの話じゃない。

「あかん、ほんまあかん……」

限界の時が近付いているのか、彼女は瞳に涙を浮かべながら、顔を真っ赤にして和隆のことを見上げていた。唇を噛みしめて、幼い子供のように和隆の服をぎゅっと掴んだままふると震えている。……あ、おしっこ我慢してるこの顔、なんかかわいい。

一瞬変な考えが頭をよぎったが、今はそんなことを考えている場合ではない。

「ええい、分かった！ 分かったよ！」

和隆は仕方なく頷き、車イスのグリップを掴んで彼女を教室から連れ出した。

車イスを押して廊下を駆けた。

「退いた、退いたー！」

廊下にいた生徒たちは、戦車のように疾走する車イスを見て驚いて道を開けた。

トイレ前に到着。

キーツとドリフト気味に急ブレーキをかける。

さて……トイレの前に来たはいいが、どうしたものか。やっぱり男子トイレに連れて行くのはまずいよな？

和隆はひどく深刻そうな顔をして、女子トイレの赤いピクトグラムを見詰めた。

女子トイレ。

男子生徒が入って行くものなら、エッチバ力変態痴漢と謗られ罵られ、卒業まで白い目で見られること受け合いの禁断の聖地である。男子禁制、乙女の花園。

和隆は遥の後頭部を見下ろして尋ねてみた。

「やっぱり一人じゃ行けないかな？」

「とりあえず中に入って、トイレのドアを開けてもらえるかな？」
そう頼まれれば断ることも出来ない。

やたらキョロキョロと不審者の如く辺りの様子を確認しながら、和隆は車イスを押して女子トイレに踏み入った。

トイレ内には五つの個室があった。現在、使用中の個室はないようだ。とりあえず人がいなくて助かった。

一番手前の外開きのトイレのドアを開けてやった。幸い便器は洋式だった。

遙は自分で車イスを進めて個室の中に入っていきこうとしたが、入り口部分に車イスが引っかかってしまった。車幅が合わず、突っかって中に入ることが出来ない。個室内を見回すが、彼女が掴まって一人立ち出来るような手すりはなかった。

遙は絶望的な声を出した。

「手すりもない……」

「やっぱ一人じゃ無理か？」

「うん……。ごめんやけど手を貸してもらえる？」

「ど、どうすればいい？」

問いかけると、遙は自分の膝に掛けていたベージュ色の膝掛けを取り払った。スカートをはいた細い足が露わになる。多くの女生徒がスカートの丈を短くしてミニスカートに改造しているのに対し、彼女は逆に、丈を伸ばしてロングにしていた。

遙はスカートを膝の所までたくし上げて、閉じていた足を開き気味にした。

一体何をしてるんだと黙って見詰めていると、遙は股の間に出来た空間をポンポンと叩いた。

「ここに足入れてくれる？」

「はい？」

言ってる意味が分からず、和隆は呆氣に取られて尋ね返した。

「……なに、どうすればいいって？」

「こっちに来て。私の股の間に足を入れて」

聞き間違いではなかったらしい。

「え、なんで？」

戸惑って躊躇っていると「いいから、はよう」と急かされた。大分切羽詰まっているらしい。急かすようにパタパタと手招きしている。

遙に誘導されて、和隆は戸惑いながらも彼女の言う通りにした。

正面から向き合って、少し開き気味になった彼女の足の間に自分の片足を差し入れる。

「こ、こうか？」

「うん。で、そのまま頭を下げても前屈みになってくれる？」

「頭を下げて前かがみに……」

和隆は言われた通り、遙に顔を近付けるように頭を下げた。

と、いきなり遙が和隆の首に腕を回して抱きついてきた。
いきなりのハグ。

「ちよつ……！？」

人気のない女子トイレで唐突に抱きつかれ、和隆は驚いて飛び上がった。思わず体を離してしまう。

どもりながら叫んだ。

「な、なんだよ、いきなり！？」

遙が狭いトイレの個室を見詰めながら言った。

「もう少しトイレが広くて、壁に手すりでもあれば、一人でも便器に移れるんやけど……」

「あ、ああ……」

ああ、そうか。

車イスから便器に移動するために抱きついてきたのか。和隆にそこまで運んでくれ、と。

真意を理解し、和隆は安堵したようにほっと胸を撫で下ろした。
一瞬何事かと思った。

しかし、いくら介抱・介助のためとはいえ、真正面から同級生の女の子と向き合って抱き合うというのは少し勇気がいった。

別にやましい気持ちがあるわけじゃないが、理性が横道にそれる。こんなにも女の子と密着するなんて、文化祭のフォークダンス以来ではなかるうか。

そんな微妙な男心を知ってか知らずか、限界の近付きつつある遥は早口で指示を出した。

「あんまりへっぴり腰だと腰を痛めてしまうよ。もうちょっと体を近付けてくれる？」

「こ、こうか？」

狭いトイレの中、さらに二人の体が接近する。

「そう。それで赤坂くんは私の腰とか脇とかに手を回して、そのまま私を前に引っ張り上げるように……」

抱き起こすための介助動作とはいえ、それはもうほとんどハグだった。

熱い抱擁だった。

遥の顔が、和隆のすぐ真横にあった。ストレートのサラサラとした彼女の黒髪が和隆の頬に当たり、ほっぺたがくつつく。

「や、やっぱりちよつと待って！」

和隆は反射的に体を離れていた。顔が赤くなっているのが自分でも分かった。照れくさくなって、自分の頬を手の甲でこしこしとこすった。

スーハースーハーと深呼吸して精神を統一する。

余計なことは考えるな！ 集中しろ！

（ほっぺた、柔らかかったなあ……）

心を無にしようとする端から、思いつきり邪念が入ってきた。

今はそんな事を考えている場合じゃないだろうと、ぶんぶんと頭を振る。

申し訳なさそうに遙が言った。

「あの……ごめんね、こんな事までさせて。こんな女に抱きつかれたりして……気持ち悪いよね」

彼女は自虐的に言って顔を伏せた。

「いや、別にそんなんじゃない……」

一人では階段を上がり下り出来ず、ろくにトイレにも行けやしない。

好きでもない異性に抱きつかなければならぬのだから、むしろ彼女の方が辛いはずである。同級生の男の子に、トイレの介添えを頼まなければならないなんて……。

恥ずかしくって、居たたまれなくって……。きっと、消えてしまいたいような気持ちで一杯に違うない。

自分がごちゃごちゃと躊躇っている場合ではないな。

和隆はふうつと気合を入れ直し、「じゃあ行くぞ」と言って遙を車イスから抱き上げようとした。

が、その時、和隆らのいる女子トイレに一人の女生徒が入って来た。

「うわっ、何っ!？」

少女は女子トイレ内の和隆の姿を認めて、ぎよっとして立ち止まった。それは二年生の時に一緒のクラスだった女子だった。

「あ、赤坂が女子トイレを漁ってるっ……!」

トイレの個室のドアは外開きだった。ドアの陰に隠れて遙の姿は見えなかったのか、少女は和隆のことを指差してわなわなと震えていた。

「きゃー! 変態よぉー!」

「お、おい……」

止める間もなく、少女はトイレから飛び出して行ってしまった。バタバタと廊下を駆けていく。「変態よぉー!」という少女の叫び

声が、エコーしながら廊下に響いていた。

変態よぉー、変態よぉー、変態よぉー……！

耳の奥で、その言葉が響いていた。

「ああ……」

嗚呼、何という勘違い。

この噂は、あつという間に校内に行きわたるに違いない。和隆はがくりとこうべを垂れた。

そんな和隆を見詰めながら、心底申し訳なさそうに遥が言った。

「あの……ほんと、ごめんね？」

「いいよ、もう」

こうなったら開き直るまでだ。

「ところでまだ漏らしてないだろうな？」

「う、うん……。いったん波が治まって風いさ感じ。でもまたすぐに第二波がきそう。次のビクウェーブはヤバいです」

サーファーのようなことを言っていた。

和隆は遥の体に手を添えて、改めて彼女を車イスから抱き起した。

「せーの……！」

その動作に合わせて、遥も和隆に寄りかかりながら立ち上がった。傍から見たら、これから社交ダンスでも踊るような体勢である。

和隆は遥を抱えたまま体を捻ってトイレの個室に入り、ゆっくりと、彼女を洋式便器の上に座らせた。

「ふう……」

これだけのことをするのに大分手間取ってしまった。

ちよこんと便器に納まった遥を見下ろす。

和隆は言葉尻をばかしながら、言いにくげに質問した。

「ええと、その……下着とかは……？」

スカートやパンツを脱がせるのも手を貸さなければならぬのだろうか？ そうなると、もう気まずいとかそんなレベルの話ではなくなってしまう。

「あ……それは自分で出来るから……。うん、大丈夫です」
彼女は赤面しつつ答えた。

「そ、そうか。うん、そうか。そうだよな」

和隆も赤くなってどもりながら答えた。視線を逸らしてドアを閉める。

「じゃあ外にいるから」

「うん、ありがとう」

和隆は女子トイレの外に出た。

「はあ……」

深いため息をつく。なんだかどつと疲れた。

しばらくして水の流れる音とノックの音が聞こえてきた。用を足し終えたらしい。和隆は再び女子トイレに入り、遙を抱えて車イスの上に戻した。

遙は洗面台で手を洗い、スカートの乱れや膝掛けを直した。すつきりしたのか、顔色もだいぶ元に戻っていた。

和隆の顔を見上げながら、改めて遙が謝る。

「ほんまごめんな。赤坂くんにはこんな事までしてもらって……」

「いいよ、気にすんな」

二人はトイレから出た。

並んで廊下を歩きながら、和隆は遙に注意をした。

「人に頼みにくいのは分かるけどさ、あんまり我慢しない方がいいよ。そのうち膀胱炎になるぞ」

「うん……」

遙は曖昧に頷いた。

2 - 1 ・ 暗雲

— 1 —

なぜ担任は『遙係り』なるものを作ったのか？

恐らく、三年一組の生徒全員を強制的に春川遙に関わらせることで、車イスの少女のことを、3 - 1 全体の問題にしたかったのだろう。

協調性や連帯感の捏造。

春川と名字で呼ばず、あえて遙と下の名前で呼ぶことで、どうしてもクラスで浮きがちになる遙に親しみを持たせたかったのか。

あるいは、単に車イスの少女の事を生徒たちに任せて、自分は楽をしたかったのかもしれない。

結論からいうと、遙係りというシステムは失敗だった。

担任はそんなルールを作るべきではなかった。

毎日交代で遙の面倒をみることを義務付けたことで、彼らの関係は「クラスメートの同級生」というより、「障害者と介助者」という関係になってしまった。親しくなるどころか、余計に距離が出来てしまった。

さらに「今日は遙係りの当番じゃないから、自分とは関係ないや」という意識が生じてしまい、彼女が困っていても見て見ぬ振りをする者が出始めた。

「遙係りの奴が何とかしろよ」と言っただけ責任を押し付け合う。

あのままだっていたら、遙にはクラスのお荷物、厄介者というレッテルしか残らなかったかもしれない。

結論からいうと、遙係りは失敗だった。

そんなルールは作るべきではなかった。

教師は遙のことを生徒たちに丸投げするのではなく、きちんと生徒たちに正しい介助の知識や方法を教え、学ばせておくべきだった。近くにいる誰かが自然と彼女を助けるような空気を作り、そのためにはどうすれば良いかなどを話し合う機会を設けるべきだった。

そんな小学生の学級会じゃないんだからという声も聞こえてくる気もするが、問題は、そこなのだ。

彼らは全員、既にれっきとした大人だった。少年であり、少女だった。

少なくとも、肉体的においては。とにかく。

新学期がスタートして早々、3・1の遙係りのシステムは瓦解した。

――

和隆はカバンを肩に引っ掛けて朝の通学路を走っていた。

「しまった、寝過ごした」

昨夜は遅くまで本を読んでいたの、目覚ましの音に気付かず、ついいつもの時間まで眠ってしまった。

和隆は走りながら空を仰いだ。

頭上には黒い暗雲が垂れこめていた。世界は暗く、空は低い。遠くの方でゴロゴロと雷様が鳴っていた。空気もジメジメとしているし、じきに雨が降りだすだろう。

時刻は午前八時ちよつとすぎ。

学校の通学路には、たくさんの生徒たちが歩いていた。

まだ遅刻を気にしなければならぬ時間帯ではなかったが、自分

は早めに学校に入っていなければならない。和隆は同級生や下級生たちの背中を追い越して、学校に向かった。

和隆は学校に到着し、校庭内を見回した。

あいつはもう、来てるかな……？

キョロキョロと首を振って、車イスの少女の姿を探した。

遥の姿を発見する。

しかし、遥はいつものように一人ではなかった。遥の後ろに立ち、その車イスを押して歩いている男子生徒の姿がある。

「あれは……？」

和隆はぼつりとひとりごちて、小走りに二人の許に駆け寄った。

遥がこちらに気付き、声をかけてきた。

「あ、おはよう、赤坂くん」

和隆も遥に挨拶を返し、彼女の後ろに立っている男子生徒を見た。ひよろりとした細い体に、もっさりとした髪。

彼は狐のように目が細かった。教室で見たことがある顔だ。

「ええと……確か同じクラスの奴だよな？ 間下なんとかって名前の」

「間山だよ。間山正志」

間山は訂正を入れた。

目が細いせいか、彼は普通にしている、ヘラヘラと笑っているような表情をしていた。

「ああ、間山か、すまん。えええと、今日はお前が……？」

「そう。今日は僕が、遥係りだよ」

和隆が尋ねかけると、なぜか彼は、楽しげな口調で答えた。

「遙ちゃん、今日は存分に僕に頼ってくれていいよ！」

遙の事を見下ろし、頼もしげに微笑みかけている。

一緒のクラスになったのは初めてなので間山の事はよく知らないが——というか、遙の事ばかりに気を取られて他のクラスメートの事はおざなりにしか記憶していなかったが——彼はなんだか、やけにノリ気だった。

今まで遙係りになった男子たちは、車イスの少女とどう接しているか分からず、かといって邪険にするのも気が引けるという風に「まあ、よろしく……」などと言葉少なく、あるいは「少しくらいなら手を貸してやるよ」などとぶっきら棒に遙と接していた。おっかなびっくり対応し、必要以上の接触を避ける節があった。

だが間山は、やけに積極的だった。ニコニコと笑いながら遙に話しかけている。

「困ったことがあればなんでも言つてよねー、遙ちゃん」

遙が和隆に言った。

「間山くんは、私が登校してくるのを校門の所で待つてくれてん」「へえ」

今までなかなか友好的に接してくれる人間がいなかったので、間山の気さくな態度が嬉しかったのだらう。遙もにこやかに笑顔を返していた。

「間山くん、改めて今日は一日よろしくね」

「うん、任せてよ。何でも頼つて！」

立ち止まって話をしていると、雨が降り出した。

ぼつりぼつりと地面をまだらに濡らしていき、いきなりザーっと本降りになった。世界に雨粒の斜線が走る。

周りの生徒たちは「うわあ、降ってきた！」と頭を抱えて、校舎

の中に走りだした。

遙は膝の上に乗せていたオレンジ色の傘を開こうとしたが、その前に、間山が自分の傘を広げて彼女の頭上に差した。

「僕が傘をさして行くから大丈夫だよ」

「あつ、ありがとう」

これも一種の相合傘になるのだろうか？

間山は気前よく微笑み、「じゃあ行こっか」と言っつて、スマートに遙の車イスを押して歩き出した。

「あー……」

和隆も彼女が濡れないようにと傘を広げて差し出したのだが、完全にタイミングを逸してしまった。傘を広げたまま、ピエロのようにその場に棒立ちになる。

「……まあ、いっか」

そのまま、広げた傘を自分の頭上に差した。

「待てつてくれよ、俺も行くよ」

和隆は二人の後を追って校舎に向かった。足元で泥が跳ねた。

下駄箱に到着。

遙はいつものように自分で棚から上履きを取り出そうとしたのだが、間山がそれを押し留めた。

「無理しないで。僕が履き替えさせてあげるよ」

「いや、これくらいの事は自分で出来るから大丈夫だよ。毎日やってることやし」

「遠慮しないで。一人じゃ難しいでしょ？」

彼は糸のように細い目をさらに細めて、気遣わしげな表情を作った。

「そりゃあ、他の人と比べると時間がかかったりするけど……」

「今日は僕が遥係りなんだからね。何でも頼つてよ」

「でも、全部を全部、人に頼むのもアレやし……」

自分で出来ることは自分でやるをモットーにしている遥は、恐縮したように遠慮していた。

しかし、間山の方も、遥係りになった以上その職務を果たさなければと思っているのか、譲らなかった。

じつと遥の事を見下ろした後、一呼吸置いてから、間山は語りだした。

「実は僕は、将来は介護職に就こうかと思っているんだ」

「……そうなんや？」

遥は驚いたように目をしばたたかせた。意外だったので、隣りの和隆も驚いていた。

「世の中には、困ってるお年寄りや障害者の方が大勢いるからね。それを助けるのは若者の義務だよ」

彼は当然のことだというように頷いていた。

介護は大変な仕事だ。生きた人間を相手にする仕事だからマニュアル通りに働いていればそれでもいいというものでもないだろうし、他人の下世話までしなければいけない。遣り甲斐はあるだろうが、肉体的にも精神的にもきつい仕事だろう。やりたがる人がおらず、万年人手不足という話を聞く。

「体験学習ってわけじゃないけどさ、せっかくだし、将来のために色々と実践してみたいんだ」

「はあ、立派やなあ」

遥は感心したように頷いていた。

「そういうことなら……お願いしようかな」

遥は車イスに座り直した。間山に身を任せて、ゆったりと背もたれにもたれかかる。

「うん、任せてよ！」

間山は自信ありげにドンと胸を叩いた。

間山は車イスの前に移動し、いきなり遙の下半身を覆っていた膝掛けをめくり上げた。

「え？」

驚いたように遙が声を上げた。

膝掛けに引っ張られるように、スカートまで一緒にめくり上がった。彼女の生足が露わになり、あやうく下着が見えそうになる。「きゃあ！？」

遙は慌てて膝掛けとスカートを手で押さえつけた。面食らったように間山の顔を見詰める。

「あ、ごめん。ごめんね？」

間山はポリポリと頭をかいて謝った。

「じゃあ、まずは靴を脱がせるね」

「う、うん……」

フットレフトに乗っていた遙の足を持ち上げて、ほとんど汚れていない彼女の外履きを脱がす。

間山は興味深そうに、しげしげと遙の細い脚を見詰めた。

「しっかし、ほっそい脚をしてるねえ、遙ちゃん。ちゃんと食べてるの？ ダイエット中？」

「まあ、人並みには食べとるよ」

彼はさわさわと遙の足を撫で始めた。

「歩かないから筋肉も落ちちゃってるのかな？　すごく細い。血行も悪いのかも。少し冷たい」

思わずゾツとするほど、細く肉が落ちてしまったその足。

「この足って、まったく動かせないの？」

質問しながら、間山は医者が触診をするように、遙の足首を回したり、ふくらはぎなどに手を這わしていた。ぺたぺたさわさわと、気安く触れて撫で回す。

「おい、さつさと靴を履かせてやれよ」

横で見っていた和隆が注意を入れた。こいつはいつまで人の生足を触ってんだよ。

好き放題に脚をまさぐられて、遙も居心地悪げに困ったような表情を浮かべていた。

「ああ、ごめんね。つい、珍しくて」

間山は下駄箱から上履きを取り出し、遙の足に履かせた。

その動作を行いながら、質問する。

「足に触れた感触ってあるの？」

「うん。事故に遭って足は動かんようになってしまったけど、足の感覚神経は生きてるんよ。くすぐられたらこしょばゆくなるし、つねられたら痛みもある」

「へえ……」

遙はスカートの乱れを直し、膝掛けをかけ直した。

三人は校舎内に入り、廊下を進んだ。

階段の前までやって来る。

「さて、いよいよ階段だ」

これは難関だぞという風に、間山は階段を見上げた。ブラブラと手首を振ってストレッチする。

「ああ、間山。階段はだな……」

隣を歩いていた和隆が口を挟んだ。

遙を四階まで連れて上がるにあたって、その方法や注意点を説明

しようと思ったのだが……その前に、間山は勝手に動いた。
遙の前に回り込み、いきなりガバツと遙に抱きついた。

首の後ろに手を回し、彼女の体を自分の方に引き寄せる。
いきなりのハグ。

「えっ……？」

「なっ……！？」

和隆と遙の声が重なった。

「な、何するんよ、突然！？」

遙は驚いて体をこわばらせ、思わず相手の体を突き飛ばしていた。
反動で少し車イスが後退する。

突き飛ばされた間山は後ろ向きにたたらを踏んだ。心外そうな顔
をして遙の顔を見やる。

「……何すんのさ？」

「何って……え？ そっちが何なん？」

間山の突然の奇行に、遙は戸惑い気味の表情を浮かべていた。自
分の胸元を押さえる。

彼はけろりとした顔で答えた。

「一人じゃ階段を上がれないでしょ？ だから抱き起こして、運ん
であげようと思ったんじゃないか」

彼はエアお姫様だっこのようなポーズを取った。

今のは遙を抱き起こそうとしての行動だったのか。いきなりフリ
ー・ハグズに目覚めたか、白昼堂々車イスの女の子の事を襲おうと
したのかと思ったぞ。

和隆は半ば訝しげな顔をして間山の事を見詰めた。
今まで遙係りになった男子たちは遙に対して変によそよしかつ
たり遠慮がちだったり、あるいは、粗暴な態度を取ったりしていた

が……こいつの場合は、遠慮がなさすぎる。気持ちが空回りしているのか、とにかく無作法すぎた。

「介助のためとはいえ、いきなり抱きつく奴がいるかよ。普通は声をかけて、相手と呼吸を合わせてやるもんだろ？」

先程の下駄箱でもそうだ。いきなり膝掛けをめくり上げてパンチラさせかけたり、足を無遠慮に撫でまわしたり……。こいつ、わざとじゃないだろうな？

和隆がそう注意すると、彼はとぼけたような顔をして「そうなの？」と小首を傾げた。

「そうなのって……お前、介護職目指してるんじゃないのかよ？」

和隆は呆れ顔をしながら質問した。

「病院や老人ホームとかで、バイトやボランティアをしたことはあるか？」

「いいや」

「介護の経験は？ 他の障害者の人に触れあった経験とかは？」

「ないな」

「まったく？」

「まったく」

和隆はがくりと肩を落とした。

介護職を目指していると言うから、その作法なり何なりを見て色々勉強させてもらおうと期待していたのだが……なんだよ、全くの素人かよ。これでは本を読んで一夜漬けした程度の知識しかない和隆よりもひどいじゃないか。

「とにかく、普通は相手に『膝掛けをめくるよ』とか、『今から抱き起こすよ』とか、一声かけてから行動に移るもんだろ？」

「そういうものなんだ？」

「まあ、俺も女子トイレでいきなり抱きつかれたりしたけど」

「え？」

「……いや、なんでもない」

和隆はゴホンと咳払いをして話を逸らした。トイレのあれは、まあ、緊急回避のようなものだろう。

あまりに無知な間山の事を指差しながら、和隆は遥に言った。

「おい、お前からも何か言ってやれよ。当事者なんだから」

「いや、でも……。間山くんも、一生懸命私の事を助けようとしてくれてるんやし……」

介助を受ける立場の人間としては、なかなか文句を言いづらいらしい。遥は曖昧な表情を浮かべていた。

和隆はため息をついた。

「こんな所で立ち止まってても仕方がない。とりあえず教室に向かうぜ。間山、二人で春川を上まで連れて行こう」

間山は首を傾げて聞き返してきた。

「二人で？」

「こう、前後から挟んで、車イスを持ち上げるんだ。そうすれば春川を車イスに乗せたままでも、階段を上がっていける」

左右から挟んで持ち上げるとバランスが悪いが、前後から挟んで車イスを地面に対してややVの字型に傾けて持つと、人を乗せたままでも割と安定して運ぶことが出来るのだと、介護・介助の本に書いてあった。

和隆は自分の番の遥係りを終えたあの日、帰りがけに本屋に寄って、介護の本を買っていた。

そこには人を車イスに乗せたまま階段を移動する方法などが書か

れてあった。

その知識を得てから、和隆は遥係りになった男子に声をかけては、二人で協力して遥を四階まで連れて行くようになっていた。おかげでいつも遅刻ギリギリの時間に登校していた和隆も、彼女に合わせ、て早めに登校するようになっていた。

二人で協力して運べば、毎日違う男子におんぶにだっこをされて階段を移動することなくなり、遥の心労も少しは減るだろう。いくら足が悪いから仕方がないとはいえ、親しくもない男子に体を直接触れられるのは嫌だろうから。

一緒にいれば、遥係りの事を疎んじている者がいてもフォロー出来るし。

「遥係りなんて面倒くせえ。俺は知らん」

そう突き放すようなことを言って遥を放置して行こうとする者がいれば、その人物を物陰に引きずり込んで「てめえ、少しは相手の事を考えろや。お前の足も動かないようにしてやるうか、ああ？」などと脅して……もとい、友好的な話し合いをして協力を仰ぐ。

そうやって、和隆は陰ながら遥の事をフォローしていた。

担任は遥の事を生徒たちに丸投げするのではなく、正しい介助の知識や接し方を学ばせておくべきだった。和隆が調べて働きかけなければ、遥は毎日違う誰かに体に触られ、気まずい思いをしなければならなかっただろう。

そもそも遥係りなんて作るべきではなかったように思う。

というか、そもそもなんつーネーミングセンスだよ。

遥係りって。

生き物係りじゃないんだから。

「本当は二人でやるより、三、四人で持った方が、安定して階段を上がって行くことが出来るんだけどな」

和隆は「誰か手を貸してくれる奴はいないかなあ」という風に辺

りを見回し、聞えよがしに言ったのだが、周りの生徒たちは立ち止らなかった。素知らぬ顔をして、あるいは慌てたように和隆たちから目を逸らして駆け抜けて行く。

「……まあ、いいや。ちゃっちゃと行こう。間山はそっちを持って」

和隆はそう言って助力を仰いだのだが、間山はその提案を蹴った。

「嫌だ」

「え？」

今までひどく協力的だったのに、ここにきていきなり拒絶された。和隆は驚いて目を点にした。

「……どうしたんだ？」

間山が言った。

「いいよ、今日の遙係りは僕なんだし。僕が一人で連れて行くよ」

「でも二人でやった方が楽だろ？」

「大丈夫だって。僕一人でも出来るよ」

「いや、その方が春川の負担だって……」

間山は大きいため息をついた。

「まあ、うるさいなあ……。君は小舅かよ？」

和隆のセリフを遮り、彼はひどく面倒くさそうな顔をして、和隆の顔を見詰めていた。

「君だって初日は彼女を抱っこして四階まで運んだんだろ？ 僕だってそれくらい出来るさ」

ふふんと自信ありげに鼻を鳴らす。

「誰も出来ないとは言ってねーよ」

和隆は訝しげな顔をしながら切り返した。こいつは一体、何の対抗意識を燃やしているんだよ。

二人の間に挟まれて、話の中心人物である遙は困ったような顔をしていた。

「あの、私は別にどっちでもかまへんけど……」
遠慮がちに言い、オロオロとしている。

「ほら、彼女もそう言ってるじゃないか」

「いや、でも……」

「では、改めまして」

和隆のセリフを聞き流し、間山は再び遙の事を抱き起そうとした。彼女の背中や膝の下に自分の手を滑り込ませる。

「おい、だったらおんぶにしろよおんぶに」

お姫様だっこをしようとしたので、和隆は再び横からチャチャを入れた。

しかし、これでは本当に口うるさい小舅のようだったので、「あんまり張り切ると腰をいわずぞ」などと付け加えておいた。

げんなりした顔をする間山。

「まあ、横からごちゃごちゃうるさいなあ。君の番の遙係りは終わつただろ？ 黙っててよ」

彼はやたら『遙係り』という言葉を繰り返していた。

なんとなく気に入らない。

半ばケンカ腰になりながら和隆は言い返した。

「なんだよ、んなもん関係ないだろ？ 気付いた奴、近くにいた奴が手を貸してあげればいいんじゃないか」

それを聞いた間山は、「ご高尚なことで」と言つて馬鹿にしたように鼻で笑った。

狐のように細い瞳で、じっと和隆を見詰める。

「君、偽善者つてよく言われない？」

「……あ？」

和隆は剣呑な顔をして相手の事を睨みつけた。

「なんだよ？」

「なんだよ？」

顔を近付けてガンを飛ばしあう。

二人の間に険悪な空気が走った。

「あの、えーと……」

二人の男子に挟まれて、春川遥はやたら恐縮していた。和隆と間山の顔をキョロキョロと見比べて、わたわたとしている。

「や、止めて！」

思い切ったように遥が叫んだ。

「止めて！ 私のために争わないで！」

突然、まるで一昔前のメロドラマのようなセリフを言いだした。

「……えっ？」

遥としては場の空気を和ませようとして言ったのだろうが、さすがにこの状況でそれはねーよと思った。間山と一緒に「えっ？」という顔をして、車イスの少女を見詰める。

一瞬にしてその場の空気が凍りついた。

気まずい沈黙が流れる。

表では、ザーザーと冷たい雨が降りしきっている。

「……え、今なんて？」

「……ちやうねん。これはちやうねん」

彼女は言うんじゃないかった、穴があったら入りたいという風に、両手で顔を覆って赤くなっていた。

ここは一つ、笑った方がよかったか。

「……ど、どんまい？」

とりあえず慰めておいた。

いたわりの言葉をかけると、彼女はさらに赤くなって、小さな声で「ちゃうねん……」と繰り返していた。黒い髪を揺らしてプルプルと首を振っている。

なんだ、この可愛らしい生き物は。

この世のあらゆる争い事が無意味に思えてきた。

「とーにーかーくー！」

気を取り直し、間山が話を戻した。

「とにかく遙ちゃんは僕が運ぶよ。今日の遙係りは僕だからね。君は僕の荷物や、空いた車イスでも持ってきたまえよ」

言いながら、自分のカバンを和隆の方に放り投げる。和隆は渋々彼のカバンを空中でキャッチした。

間山は遙の前で背中を向けてしゃがんだ。

「ほら、乗りなよ」

遙は「いいんだろうか……？」としばし躊躇った後、遠慮がちに、

間山の背中に体を預けた。

「じゃあ、お願いします」

「うん」

間山は遙の体を抱えて立ち上がった。よいしょ、と彼女の太ももに手を添える。

「じゃあ行こっか」

階段を上り始めた。

間山は直接遙の太ももに手を当てておんぶしていた。スカートのお尻の部分が、ひらひらと後ろに垂れて揺れている。

「おい……」

ちゃんとスカートを押さえてやれよと注意しようとしたのだが、

彼はサクサク階段を上って行ってしまった。

「ったく……」

和隆は軽く舌打ちしながら遥の車イスを小さく折りたたみ、間山のカバンと一緒に持ち上げた。二人の後を追おうと階段に足をかける。

が、その時、横から声をかけられた。

「おはヨーグルトー！」

気軽い声が飛んできた。

見ると、そこにいたのは旧友の渡辺若文だった。

「おはよーっス、和隆あ。お前三年になってから、学校に来るの早くなったなー。前はいつも、遅刻ギリギリの時間にやって来てたのに」

「そうだった？」

「ああ、あれか。遥ちゃん関係か？」

若文は得心したようにポンと手を叩いた。

「自分の番の遥係りが終わった後も、毎日四階まで連れていくのを手伝ってあげてるんだって？ やっさしいー」

和隆はぶっきら棒に答えた。

「別に。上に行くついでだよ」

しかし、人によつては、それは偽善的な行為に見えるのだろう。

「またまたあ、そんな事言つて。よっ、色男！ このお、憎いねー」

！頼りになる！ 社長！」

相変わらず、友人のテンションは朝っぱらから軽かった。

和隆たちが一階で立ち話をしている間に、先に行く間山と遥は、既に二階の踊り場の所まで来ていた。

「もつとちゃんとしがみ付かないと危ないよ、遙ちゃん？」

間山は背中 of 遙に注意をした。よいしょと少女の体を抱え直す。

「遙ちゃんって軽いねえ」

四方山話をしながら、間山は階段を上がって行つた。

「足が動かないって本当不便で大変だね。君も、周りの人間も」

遙は改めてお礼を言つた。

「ごめんね、おんぶしてもらつて」

「まあいいけどね」

二人の横を、パタパタと軽やかな足音を立てて下級生たちが駆け抜けて行つた。

間山は足を動かしながら、他人には聞こえないような……密着している遙にだけ聞こえるような小さな声で、ぼそりと何かを呟いた。

「ごめん、何か言つた？」

聞き取り切れずに、遙は彼に尋ね返した。

「……遙ちゃんってさあ、いい匂いしてるよね」

間山は首を動かし、目の端だけで背中の遙を見詰めた。

言いながら、彼は抱えている遙の太ももを撫で回すように愛撫した。

さわさわと。

スカートの下の素肌をまさぐる。

「……え？」

遙は自分の動かない足を見下ろした。

2 - 2 ・昼休みA

— 3 —

四時間目の授業が終わり、お昼休みの時間になった。途端に教室の中が騒がしくなる。

強風が窓をガタガタと揺らし、小粒の雨が窓ガラスを叩いていた。和隆は席についたままうーんと大きく伸びをし、チラリと遥の事を盗み見た。

彼女は教科書やノート類をトントンと整えて、机にしまふ所だった。

机の横手にひっ下げているカバンの中から小さな弁当箱を取り出す。

（今日も一人か……）

春川遥は、今日も一人飯のようだった。

この天気では外に昼飯を食べに行く者はいない。多くの生徒が教室内で弁当を広げていたが、誰一人、彼女に「一緒にご飯を食べようよ」とは声をかけなかった。

転校してきて以来、彼女はずっと一人でお昼ごはんを食べていた。みんなは友達同士机をくつつけたりして、複数人で楽しげにお喋りしながらお昼を食べているというのに、彼女は教室で一人ぼっちだった。

遥はお弁当箱を開き、「いただきます」と丁寧に手を合わせてお昼ごはんを食べ始めた。

クラスの用事などで人から話しかけられたら明るく受け答えをするけれど、彼女は基本的に、自分から人に話しかけよう、近付いて

行こうとはしなかった。

車イスの自分が声をかけて話の輪に入っても、みんなに気を遣わせて空気を悪くしてしまう。だったらいっそ、一人の方が気が楽だ……。

そんな風に考えているのかもしれない。

自分がクラスで浮いた存在なのは知っている。

けれど、それでも構わないというスタンス。

春川遥は孤高である。

しかし、ガヤガヤと騒がしい教室の中で、一人静かに弁当を食べている少女の姿は、見ていてなんとも物寂しげだった。

たまに楽しげにお喋りをしている同級生たちのことを眺めては、何かに憧れるような、何かを諦めたような表情を浮かべて、ハアと小さくため息を漏らしている。

そんな少女の事を見詰めながら、和隆はガタガタと所在なげに貧乏揺すりをしていた。

何とかしてやりたい、何とかしてやらねばという衝動にかられていた。

これはか弱い者への保護欲？ それとも憐憫の気持ちから来るもの？

今日の遥は特に元気がないように見えた。

基本的に彼女は教室内では静かにしているが、今日の遥は、とりわけて物静かだった。アクションが少ないというか、なんとなく物憂げである。

（一緒に昼飯を食おうぜって、声かけてみようか……？）

ちらっとそう思ったが、なかなか体は動かなかった。

（でも、それで断られたらどうしよう……）

「うわ、何この人……？ 何かと私に関わってきて気持ち悪い……」
的な表情をされたらどうしよう。ストーカーと勘違いされたらどうしよう。立ち直れなくなるかもしれない。赤坂和隆はチキンである。

まあ、彼女の性格からしてその反応はないだろうけど。

ただ遥は、和隆が食事に誘っても、次のように受け取るかもしれない。

「一人で食べるのは寂しかろうと気を遣って、赤坂くんは私を誘ったのかもしれない」
と。

私は同情されていると、そう受け取るかもしれない。
そう思われるのは本意ではない。逆に彼女の心に傷を付けることになる。

こちらは気を遣ったつもりでも、その行為が逆に相手を傷付けたしまった、なんてことはままある話だ。その気遣いこそが、障害者と健常者を隔てる差別と区別の現れなんだ、みたいな。

過度の同情や気遣いは、あるいは差別のようなものなのかもしれない。多分に気を遣われて腫れものに触るような対応をされては、誰だって嫌な気分になるだろう。

しかし、このままでは遥はこの先もずっと一人寂しくぼっち飯なわけだし、遥だってそれはそれで寂しいだろうし、何もそこまで深く考えなくてもいいのか？

もっと普通に、気軽に話しかけるべき？

「よう、春川」。一緒に飯食おうぜ」
的な。

若文じゃあるまいし、それでは軽すぎるか？

「ああ、もう……」

和隆はくしゃくしゃと頭をかいた。思考が堂々巡りし、なかなか考えがまとまらなかった。

車イスの女の子。

その子との付き合い方。向き合い方。心の在り方。

何をもって誠実とするのか。

どう接するのが正解なのか。

つか、いちいちそんな事を考えること自体不自然というか、彼女に対して失礼な事をしているような気もする訳で……。

考えがぐるぐると頭を廻る。

（お前は女の子一人、満足に食事に誘う事も出来ないのかよ……）
自分のヘタレ加減が嫌になってきた。呻きながら机に突っ伏す。

「君、偽善者ってよく言われない？」

間山に言われたセリフが、脳内でリフレインしていた。

うじうじと色んな事を考えて、身動きが取れなくなってしまっ

ふと、この感じは何かに似ているな、と思った。

心がもやもやとしたこの感じ、何だっけ？

特定の女の子の事ばかりが脳裏に浮かび、声をかけようと思ってもなかなか話しかけられずにヤキモキしているこの状況。この感じ。

一瞬「あれ？ これって恋わずらいっぽくね？」とも思ったが、すぐにまさかなと打ち消した。

チラリと遥の顔を盗み見る。

「……とりあえず、昼飯買ってくるか」

母親が弁当を作ってくれなかったので、今日は昼飯を持ってきていなかった。

和隆は気だるげに立ち上がり、購買部にお昼ごはんを買いに行った。

混雑する購買部でパンと紙パックの飲み物、ついでに豆サラダを購入した。生徒たちにはあまり人気がないが、ここの豆サラダはなかなか美味である。

「…………あれ？」

なぜか、教室の中から遥の姿が消えていた。

彼女の机の上には、食いさしのお弁当箱が乗っていた。お弁当は食べかけで、魔法瓶の水筒のコップには湯気の立ちのぼる熱い飲み物が注がれてあった。

「ご飯を食べている途中に突然忽然と消えてしまった、という感じである。」

教室の中を見回すが、彼女の姿はどこにもなかった。トイレにでも行ったのだろうか？　しかし、今日の遥係りの女子は向こうにいるし…………。

湯気の立ちのぼるコップを見詰め、和隆はメアリー・セレスト号の事件を思い出していた。

和隆は机をくつつけ、ケラケラと笑いながら食事を取っていた女子三人組に話しかけた。

「春川ってどうした？」

「春川って…………車イスの？　あの人がどうかしたの？」

「さっきまでそこで飯食ってたのに、戻ってきたらいなくなってたからさ」

三人のうちの一人が答えた。

「先生が呼んでるって言って、間山が職員室に連れて行っただよ」

「…………間山が？」

和隆は間山正志の名前を聞き、訝しげに眉をひそめた。

「先生が呼んでるって、うちの担任がか？」

「さあ、知らない。たぶんそうじゃないの？」

この学校の校舎は、普通授業を受ける『一般教室棟』と、音楽室や調理実習室などの特別教室がある『特別教室棟』の二つに分かれていた。それが渡り廊下でHの形に繋がっている。職員室は、渡り廊下を渡った特別教室棟の二階にあった。

遙は車イスなんだし、話があるなら先生の方から教室に会いに来ればいいのに。階の移動が面倒だ。

実際、遙に話がある時は、担任はそうしていた。自ら教室にやって来ていた。

二人きりで落ち着いて話をしたいというなら、この階には生徒指導室という個室もある。遙を職員室に呼びつけるだなんて、一体どうという風の吹きまわしだ？

三人娘は顔を突き合わせて、ひそひそと小声で喋りだした。

「間山ってなんかキモくない？　いつも目細めて、ヘラヘラ笑ってるみたいな顔してるし」

「うん、何考えてるか分かんないよね」

「あれは絶対に変態だよ。時々女の子の事をじーっと怪しい目付きで見詰めてるもん」

「それに、あいつマザコンっぽい」

「そうなの？」

「お母さんっぽい人と一緒に買い物してたの見たことあるよ。お母さんのことを『ママ〜！』って呼んで、ベタベタくっついてた」

「やだ、キモーイ！」

「怖い！」

女三人寄れば姦しいとはよく言ったものだ。

少女たちは和隆の存在を無視して、本人のいない所で言いたい放題好き勝手にマシンガントークを繰り広げていた。どこで息継ぎをしているんだと不思議になるくらい、少女たちの喋りは留まることを知らなかった。冗談を言つてはケタケタと笑う。少し圧倒された。

この分だと自分も陰で何を言われてるか分からないな、と思った。

それはともかく……和隆は少女たちの席を離れ、もう一度遥の机を見下ろした。

彼女のお弁当の蓋は開きっぱなしだし、水筒のコップにもお茶が注がれたままだった。机の上に、無造作に箸がころんと転がっている。

食事の途中で唐突に、半ば強引に連れ去られた、という感じだった。

（間山が連れて行った、か……）

和隆は前方の黒板を見やった。

黒板の隅には赤いチョークで『遥係り』の文字があり、その下に間山の名前が書かれてあった。

一緒のクラスになったのはこれが初めてなので、彼の事はよく知らない。

女子たちの言い分を鵜呑みにするわけではないが、彼は、何を考えているのかよく分からない少年だった。狐のような細い瞳を思い出す。

彼は『遥係り』をかさに、何かというと春川遥にまわりついていた。

二時間目の休み時間の時もそうだ。

休み時間、遥は係りの女子に「ごめんやけどトイレに付き合ってもらえへん？」と話しかけた。

その時も、間山は横から口を挟んでいた。

「何なら僕が、連れて行ってあげようか？」

「え？」

「ほら、遠慮しないで」

遙は困ったような顔をしてその申し出を断った。

「いや、さすがにそれは……」

「どうして？ 赤坂もトイレまで付き合っただろう？」

和隆の事を引き合いに出してきた。

「いや、あれは本当に、我慢が出来なくて仕方なく……」

当時の事を思い出し、遙は頬を赤らめてごにごによと小声で言い訳を呟っていた。

その時はもう一人の遙係りの女の子が遙に付き添ってくれたので事なきを得たが、彼はそうやって、事あるごとに遙に付きまとってずいずいと迫っていた。

朝の事を思い出す。

遙をおんぶする時、間山は彼女の太ももを撫でていたように見えた。

さわさわと、彼女の細い脚に指を這わせていた……ように見えた。先日の和隆のように、手の置き場所が分からずにまごついていただけかと思ってその時は何も言わなかったが、あれは……狙ってやっていたのか？

靴を履き替えさせる時に遙の脚を撫で回したり、いきなり抱きついていたり……。

まさか本当に、わざとやっていたのか？

介助にかこつけた、一種のセクハラ？

もしそうだとしたら、こんな酷い話はない。

遙は人の助けがなければ、満足に学校生活を送れない。多少体を触れられたとしても「きゃあ、えっち！」とは騒げないだろう。

太ももを撫でられたのだって、ちよつと手が滑っただけだ、何かの間違いだ、と自分に言い聞かせて、我慢してしまうかもしれない。電車の中で痴漢に遭ってしまったか弱い少女のように、何も言い返せず、抵抗することが出来ない。強く糾弾することが出来ない。

間山がそういう弱みに付け込んでいるのだとしたら……。

いや、さすがにそれは被害妄想に過ぎるか？

ガヤガヤと騒がしい教室。

いつもの昼休み。

変わらない日常。

その中に、車イスの彼女の姿が見つからない。

窓の外を見やると、空は低く、すごいスピードで黒い雲が流れていた。雨粒が窓ガラスを叩き、ザーザーと冷たく世界を支配する。

何かの凶兆のように、遠くの空で雷が轟いた。

なんとなく嫌な予感がした。

和隆は昼飯の袋を机に投げ出し、教室から飛び出した。

2 - 3 ・ 昼休み B

― 5 ―

四時間目の授業が終わり、お昼休みの時間になった。途端に教室の中が騒がしくなる。

強風が窓をガタガタと揺らし、小粒の雨が窓ガラスを叩いていた。遙は教科書類を片付け、机の横手に下げているカバンの中から小さな弁当箱を取り出した。熱いお茶が入った水筒も取り出す。

いただきますと手を合わせ、お昼ごはんを食べ始めた。

遙は転校してきて以来、ずっと一人飯をしていた。

ご飯をパク付きながら、教室の中を見回してみた。

今日はあいにくの天気なので、普段は外にお弁当を持って食べに行っている屋外組も、教室に残っていた。いつもより人が多く賑やかである。

どこかのグループに混ざれないだろうかとも思ったが、それぞれ馴染みの固定グループが出来上がっている風で、車イスの遙が横から入っていける感じではなかった。

遙は未だクラスに馴染めずにいた。

教室の異物。まざりもの。

今まで遙係りになった女の子の中には気を遣って色々と話しかけてくれる人もいたが、係りの日が終わると、みんな自然と離れて行ってしまった。

こんな体だ。気が引けて、なかなか自分から積極的に話しかけて

みようととは思えないのだろう。みんなが遥のことを避けて通る。

（まあ、最初から分かったことだけだね……）

こういう反応をされるのは、分かっていた。

前の学校でもそうだった。

けれど、それでも構わないと思っていた。

学校は勉強をする場所だ。卒業証書さえもらえればそれでいいと割り切っていた。

しかし……いくら頭の中でそう思っているとしても、なかなか心までは付いてこない。お昼ごはんと一緒に食べてくれる友達すらないというのは、やはり少し寂しかった。

教室から窓の外を見下ろすと、真剣な顔をしてクラブ活動に打ち込んでいる運動部の人たちや、ベンチに座って楽しげにお喋りをしている男女の姿などが見えたりした。

みんな青春を謳歌している。

高校生活をエンジョイしている。

しかし自分は車イス。

一人では、満足に階を移動することすら出来なくて……。

そういう人を見るたびに少し嫉妬心が湧き、劣等感のようなものがぼこぼこ心の奥底から溢れてきて、鼻の奥がつんとした。

一人物思いにふけてもささと食事を続けていると、突然頭上から声が降ってきた。

「やあ遥ちゃん。不足はないかい？」

ポンツと肩を叩かれる。

その声に、遥の肩はビクリと震えた。
ゆっくりと振り返る。

そこには、間山正志が立っていた。狐のように細い目で、ニコニコと微笑みながら遙の事を見下ろしている。

間山が親しげに話しかけてきた。

「飲み物とが必要？ 買ってきてあげようか？」

「いや……水筒を持ってきたから、間に合ってるよ」

「なんでも頼んでよ。今日は僕が、遙係りなんだから」

彼は何かというと『遙係り』という言葉を繰り返して、遙の世話を焼こうとした。二時間目の休み時間の時は、女子トイレにまで付いて来ようとしたほどだ。

遙は観察するように間山のことをじっと見詰めた。

何を考えているかよく分からない表情。表面上はニコニコと笑っているが、目の奥は笑っていないような気がした。

今朝の階段での出来事を思い出す。

おんぶ中に、担ぎ直す振りをして脚を撫でられたような気がするのだが、あれは……。

遙は半ば警戒しながら彼に尋ねた。

「……私に何か用、かな？」

間山が答えた。

「先生が君のことを呼んでたよ。職員室まで来て欲しいってさ」

「先生が？」

遙は訝しげな顔をして聞き返した。

今までは、話がある時は先生の方から遙の許を訪ねてくれていた。職員室に呼ばれるのは初めてだ。

「僕が職員室まで連れて行ってあげるよ。なんたって、僕は遙係り

だからね」

彼はにこりと微笑み、遥の了承も取らずに、勝手に遥の車イスを動かした。車イスのグリップを掴んで押し始める。

「え？　ちょ、ちよつと……！」

遥は慌てて手に持っていたお弁当箱と箸を机に置いた。箸が乱雑に机の上を転がる。

どうしてこの人は、こうも独善的に物事を推し進めるのだろう。

遥の都合などお構いなしである。

思わず助けを求めるように一番前の廊下側の席を見詰めたが……購買部かよそのクラスに出掛けているのか、そこに彼の姿はなかった。

遥は半ば強制的に教室から連れ出された。

車イスは廊下をしずしずと進んでいく。

遥は背後の間山に尋ねた。

「……私のことを呼んだ先生って、どの先生？」

「うちの担任だよ」

「先生が、何の用やの？」

「さあ、僕は連れて来いって言われたただだから」

階段の前に差し掛かったが、間山は立ち止らなかった。そのまま車イスを押していく。

「下に行くんやないの？」

「うん？　ああ、ちよつとね」

彼は適当に返事をして、ふんふん鼻歌を歌いながら車イスを前へ前へと進ませていった。

特別教室棟にある職員室に行くには、二階に下りて渡り廊下を渡らなければならなかった。教室脇の階段は利用者が多くて込み合っているから、四階の渡り廊下を通じて特別教室棟に行ってから、階段を下りるつもりなのだろうか？

車イスが渡り廊下に出た。

途端に強い風が吹き抜け、遥の長い髪をバタバタと揺らした。髪が顔にまとわりついてくる。

雨は一層激しさを増しているようだった。

二人は渡り廊下を渡り切り、特別教室棟に入った。

昼休みという事もあって今まで来た道には生徒たちの姿が多くガヤガヤと騒がしかったが、特別教室棟に着た途端、まるで別次元にワープしたのではないかというくらい静かになった。喧騒が遠のく。こっちの校舎の四階には、社会科室や理科実験室などがあつた。今は生徒が一人もないのか、廊下はひどく静かだった。しんと静まりかえっている。

二人は階段の前までやって来た。ここを下りて行けば職員室に行ける。

しかし、それでも間山は立ち止らなかつた。

さらにその先へ、廊下のどん詰まりの方へと遥の車イスを押し進めていく。

彼は鼻歌を歌い続けていた。

どこかで聞いたことがある曲だと思っていたら、それは映画『雨に唄えば』の曲だった。

あるいは、『時計じかけのオレンジ』の……。

表では、ザーザーと陰湿な雨が降りしきっている。

事ここに至って、さすがの遥も何かおかしいと思った。

「ちよ、ちよっと待って……。どこに連れて行くつもりなの？」

車イスの肘掛けのバーをぎゅっと握りしめて、警戒して体を強張らせる。

振り向いて確認したいのに、なぜか体は金縛りにあったように動かなかった。後ろを振り返ることが出来ない。嫌な予感がして、額に脂汗が伝った。

背後の間山に問いかける。

「ちよつと、間山くん!？」

問いかけても、返事はなかった。

背後で気配が動いた。

間山の両手が遥の頭の両脇からぬつと伸び出し、遥の髪に触れた。さらりとした細い黒髪を、指先で弄ぶ。

露わになった首筋に、彼の生暖かい吐息がかかった。両肩を掴まれる。

「遥ちゃん……」

耳元で囁かれ、遥の体にゾツとおぞけが走った

「い、いや、離してっ……!」

遥は思わず叫んでいた。

ハンドリムに手をかけて、ダツと車イスを前進させた。

距離を取って車イスを反転させて、正面から間山と向き合う。

「……なんで逃げるのさ？」

間山は遥の肩を掴んだままの恰好でその場に立ち尽くし、心外そうな表情を浮かべていた。

じつと遥のことを見詰めている。

じつと視線を外さない。

表面上はニコニコと笑っているが、目の奥は、全然笑っていないように見えた。

遥は少し身震いした。まるで蛇に睨まれた蛙のような気分だ。どうしよう、少し怖い……。

遙は意を決して、問い詰めるように間山に言った。

「こんな所に連れ出して、何のつもり……？」

「僕さあ、君に話があったんだよね、遙ちゃん」

「先生が呼んでるっていうのは、嘘か？」

相手の事をキツと睨みつけて、詰問するような口調で問いかけたのだが、彼は飄々とした態度で「ああ、嘘だよ」と答えた。悪びれた風もなく、けろりとしている。

「話ってなんやの？ 話なら、教室でも出来るでしょ」

「人前じゃ話にくいことなんだよ」

「……私は別に、話なんてないから」

遙はそう言い捨てて、間山の脇をすり抜け教室に戻ろうとした。彼と二人きりになるのはまずいと思った。

しかし、間山が道を塞いだ。車イスの前に立ち塞がる。

「そ、そこを退いて」

「嫌だ」

「退いてって言ってるやろ！」

緊張と恐れで、半ば声が震えた。

叫ぶように退いてと言うと、彼は面倒くさそうにチツと舌を鳴らした。

「人が下手に出てれば、調子に乗りやがって……」

口調がガラリと変わっていた。

平穏だった彼の口調が、急に刺々しい物に変わっていた。

コツコツコツと足音を響かせて、間山が遙の方に肉迫してきた。

「なっ……」

慌てて距離を取ろうと車イスをバックさせたけれど、すぐに距離を詰められて、車イスのバーを掴まれてしまった。がっちりと固定

されて、その場から逃げられなくなる。

吐息が吹きかかるほど顔を近付け、ひどく冷淡な口調で、彼は言
った。

「逃がさねーよ」

空で雷が光った。

2 - 4 ・物理準備室B

— 6 —

間山は横手にあつた引き戸を開けて、その部屋めがけて遥の車イスを突き飛ばした。車イスが逆走する。

「きゃっ……！」

入り口の段差にタイヤが引っかかり、バランスが崩れた。

ガシャンと大きな音を立てて車イスが転倒し、遥は地面に投げ出された。受け身も取れず、強か肘を打ちつける。

「んん……」

遥は呻きながら床に手をつき、お姉さん座りのような体勢で上半身を起こ上がらせた。リノリウムの床がひんやりと冷たかった。

部屋の中を見回す。

そこは、物理準備室だった。

木製の棚にはビーカーや天秤などの実験器具が並んでいて、ホルマリン漬けにされた奇妙な生き物の標本が鎮座していた。剥製のイタチが、ガラスのような無機質な瞳でこちらを見下ろしている。

ジメジメとした空気。細かいホコリが、チラチラと宙を舞っていた。

間山が入り口の扉に手をかけて、部屋の中に入ってきた。

地面に投げ出されたまま、立ち上がれずにいる遥のことを見下ろす。

「歩けないって本当に不便だよねー。満足に立つことも出来ないなんて。ほんと、同情するよ」

同情的なセリフを吐きながら、その瞳は、まるで檻の中のマウス

でも観察するような冷淡な色をしていた。

転倒した拍子に遥の制服のスカートはめくれ上がり、細い足が剥き出しになっていた。その足を見詰めながら、彼は「いい恰好だね」と言っただけと笑った。

遥は慌ててスカートを払って足を隠した。

間山は後ろ手に引き戸を閉めて、部屋の鍵をかけた。

カチャリ、と。

錠が落ちる。

室内にはカーテンが掛けられており、薄暗かった。入り口の扉が閉ざされたことで、さらに部屋の中が暗くなる。暗がりの中で、間山の二つの瞳が獣のように爛々と光って宙に浮いているように見えた。

ぐいつとネクタイを緩めながら、間山はゆつくりとこちらに歩み寄って来た。相変わらず、何を考えているのか分からないニコニコヘラヘラとした笑みを浮かべている。

密室の中に二人きり……。

遥の心臓は、ドクンドクンと痛いほどに強く打っていた。

体が強張る。粘っこい嫌な汗が背筋を伝う。

「な、何するつもり……。こ、来ないで……。！」

動かない足を前に投げ出したまま、下半身を引きずるように後退りをした。

大声で叫ぼうとしたのだが、舌は喉に張り付いてしまったかのようにならず、声を出すことが出来なかった。口の中がカラカラに乾いている。

後退りをする遥の手に、転倒した車イスが触れた。

遥は倒れた車イスを立て直して逃げようとしたのだが、それを見

た間山は不愉快そうに眉をしかめた。

「どこに行こうっていうんだい？」

大股に歩を進めて迫って来る。

「無一駄ーだーよっ！ 君はどこにも逃げられない」

目の前で、間山は足を振り上げた。

蹴りつけられると思い、遥は反射的に両腕で顔を覆った。

遥の代わりに、間山は靴の底で車イスのシートを蹴りつけた。

無人の車イスは物理準備室の中を逆走し、壁に激突して、ガシャンと大きな金属音を立てて止まった。

車イスは予想以上に大きく不快な音を立てた。その音に反応し、遥の体はビクンツと震えた。

遥は怯えたような瞳で、側に立つ間山の事を見上げた。

間山は今までの、表面を取り繕うかのようなニコニコとした笑顔を引っ込め、侮蔑的な瞳をして遥の顔を見下ろしていた。猫かぶりを止めて本性を露わにする。

「君は、自分がどれだけ人様に迷惑をかけてるか分かってるの？」

乱暴な口調で語りかけてきた。

「階段の上がり下りやトイレの世話だけじゃない。教室の通路にいても、君は邪魔なんだよ。車イスって意外に場所取るんだよねー。どこにいたって、嫌でも目についてしまう。みんな受験や何だで大変だっていうのに、君に気を遣わなきゃいけないし……超うざい。目障りなんだよ」

彼は吐き捨てるように言った。

そして、にやりといやらしく唇を吊り上げて笑った。

「こんなにも人に迷惑をかけてるんだ。遥係りになった者には、それなりのご褒美があってもいいと思うんだよね」

「ご、ご褒美……？」

遙は震えそうになる声を必死に押し留めて、上目遣いに相手を見詰めた。

自分は地面に座っているが、相手は目の前で仁王立ちに立っている。間山はいやに威圧的で、巨人のように大きく見えた。逃げ道が見つからない。

「恩返してやつだよ。ごめんだとかありがとうだとか、言葉だけじゃない。誠意を見せなよ」

間山は尻ポケットをこそごとと漁り、手のひらサイズの小さなビデオカメラを取り出した。

遙は訝しげに眉をひそめた。

この人は一体……。

間山は液晶モニターを広げ、撮影を始めた。ビデオカメラにre
cの赤いランプが灯る。

レンズを遙に向けた。

彼は舐めるようなねっとりとした手付きで、足の方から順に、遙の姿をカメラに収めていった。怯えた表情をしている遙の顔をアップで撮る。

「その顔いいね……」

間山はニヤニヤと笑っていた。心なしか、興奮でハアハアと息が荒くなっている。

間山は右手でカメラを構えたままその場にしゃがみ、ハイハイをするようにすり寄って来た。

彼の左手が、遙の足に触れた。愛しいものを愛でるように、さわさわと足を撫でられる。

「いやっ……！」

ぞわりと全身に鳥肌が立った。

不快な感覚はあるのに、自分の意志では、足を引っ込めることも出来ない。遙は慌てて間山の手をピシヤリと払いのけ、自分の足を体の方に引き寄せた。

ずりずりと腕の力だけで部屋の中を後退する。

そんな無様な遙を見下ろし、鼻で笑いながら間山は言った。

「どうせそんな体だ。この先、男なんて出来ないだろうぜ。むしろ君は、僕に感謝するようになるよ」

彼は取っておきの冗談でも言うように、ニヤニヤを笑っていた。

遙は間山の目的に気が付いた。

目の前には、興奮した獣のようにハアハアと息を荒げて、目を爛々と輝かせている同級生の男子がいる。

ああ、まさか。

物理準備室に押し込まれた時からもしやとは思っていたが、まさかこの人は、本当に、私のことを……。

滝のように降り続ける暗鬱な雨音が、二人きりの室内に響く。

物理準備室内は薄暗く、まるで光の届かない深海に引きずり込まれたような気分だった。優しさを餌に獲物をおびき寄せるチョウチンアンコウ。自分はまんまとその疑似餌に引っかかってしまった愚かな子魚か。

このままではいけない。

何か……場繋ぎのためにも何か喋らなければ……。

ドクンドクンと痛いほどに早鐘を打つ心臓を押さえ、遙は彼に質問した。

「し、将来の夢は介護職とかいう話も……嘘なんか？」

「ああ、あれね。うん、嘘だよ。君に近付くための口から出任せ」
彼は悪びれた風もなく、両手を広げてさりと答えた。

「ボケ老人の面倒をみるなんて冗談じゃない。あんなもん、前途ある若者の仕事じゃないよ。だいたいさあ、爺さん婆さんが無駄に長生きするから悪いんだよ。ちゃっちゃんとポツクリ死んでくれたら、老人介護の問題なんてなくなるのに」

酷いことを言っていた。

「障害者だってそうさ。池沼の人間が生きてたって何の役に立つんだよ？ 使い道がない。介護だ支援だなんてせず、さっさと殺してしまえばいいのに。無駄だから」

「な、何を……」

「役立たずが無駄に幅を利かせているから、僕ら普通の人間が苦勞するんだよ」

彼は根っからの差別主義者なのか、猫かぶりを止めて、日頃の鬱憤でも晴らすように饒舌に喋り続けていた。「僕ら普通の人間」という部分を強調して語る。

遙は車イスを失っているから逃げられない。目の前の少女は、いつでも自分の好きなように出来る……。

そんな圧倒的有利な立場にいるこの状況に酔っているのか、彼は余裕な顔をして、政治家のようにペラペラと偉そうに演説を繰り広げていた。遙の前を行ったり来たりしている。

「役立たずはみんな死んでしまえばいいんだ。無駄なんだよ。目障りなんだよ。……でも、君は違う。顔もかわいいしね。君は人様の役に立てる、有用な人間なんだ。君にも出来る、ぴったりの仕事があるよ」

間山は急に立ち止まった。

そして、まるで内緒話でもするかのように、遙に顔を近づけてそっと耳元で囁いた。

「そう、例えば………とかね？」
彼はひどく、卑猥な言葉を口にした。

遥は声もなく息を飲んだ。

一瞬何を言われているのか意味が分からなかったが、間山の冷血動物のような冷たい瞳で見詰められて……遥の全身の毛は、ぞわりと逆立った。さあつと血の気が引いて青くなる。

「まったくね、『遥係り』とは先生もいいネーミングをつけるじゃないか？　これから溜まったら遥ちゃんに抜いてもらう事にしよう。それが遥の仕事、遥の係り、遥係りってね」

言いながら、間山は動かない遥の足を靴の先でコンコンと小突いた。

遥は化け物でも見るような目で間山の事を見詰め、ずりずりと後退した。

「い、いやっ……」

声が震える。

「昔は慰安婦っていう仕事もあつたくらいだしねー。ちょうどいいじゃないか。そうだ。クラスのみんなにも話して、みんなにも協力してもらおうか？　みんなが遥ちゃんの世話をするんじゃないかって、遥ちゃんがみんなの世話をしてあげるんだよ。それこそ遥係りっぽい。車イスだからって、それくらい出来るでしょ？　ほら、口とか手を使ってさ」

間山はひどく上機嫌に言い、鼻歌を歌い続けていた。カッカッと踊るように靴を鳴らす。

二人きりの薄暗い室内に、調子っぱずれの Singin' in the Rain が不気味に響いていた。

間山はビデオカメラ越しに遥の事を見下ろしていた。

「その表情いいよ。女優になれるよ、遙ちゃん」

カメラのモニターをくりりと回し、その小さなモニターに映っている遙の姿を見せつけてきた。

そこには、足が動かず、逃げることも出来ないでいる一人の少女が映っていた。お姉さん座り気味に体勢を崩し、その場にぺたりとへたり込んでいる。怯えたような瞳をして、カメラを見詰めて震えている。

「息が詰まったようなその表情！ 怯える様！ いいよいいよー。凌辱物のＡＶとかあるけどさー、あれは女優の演技が素人臭くていけない。やっぱりこう、真に迫っていないとね」

彼は一人でぶつぶつと呟きながら、ニヤニヤと笑っていた。映画監督気取りでカメラを回す。

「や、止めて、撮らないで！」

カメラを叩き落そうと手を伸ばしたが、ひょいと簡単に避けられてしまった。

遙は半ば瞳に涙をにじませながら、キッと間山の事を睨みつけた。

「こ、こんな事をして、許されると思ってるの!？」

「許されるも何も、この事は世間の明るみには出ないよ。君は誰にも、この事を喋らない。喋れない」

「え……？」

「『この映像をバラまかれなくては……』ってやつさ。先生や警察に話したりしたら駄目だよ。じゃないと……ねえ？」

間山は細い目をさらに細め、にこりと親しげに微笑みを浮かべた。「今日だけじゃないよ。これから先も、君の『遙係り』は続くんだ。放課後の教室や、トイレの中や、人気のない校舎の裏で……。僕が求めたらどこにいてもすぐに飛んできて、君は僕にご奉仕するんだ……。この先ずーっと！」

興奮気味に、夢見るように語っていた。

「僕の恋人にしてあげるよ、遙ちゃん……！」
まるで恋人でも見詰めるような熱っぽい瞳をして、彼は遙の事を見下ろしていた。

遙は力任せに自分の足を叩いた。

動け動け、と自分の太ももを拳で叩く。

しかし、スカートから伸びた二本の細い足は、こんな時だというのに、自分の意識とは無関係にピクリとも動かなかった。この役立たずめと、遙は自分の足を呪った。

顔を上げる。

カメラを手にした間山が、ニヤニヤと笑いながらゆっくりと迫って来ていた。

液晶モニターの淡い光に照らされて、間山の顔が薄暗がりの中にぼうつと不気味に浮かび上がっている。その顔は、暗闇に潜む悪鬼のように見えた。

「い、嫌っ、来ないで……・！」

遙は腕を伸ばし、柵に納められてあったビーカーを掴んだ。間山の顔面めがけてしゃにむに投げつける。

狙い変わらず、ビーカーは間山の額に直撃した。

「うぐっ……！」

間山は呻き声をあげて、額を押さえてのけ反った。

ビーカーは床に落下し、パリンッと砕けた。破片が辺りに散らばる。

間山が呻いている間に、遙はほふく前進をするように体を引きずって部屋の外に逃れようとした。

廊下へ続く出口の扉に手を伸ばす。

（あ、後ちよっと……！）

しかし、復活した間山に上から押さえつけられてしまった。
キレた間山は右手に持っていたビデオカメラを放り捨てて、憤怒の表情で叫んだ。

「よくもやってくれたな、このっ！」

「きゃあ……！」

乱暴な手付きで仰向けにされ、お腹の上に馬乗りにされた。

「は、離して！」

でたらめに腕を動かして跳ね返そうとするものの、男と女の力の差。遥は呆気なく両手首を掴まれ、地面にねじ伏せられてしまった。ギリギリと、圧倒的な粗暴さをもつてして、手首を締めつけられる。完全に身動きを封じられ、床に釘付けにされる。

呼吸を荒げた間山が、遥の事をぎりりとした瞳で見下ろした。

「必死に抵抗する姿もかわいいよ、遥ちゃん……！」

誰か……！

遥は叫ぼうとした。

一瞬、ある人物の姿が脳裏に浮かび上がって来た。

桜並木の下で出会った、同級生の男の子。

車イス生活者である遥との接し方、距離の取り方に戸惑い迷いながらも、彼は真摯に遥に向き合ってくれていた。

口調はぞんざいでぶっきら棒な風だったけれど、その実、いつも遥のことを気にかけてくれていた。

みんなが車イスの遥のことをチラチラと横目で盗み見て、なるべく関わり合いにならないようにと避けていく中、例えそれが憐みから来るものだったとしても……彼だけは、真摯な態度で遥と向き合い、声をかけてくれた。

—— よお、後ろ押すの手伝おうか？

瞳に涙が浮かぶ。

遥は悲鳴を上げようとしたが、ぐつと口を塞がれてしまった。

「無駄さ。どうせこんな所を通りかかる奴はいないよ」

その時、廊下の方からピンポンパンポンという場違いな音楽が流れてきた。校内放送の音が校舎に響く。

『体育倉庫の鍵を持っている生徒は、至急職員室に戻してください』

その放送は、自分とは無関係な、どこか遠くの世界で響いているような感じがした。自分が異次元に飛ばされてしまったような錯覚を覚えた。つい先程まで、教室で静かにお昼ごはんを食べていただけなのに……。

これは、夢？

それとも現実？

間山は顔を近付け、べろりと遥の頬を舐めた。間山の粘着質な唾液が遥の頬を濡らし、つうと糸を引いた。

「甘い味がするよ、遥ちゃん……」

この不快な感覚。

それは絶望的なまでに、現実だった。

「んんっ……！」

顔を逸らして必死にもがく。

地面に投げ出されたカメラのレンズが、もつれ合う二人の姿を捉えていた。録画中を表す赤いランプが無慈悲に点灯している。

遥の上に馬乗りになりながら、ハアハアと息を荒げる間山。

彼はにやりとシニカルに笑った。

「動かないのは足だけかい？ マグロは嫌だぜ？」

そして間山は、遥の制服のブラウスに手をかけて、力任せに制服を左右に引き裂いた。

ブチブチと糸が引き裂かれてボタンが弾け飛び、胸元がはだけた。

白い素肌と、その小さな膨らみを包みこむ薄桃色のブラジャーが露
わになる。

遙は目をつぶって悲鳴を上げた。

2 - 5 ・物理準備室 A

――

和隆は遥の姿を探して職員室にやって来ていた。

職員室の中をキョロキョロと見回し、担任の教師を見つける。担任は昼飯のうどんをすすっている所だった。遥や間山の姿は見えない。

担任に近付き、声をかけた。

「先生、春川との話って終わったんですか？」

「ん、春川？ 春川遥がどうかしたのか？」

「話があるって呼んだんでしょ？」

担任はうどんをすすりながら首を傾げた。

「うん？ いや、私は知らないが？」

和隆は訝しげな表情をして尋ね返した。

「あれ……先生が春川を職員室に呼んだんじゃないかなかったですか？ 遥係りだった間山に頼んで」

「さあ、私じゃないぞ。職員室にも来ていない」

「……え？」

和隆は首をひねりながら職員室を後にした。

教室にいた騒がしい三人娘によると、間山が「先生が呼んでいる」と言って遥を連れ出したらしいが……実際には、二人は職員室には来ていなかった。他の先生たちにも確認してみたが、遥の事で間山に伝言を頼んだ者はいなかった。

（間山が嘘について、春川をどっかに連れ出したのか……？）
そう考えるのが妥当だろう。

嫌な予感がした。

ドクンドクンと和隆の動悸が早くなっていた。耳の奥で、自分の心臓が脈を打つ音が強く聞こえた。

とりあえず渡り廊下を渡って一般教室棟に戻った。

「どこに行ったんだ、あいつら……？」

ブツブツ呟きながら階段を上がる。

四階の最上段に腰掛けてだべっている男子生徒たちがいたので、彼らに質問してみた。

「ちよつと訊くけど、お前らつてずっとここにいた？ この階段を車イスの女の子を連れた奴が下りていなかったか？」

「ん……？」

彼らはお互いに顔を見合わせた。

「車イスの子なら、さっき渡り廊下を通って向こうの校舎に行ったよ。後ろを目の細い奴が押して歩いてた」

「ああ、そっぴやなんか変な鼻歌歌ってたな」

その言葉を聞き、和隆は礼を言って走り出した。よそのクラスの教師に「廊下を走るな！」と注意されたが、構うものか。

渡り廊下に出る。

外に出た途端、強い風が頬を打った。黒い雲がすごいスピードで空を滑っている。雨が斜めに降りつけていた。

和隆は特別教室棟に入った。

こちらの校舎はひどく静かだった。今までいた一般教室棟と比べると、まるで別の次元のようにしんと静まり返っている。

遙は車イスなのだし、彼女たちはこの四階にいるのか？

いや、間山に仲間がいたとしたら、どこにでも担いで連れていくことが出来るか……？

天井のスピーカーからピンポンパンポンという軽快な音楽が響き、『体育倉庫の鍵を持っている生徒は、至急職員室に戻してください』という旨の校内放送が流れた。

和隆は、うるせえ、今はそれどころじゃないんだよと八つ当たり気味に天井を睨みつけた。

雨はザーザーと降り続き、世界を陰湿に湿らせている。不吉な考えばかりが脳裏をよぎった。

とりあえず廊下を進む。

歩を進めていると、廊下の向こう、校舎のどん詰まりの所に白い何かが転がっていることに気付いた。

近付いて拾い上げる。

「これは春川の……」

それは、小さなスヌーピーの人形だった。遥の車イスのグリップにくくりつけられていた物だ。

和隆は横手を見た。

すぐ脇に、物理準備室の扉があった。

準備室の中で、何か物音が聞こえたような気がした。

誰かが争うような……くぐもった悲鳴のようなものが聞こえた。聞こえたような気がした。

「まさか……」

和隆はスヌーピーの人形を握ったまま、呆然と硬直していた。ゆっくりと目を見開き、物理準備室の扉を見詰める。

まさか、この扉一枚挟んだ向こう側に、彼女たちが……？

もう一度、無理に口元を押さえつけられたようなくぐもった少女の悲鳴が聞こえてきた。

和隆は飛び付くように準備室の扉に手をかけた。
しかし、扉には鍵がかかっていた。
引き戸はガタガタと揺れるだけで、開かない。
その音に反応し、室内で何者かが息を飲んだのが分かった。
緊張が走る。

——やはり、中に誰かがいる。

「そこにいるのか、春川っ!？」

ドンドンと扉を叩きながら和隆が叫ぶと、扉の向こうから「んん
っ……!」という鈍い呻き声が、切羽詰まった少女の悲鳴が返って
来た。

……合鍵を取りに行っている暇はない。

和隆は思い切り扉を蹴りつけた。

助走をつけて体当たりをブチかます。

ガタンツと大きな音を立てて、扉が外れた。

扉を押し分け、和隆は部屋の中に乱入した。

「春川あ!」

カーテンの閉ざされた、薄暗い部屋。

ビーカーや天秤などの実験道具で溢れかえった薄暗い物理準備室
の床には、もぞもぞと蠢く影があった。

細かいホコリが宙を舞っている。砕けたビーカーの破片が、光を
反射しながら地面に散らばっている。

そこには、四つん這いになった間山がいた。目を見開き、焦った
顔をして和隆のことを見上げている。

そして、その体の下には……遥がいた。

制服のブラウスを左右に引き裂かれ、ブラと白い素肌を露わにさ
れた遥がいた。

彼女の髪の毛は振り乱れて床の上に乱雑に広がっており、間山に馬乗りにされていた。上から手と口元を押さえつけられて拘束されていた。怯えたような顔をして、涙のにじんだ瞳で逆様に和隆の事を見上げていた。

薄暗い密室の中。

無理矢理地面に組み敷かれている遥と、それを押さえつけている間山。

そこに乱入してしまった和隆。

三人はお互いに呆然とした瞳で見詰め合っていた。

誰も何も言わない。

一瞬、世界が止まってしまった気がした。

和隆は呆然と目を見開き、間山の事を見下ろした。

「何してんだよ……」

我知らず叫んでいた。

「何してんだよっ!？」

間山の事を睨みつける。

ぶわっと、全身の肌が粟立っていた。体中の血液が逆流したみたいに、一瞬で体がカツと熱くなる。

間山は慌てて遥の上から飛びのいた。緩めていたズボンのベルトを力チャカチャ鳴らして締め直す。

挙動不審に、どもりながら彼は言った。

「ま、ま、まあ、待てよ……。これは、その……。ご、誤解だ!」

「なにが誤解だ! どう見てもこれは、これは……!」

レイプじゃないかと叫ぼうとしたが、途中で言葉に詰まってしまった。遥の前で直接的な言葉を使うのは気が引けた。そのままむぐ

つと口をつぐむ。

叫ぶ代わりに、和隆はずんずんと準備室の中に割って入って行った。床に倒れた遙を庇うように、彼女の前で仁王立ちに立って間山と対峙する。鬼のような形相をして間山の事を睨みつけた。

「あ、赤坂くん……」

背後の遙が、和隆のことを見上げて呟いた。

「お、お、落ち着けよ。これは……ちょっと魔が差したんだ！ 彼女とは何もなかった！」

間山は和隆の眼差しに気圧されながら、怯えたようにしどろもどろに言い訳を重ねた。どもりながら必死にわたたと両手を振る。

「じよ、冗談だよ。ちよつとした悪ふざけさ。本気じゃなかった……」

「まだ何もしてないって！」

「ちよつとした悪ふざけだあ？ まだ何もしてないだあ？」

和隆はチラリと遙のことを見下ろした。

ブラウスの胸元を引き裂かれて、ビクビクと震えている少女。

これで何もなかっただと？

何もしていないだと？

それ以上の事なんて、あつてたまるか！

「だって、だって……仕方ないじゃないか！ こっちは受験だ何だで自分の事で手一杯なのに、新学期早々遙係りなんて作られて……ムシャクシャしてたんだよ。遙係りなんて馬鹿らしい……こ、これくらいのご褒美、恩返しがあつて当然じゃないか！」

間山は痙攣するような、引きつったようなヘラヘラとした笑みを顔面に張り付けていた。抜け抜けと、身勝手なことばかり並べ立てる。

そして、同類を見るような瞳で、和隆の顔を覗き込んできた。

「赤坂……君だってそうだろう？ やりたかったんだろ？ だから彼女に優しくして、手懐けようとしてたんだ」

「ああ？」

「な、なんなら君が先にやってもいいよ。順番を譲るよ。僕は後でいい……」

この状況で、よくそんなセリフが吐けたものだ。

和隆は半ば呆れたように言葉を失っていた。

「もういい……何も言わない」

これ以上彼の言い訳を聞く気にはならず、また理性が抑えきれず、和隆はぐつと拳を握りしめて、間山の顔面をぶん殴っていた。

「うがつ……！」

間山は呻きながら吹っ飛んだ。

鼻血を垂らして地面を転がる。

拳を振り抜く時に間山の歯に当たって切れたのか、和隆の拳にも血が滲んでいた。

少女強姦なんていう大それたことを仕出かしたのだからもつと残忍な性格をしていて、逆ギレして激しく挑みかかってくるかと思っただが、倒れた間山は、そのまま無様にもがいていた。怯えたようにあわあわと叫んで、鼻を押さえて地面を転がっている。

弱者の前だとなことん気が大きくなるが、予定外の事が起きたり逆境に立たされたりすると、途端に肝が小さくなるタイプか？

間山は突然の第三者の登場に大いに動転し、狼狽し、完全に腰が引けていた。

「や、止めるよ！ 殴るなよ！ い、痛い、止めて！ 暴力反対っ！」

和隆は、床にビデオカメラが転がっている事に気付いた。録画中の赤いランプが灯っている。

「このカメラを使って、今後も春川の事を脅すつもりだったのか？

この映像をバラまかれなくては、って？」

余計にむかつ腹が立った。

和隆は眉間に深いシワを刻み、思い切りカメラを蹴り飛ばした。ビデオカメラは壁に激突し、パーツが弾けて停止した。

「おい、立てよ」

ドスの利いた低い声で言い、間山の襟首を掴んで無理矢理引きずり立たせる。

「ち、違うんだ……これは違うんだ！ ただちよつと、受験のプレッシャーだとか家のゴタゴタとかで気が立っていただけで……っ、つい魔が差したんだよ！」

彼はこの期に及んでも、まだ必死に言い訳を重ねていた。息継ぎをするのを忘れたみたいに、早口に弁明を垂れ流している。忙しく手を動かしている。まるで自分こそが被害者だ、というように。何が「つい魔が差した」だよ。カメラを用意したり、予め物理準備室の鍵を拝借しておいたり……全部が全部、計画的犯行じゃないか。

「自分が何をしたのか、分かってんのか！？」

自力では歩けない……逃げる事が出来ない車イスの女の子を、人気のない所に連れ込んでの強姦未遂。手口が悪質すぎる。虫唾が走った。

和隆は間山の顔を睨みつけ、シニカルに笑った。

「良かったな。これでもう、受験だ何だに悩まされることも無くなつたぞ」

少年院だか刑務所だか知らないが、こんな奴は塀の中にぶち込まれてしまえばいい。

「家族も悲しむだろうなあ、おい」

和隆がそう口にした途端、間山はさあつと青ざめた。

「……か、家族やママは関係ないだろ！」

和隆の手を払いのけて突き飛ばしてきた。呼吸困難に陥ったみたいに、ハアハアと息を荒げている。声が震えている。

家族、母親。

それがこいつのウイークポイントか？

怒りの収まらぬ和隆は、ふんと鼻を鳴らしてさらに間山のことを罵り、挑発した。

「息子が性犯罪者だと知ったら、父親や母親はどう思うだろうな？」

「うつつ……」

とにかく、こんな薄暗い所に引き籠っていないで明るい場所に引きずり出してやろうと彼の腕を掴もうとしたのだが、その途端、間山は怯えたように「ヒッ！」と短く悲鳴を挙げた。制服のポケットに手をつ込む。

「ぼ、僕に触るなっ！」

間山はポケットから引き抜いた右手を一線させた。

空中にキラリと光が走る。

「痛っ……！」

いざという時はこれで遥の事を脅しつけようと思っていたのか……

……間山は、ポケットに小さなナイフを忍ばせていた。掴みかかった和隆の左手を切りつける。

和隆は舌打ちしながら左手を引っ込めた。手のひらから鮮血が溢れ出てきた。白いリノリウムの床に、ポタポタと赤い血痕の花を作る。

背後の遥が息を飲んで叫んだ。

「あ、赤坂くんっ……！」

間山はガタガタと震える手で、銀のナイフを構えていた。怯えたような瞳をして、和隆にナイフを突き出す。

「ぼ、僕のせいじゃないぞ。君が邪魔をするから……き、君さえ現れなければ、全てはうまくいったんだ……君が悪いんだ！」

「……つの妄想野郎！」

和隆は思い切り上段蹴りを繰り出した。

鋭い蹴りが、ナイフを握る間山の手を直撃した。

ゴリツと鈍い音を立てて彼の指はひしゃげ、その手からナイフが転がり落ちる。

「歯あ食いしばれ！」

そのままの勢いで、和隆は血の滲む左手で間山の襟首を捕まえ、もう一度その顔面を殴りつけた。拳を振り抜く。

間山は体勢を崩しながらも出口の方に転がり、「わあああああああ！」と叫び声を上げながら、物理準備室から飛び出していった。バタバタと足音が遠ざかって行く。

「待てっ！」

すぐ様間山を追いかけてしようとしたのだが、このまま遙を一人置いていくわけにもいかない。

和隆はゆっくりと後ろを振り返り、改めて、遙の事を見下ろした。彼女はぺたんと床にお尻をつけて座り、服の前を両手でかき抱いて隠していた。引き裂かれたブラウスをぎゅっと押さえて閉じている。

まるで雪山で遭難した登山者のように、彼女はカタカタと小さく震えていた。放心したような瞳をして、和隆の事を見上げている。

制服のブラウスを引き裂かれただけで、他に異常なようだった。なんとかギリギリ、強姦未遂止まりで終わらせることが出来たらしい。

しかし、和隆はほつと胸を撫で下ろすどころか、苦渋に満ちた表情を作っていた。

事件が未遂に終わったからといって、それがどうしたというのだ。実際に襲われた彼女の恐怖心、心の傷はいかほどだろう？

目の前に欲望を剥き出しにした人間が迫っているというのに、逃げられない。逃げ出せない。足は動かず、ろくに抵抗も出来ないまま押し倒されて、洋服を引き裂かれて……。きっと、死ぬほど怖かったに違いない。

「春川……」

和隆は痛ましげに、呻くように彼女の名を小さく呼んだ。

そつと遥の側に歩み寄り、ひざまずく。

「……大丈夫か、怪我はしていないか？」

そう語りかける和隆の顔は、今にも泣き出しそうな表情をしていた。

「わ、私の事より、赤坂くんの方が……手を切られて、ち、血が……」

遥は血の滴り落ちる和隆の左手を見詰めながら、動転したように震える声で言った。

精神が不安定になっている時に血を見せるのはまずい。

「こんなにかすり傷だよ。大した怪我じゃない」

和隆は気軽に口調で答え、自分の体の陰に左手を隠した。

事件の元凶はいなくなったというのに、遥は未だ、怯えたように凍えるように、ビクビクと震えていた。未だ心は平静を取り戻せていない。動転したように忙しく視線を宙に泳がせている。

今のこの、精神が不安定になっている状態で男の自分が触れたら、余計に状態を悪化させてしまうだろうか？

そう躊躇いもしたが、意を決したように、和隆は遥の手を取った。
「あつ……………」

一瞬、遥の体がビクリと震えた。
震え続ける遥の手を握りしめ、和隆は彼女の体を自分の方に引き寄せた。こつんと、彼女の額に自分の額を押し当てる。

「もう大丈夫だ。安心しろ。あいつは、もういなくなったよ。だから……………もう大丈夫だよ」

和隆は遥を安心させるように、優しい声音で「もう大丈夫だから」と繰り返した。災いは、もう過ぎ去ったのだと。

遥の手は、ひどく冷たくなっていった。せめて自分の分の温もりが伝わればいいと、和隆は彼女の手をぎゅっと握りしめた。

「もう、大丈夫だから」

「うんっ……………うんっ……………」

遥は今にも泣きそうな顔をしながら、何度も小さく頷いた。

まるで恐れや不安が融解するように彼女の手は次第に温もりを取り戻していき、震えは治まっていった。

和隆は血が付着しないように注意しながら、自分の上着を脱いで彼女に渡した。

「とりあえず、これでも着てろよ」

引き裂かれた胸元を隠させる。

「うん……………」

遥は床に座り込んだまま、何とか心を落ち着かせようと大きく深呼吸を繰り返していた。自分の胸に手のひらを重ねている。

どうにか平静さを取り戻した遥は、ごそそとスカートのポケットを漁って、一枚のハンカチを取り出した。和隆の左手を見やる。

「手、見せて……………。手当てせな……………」

こんな時だというのに、彼女は人の心配をしていた。

「いいよ、別に大した傷じゃないから。平気だよ」

今の彼女に、こんなものを見せたくない。

和隆は大丈夫だからと言って遠慮したが、遥は「いいから！とにかく、血だけでも止めな……！」と言って譲らなかった。心配そうな顔をして、和隆の顔を見詰めてくる。

遥に急かされ、和隆はおずおずと切られた左手を差し出した。

その傷を見て、遥は小さく呻き声を漏らした。

「うあ……」

和隆の手のひらには、新しい生命線が出来たかのように深い裂傷が走り、ぱっくりと表面の肉が裂けていた。間山と揉み合っている時は頭に血が上って全然痛みを感じなかったけれど、改めて見ると傷は結構エグかった。ドクドクと血が流れ続けている。今更ながら、じんじんと熱を持ったように傷口が痛み始めた。

「だ、大丈夫？ 触るね……？」

遥はそつと傷口にハンカチを押し当てた。

白いハンカチはみるみる血を吸って、赤く滲んでいった。

純白に滲んでいく赤色を見詰めながら、和隆はぼつりと呟いた。

「ごめんな、春川……」

なぜ間山は春川遥を狙ったのか？

たぶんそれは、彼女が車イス生活者だからだ。

車イスさえ取り上げてしまえば、彼女はどこにも逃げられない。

絶対的優位に立てる。彼は「こいつなら簡単に手籠めに出来る」とでも考えたのだろう。

自分よりも劣る者。

群れに馴染めずにいる、一人ぼっちの弱い羊。

もし遥が車イスの障害者でなければ、さすがのあいつも、こんな

大それた真似は出来なかっただろう。

人の弱みに付け込んだ、人として最低の行為。

同じ男として、彼の存在を許すことは出来なかった。

それと同時に、間山の本性に気付かず、ギリギリのところまでその悪行許してしまった自分の存在をも、許すことが出来なかった。

自分がもっと早く、駆け付けていたら……。

自分がもっと、彼女のことを気にかけていたら……。

こんな事には、ならなかったかもしれないのに……。

和隆は顔を俯かせて、唇を噛みしめた。後悔が押し寄せる。

「ごめん……」

申し訳が立たなくて、まともに遙の顔を見ることが出来なかった。しかし、そんな和隆に対し、遙は泣き笑いのような表情を作った。

「なんで赤坂くんが謝るん？ 君が謝る必要なんて、全然ないよ」

「春川……」

彼女は傷を負った和隆の手を労わるように優しく撫でて、目を細めて小さく笑った。

「助けてくれて、ありがとう……」

向かい合ったまま、地べたに座り込む二人。

二人の間に、しんとした静寂が訪れた。

一般教室棟にいる学生たちのにぎやかな喧騒も、ここまでは届かない。

遮光カーテン越しの弱い明かり。

棚の上に陳列している不気味なホルマリン漬けの瓶や、命を抜かれた剥製の動物たち。

ザーザーと鳴り止まぬ雨音。

狭く薄暗い部屋の中に、二人ぼっち。

「……う」

今頃になつて強姦されかけた恐怖心と、それが過ぎ去つた安堵感などがないまぜになつてやって来たのか、遥はくしゃつと顔を歪ませた。

「うう……」

じわつと瞳に涙が浮かぶ。

次の瞬間、せき止めていたダムが決壊するように、遥はぶわつと泣き出した。

小さな肩が震える。

嗚咽が漏れる。

涙を止めようと手の甲で目元をこするが、涙はぼろぼろと、次から次へと瞳から溢れて頬を伝つていった。

遥は小さな子供のよう頬を赤くしてわんわんと泣いた。

怒りや悔しさをぶつけるように、和隆の胸に顔をうずめてポカポカと叩いてきた。小さく弱い拳が和隆の胸を叩く。

和隆は自分の胸の中でむせび泣く少女を見下ろししばし躊躇った後、遠慮がちに、彼女の小さな体を自分の方に引き寄せた。父親がやるような優しい手付きで、よしよしと彼女の背中を撫ぜた。

「うん、怖かったな……。怖かったよな……。でも、もう大丈夫だから……」

小さな少女を胸に抱く。

遥は身を委ねるように、そのまま和隆の胸に頭を預けて泣き続けた。

二人ぼっちの室内に、小さな嗚咽の聲が沁みた。

2 - 6 ・雨降って……

— 8 —

ひとしきり泣いた後、彼女は涙を押さえて和隆から体を離れた。すんすんと鼻をすすり上げる。

「……もう大丈夫か？」

静かに尋ねかけると、彼女はこくんと頷いた。

「うん……」

手の甲で涙をぬぐう。

二人はそのまま壁際の棚にもたれかかって、ぼうつとしていた。足を前に投げ出し、意味もなくその爪先を見詰める。

部屋の向こうでひっくり返っている車イス。棚には、なんだかよく分からない生物の標本瓶や、実験器具などが並んでいる。

ひどく静かだった。

五時間目の授業を告げるチャイムは、とつくの昔になっていた。

ぼんやりと宙を舞うホコリを見詰めながら、ぼつりと遙が呟いた。

「次の授業……なんやつけ？」

「数学。うちの担任の」

「行かなきゃ」

「いいよ、サボっちまえ」

和隆は投げやりに答えた。真面目に授業なんか受けている気分ではないし、第一、そんな恰好では教室に戻れないだろう。

遙は和隆が渡した制服の上着で、破れたブラウスの前を隠していた。制服の隙間から、彼女の白い素肌と淡い薄桃色の下着がチラリと覗いている。和隆はばつが悪くなって、すぐに視線を逸らした。

「……先生に話しに行こう」

タイミングを見計らい、和隆は切り出した。

自分では身動きの取れない女の子を人気のない所に連れ込んで無理矢理襲おうだなんて、手口が悪質すぎる。

担任は日和見な事なかれ主義者なのであまり頼りにならないが、校内で強姦未遂事件があったとなつては、動かざる得ないだろう。警察も出張って来ることになる。

しかし、遥は長い髪をふるふると揺らして首を振った。

「襲われたっていつでも服を引き裂かれただけやし、あんまり大事（おおごと）にしたいくない」

「でも……！」

声を荒げて反論しようとしたが、彼女は「いいの」と弱々しく言った。

「早く、忘れてしまいたいから……」

和隆は遥の横顔を見詰めた。

遥は小さく肩を震わせていた。未だ顔も青白い。

きつと、告発した後の報復を恐れているのだろう。逆ギレをされたら今度こそ何をされるか分からないし、セカンドレイプの問題もある。

彼女がそう言うのなら……。和隆は口をつぐんだ。あいつには二度と遥に近づくなと、しっかり脅しつけておかなければと思った。

和隆は床に転がっている小型のビデオカメラの事を思い出し、体を起こして拾い上げた。色々と弄ってみる。

液晶モニターはヒビ割れて亀裂が走っていたが、中のメモリー自体は無事のようなだった。そこには怯えた表情で地面に倒れている遥の他に、悠然とした口調でペラペラと喋っている間山の声も収録さ

れていた。

いざとなったら、これであいつを逆脅迫するか？　これをバラまかれたくなかったら、と。編集すれば遥の姿のみ消すことも出来るだろう。

カメラをポチポチ弄っていると、背後で遥がため息をついた。ハアと、深い吐息を漏らす。

「こんな体なんやし、風当たりが強いのは分かってたけど……。やっぱり、辛いなあ……」

彼女は気だるげな表情をして、自分の動かない足を見下ろしていた。

その声は少し鼻声だった。ぐすんと鼻をすすりあげる。

和隆はその場に立ちつ尽くしたまま、ぎゅっと唇を噛みしめた。

またも後悔と屈辱感が込み上げてくる。

狭く、薄暗い物理準備室の中で二人ぼっち。

「……負けんなよ」

和隆は遥に背を向けたまま、呟くように彼女に語りかけた。

「こんな事で負けるな。不登校とかになるな。全てを跳ね返せ」

遥は顔を上げて、黙ってその背中を見詰めた。

「こんな所で負けるな。くじけるな。もしまた何かあっても、俺が何とかするから……」

言いたい事、伝えたい事はもつとたくさん……いくらでも胸の中に湧いて来るというのに、想いはうまく言葉にならなかった。

心の温度と反比例して言葉はいつも言葉足らずで、口に出した途端噓っぽくなる。

この先も、彼女の前には多くの困難が立ち塞がり、苦難が降り注ぐのだろう。

ちょっとした、ハイハイをする赤ん坊にだって簡単に乗り越えられるような段差にも、いちいちつまづいてしまう日常の中で暮らす彼女。

健常者の同級生たちの中に馴染めず、クラスで浮きがちな彼女。だけど、それでも、彼女には負けないでもらいたかった。明るく笑っていてもらいたかった。悠然とカードを切り、この世の全てのものに真っ向から勝負を挑むようなあの凜然とした空気を無くしてもらいたくなかった。

彼女の笑顔を守るためなら、自分は喜んで火の海にだって飛び込んでいくだろう。

その気持ちだけは、本当だった。

負けるな、頑張れ。

泣いてもいいし、弱音を吐いてもいいけれど、それでも……こんな世界に屈するな。

「何かあっても、また俺がお前を守るから……お前も、絶対に負けるな」

和隆は彼女に背中を向けたまま、不器用に自分の足元を見下ろしながら、真剣な顔をして語った。

彼女は顔を伏せがちにして答えた。

「……うん、分かった。分かった」

遥のその瞳には、今までとは別種の涙がにじんでいた。

遥は気持ちを切り替えるように、気合いを入れるように目をつぶってパンパンと自分の頬を勢いよく叩いた。ふう、と肺の中の空気を全部吐き出す。

「今日はもう授業を受ける気分にはなれないし、早退することにする」

るわ」

「そうか……保健室とかで休んでいなくて平気か？」

「うん、大丈夫」

泣きはらして大分すっきりしたのか、彼女は吹っ切れたような表情をしていた。いつまでもへこたれてはいけないと、自分自身にうんと頷く。

「じゃあ荷物を取って来てやるよ。ついでに、どこかで着替えもかっぱらってくる」

「うん、ありがとう」

遙は自分の胸元を見下ろし、改めて頬を染めた。和隆の貸した上着をぎゅっと抱きしめてずり上げる。

倒れていた車イスを彼女の許に引き寄せた後、和隆は物理準備室を出た。

人気のない寂しい廊下を歩いて3 - 1の教室に向かう。

渡り廊下に出ると、大分風が弱まっていた。

東の方の空が明るい。じきに雨は止むかもしれない。

3 - 1の教室の引き戸は、相変わらずガタガタとやかましい音を立てた。黒板にチョークを走らせていた教師や生徒たちが一斉にこちらを振り向く。

「こんな時間まで何をやっていたんだ。昼休みはとくに終わっているぞ」

教師はぶつぶつと文句を言い「他にも何人が戻っていないし……」と、空席の目立つ教室を見回した。

「春川と、遙係りの間山もいないな。お前何か知らないか？」

「春川は気分が悪いから早退するそうです。自分は彼女の荷物を取りに来ました」

間山については、右から左に聞き流した。あんな奴のことは知らん。

和隆がそう説明すると、担任は「……そうか」とだけ言って、ずっと視線を逸らした。

和隆の左手に巻かれた血のついたハンカチに気付いたようだが、担任は深く追及しようとはしなかった。黒板に向き直って、構わず授業を続けようとする。

（春川の体調は大丈夫なのかとか、お前のその手はどうしたんだとか……聞いてこないんだな）

面倒事を避けようとする日和見主義者。やっぱりこの担任は当てにならないと思った。

和隆は遙の机に歩み寄り、蓋が開いたままの食いさしのお弁当を手早く片付け、荷物をまとめた。

荷物を持つて教室から出て行こうとしたが、その時、黒板の隅に書かれた『遙係り』の文字が目にとまった。

担任がこんなルールを作るから、遙はあんな目に……。

他にも間山のような奴が現れるとは思えなかったが、程度の差はあれ、邪な思いを抱いて……介助の振りをして遙にセクハラまがいの事をする奴はいるかもしれない。

和隆は忌々しげな顔をして遙係りという文字を見詰め、黒板消しを掴んでそれをかき消した。

「おい、何をしているんだ？」

担任が尋ねてきた。

和隆はくりりと振り返り、教室内を見回して宣言した。

「突然だが、春川の面倒は俺が見ることになった。『遙係り』は中止だ。彼女の面倒は俺が見る。じゃあそういう事で、以後よろしく。そしてそのまま、さっさと教室から出て行ってしまった。後ろ手に教室の引き戸をぴしゃりと閉める。」

教室の中は「……今のなに？」という感じでざわざわと騒がしくなっていたが、気にせずその場を立ち去った。

生徒指導室に予備の制服が備え付けられていたことを思い出し、女子のブラウスを拝借してきた。

物理準備室に戻る。

扉を開けようと取っ手に手をかけたが、ふと、和隆の耳に少女のすすり泣きの声が聞こえてきた。

必死に声を押し殺して泣いている遥の声が、扉越しに漏れ出している。

「お父さんっ……お母さんっ……」

例え辛くとも、例え悲しくとも。

和隆の前ではしっかりしなきゃと強がって無理をしていたのだから。彼女は小さな声で、嗚咽交じりに両親の事を呼んでいた。

「しっかり……しっかりしなきゃ……」

呪文のように繰り返し呟いている声が聞こえる。ぐすんぐすんと鼻をすすする音が聞こえる。

和隆はそつと扉から手を離し、静かに後ろに下がった。

沈黙を守ったまま物理準備室の扉を見詰める。

扉越しに、必死に声を押し殺して、ごしごしと目元をぬぐっている少女の姿が見えた気がした。

頃合いを見計らって、たった今帰ってきましたというような顔をして、和隆は準備室の扉を開けた。

「ただいま」

「あ……おかえり、赤坂くん」

彼女はすでに車椅子の上に戻っていた。

「わざわざごめんね」

遙はつい先程まで一人で涙を流していただなんて気配はおくびにも出さずに、平静を装っていた。これ以上和隆に心配をかけないようにと、無様な姿は見せてはならないと、何でもなような顔をして和隆を出迎える。彼女の目はウサギのように赤くなって少し腫れていた

自分で励ましておいてなんだが、そうやって無理に気丈に振る舞おうとする遥の姿を見ると、なんだか余計に息苦しくなって……それは小さなトゲとなって和隆の胸に食い込んだ。チクリと心臓をえぐる。

荷物と着替えを渡し、「じゃあ外にいるから」と言って、部屋から出た。

廊下に出た和隆は扉に背を預けて、ズリズリと体を落としていた。その場にペタリと座りこむ。

はあと大きなため息をついた。今更ながら、疲労感がやってきた。静かすぎる午後の学校。

しとしとと響く雨音。

背中越しに、ごそごそと着替えをする衣擦れの音が聞こえてきた。いつもならば普通に授業を受けている時間なのに、俺たちはこんな所で何をやっているんだろうと思った。

左手に巻かれたハンカチに視線を落とす。ハンカチについた血つて簡単に落ちるのかな？ 洗って駄目なら、新しい物を買って返そう。ぼんやりと、そんなことを考える。

しばらくして内側から扉が開き、着替えをすませた遙が出てきた。

「お待たせ。ごめんね、上着ありがとう」

「ああ」

貸していた上着を受け取った。

二人で階段の前まで移動してきて、和隆はある事に思い至った。
「ああ、しまった……」

一人では、遥を車イスに乗せたまま下に連れていくことが出来ない。おんぶをすれば一人でも連れていけるが、あんな事があつたばかりだし、彼女も男に触れられるのは拒否感があるだろう。

遥を見下ろして尋ねてみた。

「どうする、女の先生とか呼んで来ようか？」

「うーん……。今日に限って先生に頼んだりすると、変に勘繰られそうな気もするし……。別にいいよ。ごめんやけど、赤坂くんがおんぶしてつてくれへん？」

「いいのか？」

「何が？」

彼女は不思議そうに首を傾げた。

まあ、彼女がいいと言うならいいか。あまり躊躇うのも変だし。

和隆は遥の前にしゃがみ、彼女の小さな体をおんぶした。無人になった車イスの方は……。仕方がない。遥を一階まで下ろした後でまた戻ってこよう。

二人はゆっくりと階段を下りていった。

「ねえ……」

人気のない階段を下りながら、背中の遥が話しかけてきた。

「何だ？」

「ありがとう」

ありがとあと、彼女は関西弁混じりの独特のイントネーションで、改めてお礼を言った。

和隆の首に腕を回し、その首筋に自分の顔を押し付けてきた。後ろからぎゅっと抱きしめられる。

「……来てくれて、ありがとう」

顔は見えなかったけれど、声の感じで、彼女がどという表情をしているのか分かった。

和隆はそれに答えるように、ポンポンと無言で彼女の腕を優しく叩いた。

— 9 —

車イスも一階まで運び、二人は下駄箱前に移動した。

校舎を出る。雨は大分弱くなっていた。

「家まで送って行こうか？」

和隆は玄関の所でそう申し出たのだが、彼女はふるふると首を振った。

「そこまでは、甘えられへんよ」

「なら家の人に迎えに来てもらうとか」

「あんまり大事にしたいくないし、私なら大丈夫だよ。明日は……週末だから学校は休みか。月曜日には……うん、春川遥は完全復活してるから」

彼女は気丈に答え、にこりと微笑んだ。

遥はオレンジ色の傘を広げ、自分の力で車イスを転がして行った。

和隆は去っていく少女の後ろ姿をじっと見詰めた。

精一杯気丈に振る舞っているものの、その体は驚くほど小さく、か細く見えた。

両手で車イスのハンドリムを回しているの、遥は傘をうまく差すことが出来ないでいた。傘の柄を太ももにはさみ、首と肩でそれを固定している状態だった。いまいち不安定である。

「つとと……！」

強い風に煽られて、傘を吹き飛ばされそうになっていた。

（そうか、車イスだと、一人で傘を差していくのも一苦労なのか…）

そこまで考えが回らなかった。

やはり、このまま行かせられないな。

和隆は雨の中駆け出し、彼女の傘を掴んで支えた。

「あ……」

「やっぱり送って行くよ」

「ん……ごめんね。何から何まで」

「気にすんな。俺も授業をサボれる」

和隆は飄々とした口調で答えた。まさか間山が現れて再び彼女をかつさらっていくとも思えなかったが、やはり少し心配だ。

「俺が車イスの後ろを押して歩くから、お前は傘を差しててくれ」

「うん、分かった」

和隆は車イスのグリップを掴んで押し始めた。

二人で一緒に学校を出る。

背後にいる和隆が濡れないようにと、遙は目一杯腕を伸ばして傘を頭上に掲げていた。

「赤坂くん、濡れてない？」

「ああ。だからそんなに傘を高く持ち上げなくても大丈夫だよ」

「でも赤坂くん背高いし。頭つかえてない？」

「そこまで巨人じゃねーよ」

これも一種の相々傘なのだろうか？

雨の道を、一本の傘を差して並んで歩く。

「車イスだと、雨の日は大変だな。一人じゃあんまり出歩けないだろ？」

車イスを押して歩きながら、和隆は何気ない口調で遙に話しかけた。

彼女は「そうやね」と言っ、雨空を見上げた。

「車イスが濡れると、サビの原因にもなるしね。傘差してたら手も塞がってしまうし……。でも、車イスに傘スタンドとかを取り付けたら、ある程度一人でもやっていけるよ」

「そんなのがあるんだ？」

「引越しのゴタゴタで、今はちよつと行方不明中やけどね。風が強い日は、少し厳しいけど」

たまに乗用車とすれ違うくらいで、通学路には人通りが少なかった。

和隆は空を見上げながら呟いた。

「しかしよく降るな」

地上のいざこざや人間の業などお構いなしに、雨はししと降り注ぎ、世界を洗って浄化していた。全ての者の上に分け隔てなく平等に降り注ぐ。

腕を伸ばして傘を高くに掲げながら、遙が質問してきた。

「赤坂くんは雨が嫌い？」

「好きな奴もあんまりいないだろ？ ジメジメしてるし、服も濡れるし」

注意して歩いていても、地面からの跳ね返りなどでもズボンの裾は濡れてしまう。外出するのも億劫になるし、雨の日はあまり好きではなかった。

彼女は少し残念そうに言った。

「そっかー。私は結構好きやねんけどなあ、雨の日も」

「そうなの？」

「雨の音も、雨の匂いも、ちょっと湿ったこの空気も。昔から、なんか好きやった。雨が降ると憂鬱になるって人もいるけど、私は割と好き」

遥は傘の外にそつと手を差し出し、手のひらで雨粒を受け止めた。白くしなやかな指先に雨粒が滴る。

「子供の頃は……新しい傘を買ってもらった時なんかは、『早く雨が降らないかなー』って、逆さてるてる坊主を作ったくらいだよ」
遥はわざと明るい口調でしゃべっていた。

和隆もそれに習って、まるで何事もなかったかのような平穏な口調で会話を続けた。車イスを押しながら尋ね返す。

「逆さてるてる坊主って？」

「こつ……てるてる坊主を引っくり返して吊るしたら雨が降るっていうじゃん？」

「ああ、あれか」

「で、実際に雨が降れば傘を持って、長靴を履いて、外に飛び出したもんだよ。絶対濡れるからって、お母さんにレインコートまで着させられたっけ」

彼女はくすりと思い出し笑いを浮かべた。

和隆も「完全武装だな」と言って微笑んだ。

「水溜まりを踏んで歩いたり、葉っぱの裏にかたつむりを探したり。そして、雨が上がった後は、色んな物の上に水滴が球になって乗っていて、全ての物がキラキラと光って見えて……。雨の日も、なかなか楽しいもんですよ？」

和隆は小さい頃の遥の姿を想像してみた。

幼稚園か、小学校低学年程度の女の子。

その頃の遙は、普通に自分の足で立って歩くことが出来た。車イスに頼らずとも、どこにでも駆けていくことが出来た。

想像の中の幼い彼女は、新しく買ってもらった新品の傘を振り回して、雨の中楽しげにはしゃいでいた。

右手に雨傘。

足には長靴。

全身を覆うはカラフルな色のレインコート。

それらを装備した小さな子供は無敵である。

傘をクルクル回して雨粒を弾き飛ばしたり、魔法のステッキのようにシヤラランと振り回したり。水溜りを見つけては、長靴を履いた小さな足でバシャンと飛び込み、水滴を蹴り上げる。

降りしきる雨の中、少女は踊るように雨と戯れていた。

——その数年後、彼女は事故に遭って自力で歩く力を失う事になる。

和隆は今、自分の目の前にいる車イスの少女のことを見下ろし、なんだか見えない手に心臓をぎゅっと驚掴みにされたかのように胸が苦しくなつて、息が詰まった。

そんな和隆に対し、遙は今までと変わらぬ朗らかさで言葉を続けた。

「雨に濡れるのは嫌だっていうけど、服が濡れて肌にべったり張り付くあの感じも、子供の頃は何だか奇妙で面白くなかった？」

「まあ……子供の頃はな」

和隆も子供の頃は、台風や嵐が来るたびにテンションが上がって用もないのに傘を持って外に飛び出したものだ。靴の中がぐちゅぐちゅになるあの感触も、なんだか気持ちが悪くて、それでいて楽しかった。

しかし、いつの間にか雨はたんに憂鬱でうつとしいだけのもの

になっていた。子供の頃は、ただの通り雨でさえ大自然のアトラクションとして楽しんでいたはずなのに。

遙は空を見上げながら言った。

「こんな体だと雨の中移動するのは大変やけど、それでも、今でも雨は嫌いじゃないよ。雨降りの後には、ちよつとしたご褒美がもらえる時もあるしね」

「ご褒美？　なんだそれ？」

和隆が首を傾げて尋ねかけると、彼女はなぞなぞを出すように「さあ、なんでしょう？」と言って、人差し指を唇に押し当てた。

二人は大きな公園の側を通りかかった。

「春川の家ってこっちでいいの？」

「あ、その公園の中入ってくれる？　ここを通り抜けたら、家はすぐだから」

「ういっす」

和隆は公園の中に車イスを進ませた。

日頃は子供たちでにぎわっている公園も、雨降りという事で人気がなかった。

雨に濡れた鉄棒。

風に揺れる無人のブランコ。

ペンギンの形をした、大きな滑り台……。

あちこちに小さな水溜りが出来ていた。置き去りにされた誰かのゴムボールが砂場に転がっている。

雨の日の公園というは、どうしても物寂しい感じがするのだろつ。

濡れた草木の匂いがした。

濡れた遊具を横目に公園内を歩いていると、ふいに遙が顔を上げた。傘を下ろして空を見上げる。

「雨、上がったみたい」

そう言われて、和隆も空を見上げた。

暗い黒雲は風にちぎれて追い払われて、空のまにまにうつすらと青空が覗いていた。太陽が遠慮がちにひよつこりと顔を見せる。

雨上がりの空を眺めながら、何かに気付いたように遙が「あつ」と声を上げた。

「どうした？」

「ほら、あそこ。虹が出てるよ」

遙は空の彼方を指差した。

彼女の伸ばした指の先には、確かに七色の虹がかっていた。色鮮やかに、空にアーチを描いている。

「綺麗……」

彼女は、まるで一枚の絵画を鑑賞するように、空に掛かる虹の橋を眺めていた。眩しそうに空に手をかざす。

雨降りの後のご褒美とは、この事か。

和隆も足を止めて空を仰いだ。どこかで雨宿りをしていた鳥たちが、翼を広げて空に帰る。

（そつえば、虹を見るなんて……久しぶりだな……）

鈴なりに水滴が連なった鉄棒。

濡れたブランコ。

公園の中央に鎮座する、大きなペンギンの滑り台。

花壇の草花の上には、雨粒が球になって乗っかっていた。遙が言ったように、雨粒が光を反射して宝石のようにキラキラと輝いている。

二人は眩しそつに目を細めて、雨上がりの空を見上げた。

2 - 6 ・雨降って……（後書き）

NTRやら凌辱やらは苦手なので全力で阻止。

シリアスパートも終わったことだし、にゃんにゃんルート入ります。

3 - 1 ・ 月曜日

— 1 —

みんなの前で「春川の面倒は俺が見る」などと宣言した以上、中途半端なことは出来ない。

週明けの月曜日、和隆はいつもより早くに家を出て遙の自宅前へと足を運んでいた。一緒に登校しようとお出迎えである。

空は高く、清々しい朝だった。

「しかしでかい家だな……」

先週、彼女を自宅まで送った時も思ったが、彼女の家はでかつた。

建物は昔ながらの日本家屋で、庭も広い。敷地の中には本宅とは別に、小さな離れも建っていた。大きな木の門までそびえている。日本の住宅はウサギ小屋などとよく評されているが、ある所にはあるんだなあと思った。あいつん家、金持ちだったのか？

家のほぼ真正面に児童公園があり、和隆はそこで彼女が出てくるのを待つことにした。

ブランコに揺られながら時間を潰す。

集団登校をする小学生の群れが目の前を通り過ぎていった。

しばらくして、大きな門から車イスの少女が出てきた。今日の膝掛けのブランケットは淡いマリンブルー色をしていた。

「いーち、にいーい、さんまの、しっぱ……」

相変わらず、彼女は昔懐かしき数え唄を口ずさんでいた。数を一つ数えるたびに、ハンドリムにかけた手を大きく前に振り抜いて車イスを前に転がす。

和隆はブランコから飛び降り、背後から車イスの少女に声をかけた。

「相変わらずの美声ですね」

「うわっ!？」

彼女は驚いたようにビクリと反応し、車イスの上で飛び跳ねた。警戒するように体を強張らせ、ゆっくりと振り返る。

「おっす」

和隆は片手を上げて挨拶した。

彼女は和隆の顔を見て、安心したようにほっと胸を撫で下ろしていた。

「……な、なんや、赤坂くんか」

「なんやとはなんや」

「いや、ちよつとびっくりして」

彼女は一息ついた後、「おはよー」と言っただけにこりと微笑んだ。

遥は首を傾げて尋ねた。

「赤坂くんの家ってこっちの方やったんや？　ここ通学路？」

和隆の家はもっと北の方にあり、遥の家に寄ると大分遠回りになるのだが、「まあな」と適当に合わせておいた。

「せっかくだし一緒に行こうぜ」

「うん」

彼女は嬉しそうに頷いた。

なぜ遥は背後から声をかけられて、あんなにも大仰に驚き、警戒しながら振り返ったのか？

「間山がやって来たかとも思ったが？」

そう問いかけようかと思ったが、止めておいた。わざわざ口に出して蒸し返すこともないだろう。

和隆が遥を迎えに来たのは、間山の逆襲対策という意味もあった。さり気なく辺りに視線を走らせるが、特に怪しい気配はなかった。

遙が和隆の左手を見詰めながら言った。

「その手の傷……大丈夫だった？」

眉間にシワを寄せて気遣わしげな顔をする。

和隆の左手には、白い包帯がグルグル巻きに巻かれていた。

和隆はひらりと手を振って気安い口調で答えた。

「医者が大げさに包帯を巻いただけで、大した怪我じゃなかったよ。すぐ治るって」

「そう、良かった……」

彼女は心底安心したように頷いた。

本当は結構大した傷で、医者からは「傷が塞がった後も、生涯傷跡は残るかもしれません」などと言われた。

しかし、そんな事を説明しても変に遙が責任を感じてしまうだけだろうし、黙っておいた。傷跡が残る以外は障害もないようだし、手のひらにでかい生命線が出来たようなものだ。どうということもない。

遙は自分の力で車イスを進めていこうとしたので、和隆はずっと彼女の後ろについた。

「俺が押してつてやるよ。自分で漕いで行くのも、大変だろう？」

「あ、ごめんね？ うん、ありがとう」

彼女の言う「ありがとう」は独特の関西なまりをしていて、耳触りがいいというか、聞いていてすごく和やかな気分になる「ありがとう」だった。ありがとお、と右肩下がりの発音をする。

「手痛くない？ 赤坂くんの荷物持つててあげようか？」

「大丈夫。平気だよ」

登校中、すれ違う人々は物珍しげな顔をして、車イスの少女とその後ろを押して歩く少年のことを横目でチラチラと盗み見てきた。

それらの奇異の視線を無視し、和隆はゆっくりと車イスを押していた。

歩道の段差に差しかかった時は「段差上がるぞー」と声をかけて、車イスの前輪を浮かせて段差を乗り越える。大きめの段差を下りる時は、車イスを反転させて後ろ向きにゆっくりと下りる。

車イスの背もたれに頭を預けるように、遥が逆様に和隆の事を見上げてきた。

「この間の雨の時も思ったけど、赤坂くんって車イス押すのうまいよね」

「そうか？ こんなもんに上手いも下手もないだろ。言ってしまうば、ただ後ろを押して歩いてるだけなんだし」

「ううん。段差を乗り越える時とかすごく丁寧に優しい手付きでやってくれてるし、上手だよ。なんだか揺り籠の中にいるみたい。下手な人に押されると、車酔いをしたみたいに気分が悪くなっちゃうしね」

「車イスで車酔いつてのもすごいな」

どんな操縦をすれば、車イスに乗っている人間を酔わせることが出来るんだよ。

「ああ、そうだ……」

ある事を思い出し、和隆は制服のポケットを探った。

「これ返すよ。お前のだろ？」

ポケットの中から小さなスヌーピーの人形を取り出した。あの日、物理準備室の前で拾ったものだ。返すのを忘れていた。

「あー、ありがとう。無くしちゃったと思ってた」

遥は嬉しそうな顔をして人形を受け取った。

あの時は、こいつのおかげで遥の居場所が分かったようなもので

ある。こいつは幸運のお守りかもしれない。

「大事にしてやれよ」

「うんっ」

車イスに揺られながら、遥は体をひねって背後にいる和隆のことを見上げてきた。

じーっと上目遣いに見詰められる。

「どうした、前向いてないと危ねーぞ？」

「うん、それは分かってるけど……」

「なんだよ？」

「……赤坂くん、頭に寝癖ついとるよ？」

彼女は自分の前髪を指差して場所を示した。

「ん……？」

頭を撫でてみると、確かに前髪部分がぴよこんと飛び跳ねて寝癖がついていた。

和隆は朝が苦手なタチだった。遠足や旅行当日の朝などはなぜか人よりも早く起きれるけれど、ちよつと前まで遅刻ギリギリの時間に登校をしていたくらいで、寝起きが悪い。こんな早い時間から家を出ようと思うと、身だしなみにまで気が回らないのだ。

「あー……これは元々こういう髪型なんだよ」

適当に誤魔化してておいた。

「嘘やー」

「知らんのか。こういうのを無造作へアーっていうんだよ」

遥が助言をした。

「赤坂くんはもう少し、髪型とかに気を遣った方がいいと思うよ。せっかく格好いい顔してるのに」

「……格好いい？」

「背も高くてすらりとしてるしね」

彼女は無邪気な顔をして言った。にこつと優しく微笑みかけてくる。

こつも真つ直ぐに褒められると、背中がかゆくなるな。和隆は居心地悪げに「そいつはどーも」と苦笑した。

「っーか俺の事はどうでもいいよ。その言葉、そっくりそのままお前に返すぜ」

「うん？」

「そつちだつて、貞子みたいに髪を伸ばしっぱなしじゃないか。少しは気にしろ」

そう切り返されて、彼女は照れたように自分の髪を撫でた。

「あはは、貞子みたい？」

「貞子みたい」

毛先は不揃いだし、少し頭を俯かせればすぐに目元が隠れてしまいそうになるほど、彼女は長く前髪を伸ばしていた。まるで顔を隠すために髪を伸ばしているみたいだ。

「せつかく綺麗な髪してんのにもつたいたい」

一瞬、「せつかく綺麗な顔してんのにもつたいたい」と言おうかとも思つたが、照れくさかつたので止めておいた。その代わり、もう一度「もつたいたい」と繰り返す。

遙は照れたように前髪をペタペタと撫でつけて、顔を隠した。

「そ、そんな。お世辞を言っても何も出ませんよ」

若干赤くなつて謙遜する。

二人は付き合いたてのバカップルのようにお互いの事を褒めたり褒められたりしながら、そんな他愛ない会話をしながら、ゆっくりとしたペースで通学路を歩いていた。

車イスがキュルキュルとリズムカルに小さく軋む。

二人は学校に到着した。

スロープを使って校舎の中へ。

階段の前までやって来て、和隆は立ち止った。

（さて、どうすっかな……？）

自分から「遙係りは取り止めだ」などと宣言した以上、同じクラスの人に階段の昇降の手伝いを頼むのは何だか気が引けた。

やっぱり学校がエレベーターを導入してくれるのが一番なんだけどなあ、などと心の中でグチを零す。

「あのお……」

どうしたものと迷っていると、横から声をかけられた。

「今からその子を上に連れていくんですよね？ 手伝いましょうか？」

見ると、そこには見知らぬ男子生徒が立っていた。

彼は黒縁の眼鏡をかけていた。

多くの者がある程度服を着崩しているというのに、彼はぴっちりきつかり、襟元まで制服のボタンを止めていた。なんとなく優等生風の少年である。ネクタイの色から察するに、同じ三年生だ。

和隆は訝しげな表情をして相手の顔を見詰めた。

「ええと……誰だ、あんた？」

「僕は三組の宇津見です」

「宇津見？」

彼はくいつと中指で眼鏡のブリッジを持ち上げた。

「大変そうですね。手を貸しましょう」

やたら丁寧な言葉遣いをする奴だった。気遣わしげな瞳をして、車イスの遙のことを見下ろしている。

「……手を貸すって、なんで？」

間山の例もあるし、和隆は半ば警戒しながら、やや刺々しい口調で尋ねた。一見人畜無害な好青年っぽい雰囲気を感じているが、心の中では何を考えているか分からないのが人間である。

詰問調で尋ねかける和隆に対し、彼は馬鹿丁寧な口調で返事をした。

「なんで、って言われても困るんですけど……。強いてあげれば、善意の心？」

和隆は若干ぽかんとしながら聞き返した。

「……善意の心、っすか」

「自分で言う辺り、偽善っぽいですけどね」

彼は肩をすくめて、少し自虐的に苦笑した。

そして、こう切り出した。

「ええと、実はですね……。僕は、将来は看護職に就こうかと思っているんです」

その言葉を聞き、和隆と遙はお互いに顔を見合わせた。

「え……？」

警戒を通り越して、少し啞然としてしまう。

和隆は眉間に深いシワを刻みながら、突然現れた宇津見という男をじっと見詰めた。

こいつ、まさか本当に間山二号じゃないだろうな？

彼は自分のことを語りだした。

彼には大好きなお祖母ちゃんがいたのだが、病気で倒れ、寝たきりの生活になってしまった。

弱っていく祖母の姿を見て、彼は看護の道を目指すようになったらしい。体が不自由になって日常生活が困難になってしまった人たちのために、精一杯、力を貸してあげたいのだと。

「僕に優しくしてくれた祖母はもうこの世にいないけれど、その分、他の人に恩返しがしたいんです。それが祖母の願いでもありました」話を聞く限り、彼は最近の若者には珍しい好青年だった。立派すぎると言っても過言じゃないほど立派である。

……その話が、全部本当だとしたらの話だけど。

宇津見が言った。

「体験学習というわけじゃないですけど、せっかくだし、将来のために色々と実践してみたいんです」

和隆は胡散臭げな顔をして、値踏みするように宇津見の事を見詰めた。

信用していいものかと躊躇っていると、彼は不安げな表情を浮かべた。

「よそのクラスの自分が出張って来ても、迷惑なだけでしたか？

3 - 1には遥係りっていう制度もあるそうだし」

「ああ……遥係りならなくなったよ。あれは、潰れた」

その言葉に、驚いたように遥が声をあげた。

「あれ、そうなん？」

不思議そうに小首を傾げる。

そういえば、その辺の事情を遥に断っておくのを忘れてたな。和隆は「後で説明するよ」と遥に告げた。

目の前の青年は純情で誠実そうだったので、とりあえず、助力を仰ぐことにした。どっちみち、和隆一人では遥を四階まで連れていけない。

「じゃあ手を貸してくれ。春川も、それでいいか？」

「うん。よろしくね、宇津見くん」

遙は助っ人の宇津見にぺこりと頭を下げた。

宇津見も「こちらこそよろしく願います」と言っ、馬鹿丁寧にお辞儀をした。

「んじゃ行きますか」

宇津見は手順を心得ているらしく、ずっと遙の正面に回った。前後から遙の車イスを挟んで並び、「せーの」とタイミングを合わせ、て車イスごと少女を持ち上げる。

間山と違って遙に触れる時、車イスを持ち上げる時にはちゃんと「じゃあ今から車イスを持ち上げますね」、「しっかり掴まっています」などと言かけをしていた。

紳士のように丁寧で、執事のように慇懃な対応だった。しかもそれが嫌味ではない。

こいつは今すぐプロの看護師として働けるんじゃないかと思った。「実際に祖母の看護を体験しましたからね。その時は僕もまだ小さくて、あまり役には立てなかったけれど。だからこそ、しっかり勉強して色々と体験したいんです」

「はあー、立派やなあ」

遙は感心したように頷いていた。

感心するのは良いけれど、それが全部嘘、演技だったらどうするんだよ？

この子はちょっと純すぎるんじゃないかと心配になった。それとも自分がすれているだけか。

一行は三階まで上ってきた。いったん車イスを地面に下ろして小休憩する。

立派やなあと褒められた宇津見は、謙遜するように首を振った。

「僕なんて全然。立派なのは君たちの方ですよ」

「君、たち？」

和隆は不思議そうに首を傾げた。

障害にも負けずに毎日学校に通っている彼女は偉いと思うが、俺もか？

「赤坂くん、でしたっけ？ 君はずっと、春川さんを四階まで運ぶのを補佐してきたんでしょう？ 立派です」

「別に、そんな大したことはしてねーよ」

そして一言、宇津見に注意を入れた。

「ちよつと引つかかったんだけど……『四階まで運ぶ』じゃなくて、『四階まで連れていく』な？」

重箱の隅をつつくようで悪いが、何気ないちよつとした言葉の違いで、大分印象が変わってしまう。『運ぶ』では、まるで遥が荷物か何かのようではないか。

そう言われ、宇津見はハツとしたように体を固くした。

「す、すみません！ 注意が足りませんでした！」

体の横にピタリと手をつけ、体の角度を六十度に傾けて頭を下げる。

大真面目で大仰な謝罪をされて、遥は恐縮したようにブンブンと両手を振った。

「そんな、いいいいいよ！ 気にせんというて」

遥は逆に、何か物言いたげな表情をして和隆の顔を見上げてきた。
「……赤坂くんって、変にそういうところに気を回し過ぎな所あるよね？」

「そうかな？」

「そっだよ。今のだって、ほとんど揚げ足取りみたいなもんやん？」
和隆は、むしろ遙が鷹揚すぎなのではないかと思った。まあ、いちいち他人の言動などを気にしていたら、車イスの彼女は疲れてしまつて外を出歩けなくなつてしまうのだろうけど。

遙は唇を尖らせながら和隆に言った。

「もつと普通に接してくれて構へんのに」

「うん……」

和隆は車イスの少女のことを見下ろしながら、困つたように頭をかいた。

あまり周りが過剰反応しすぎても、彼女は負担を感じてしまうか？
差別的なことに過剰反応して忌避しようとする事自体、差別的？

（難しいなあ……）

和隆は相変わらず、彼女との距離感に戸惑い、躊躇っていた。
どこまで踏み込んでいいのか。どう付き合っていけばいいのか。
普通の女の子と接するように、普通に接するべき？

しかし実際の所、彼女は多くの一般的な女子高生とは違って、足が動かない。

自力では歩けない。

車イスに乗っている。

身体障害者。

いつもどこかで、和隆の頭の中でその単語がチラチラとちらついていた。心にブレーキがかかり、躊躇いが生じる。

いや、そういう気持ちこそが彼女を傷付ける可能性もあるわけだ……。

つか、前も同じような事を考えなかったっけ？

お前は何も進歩してねえなど、和隆は自虐的に自分の心に問いかけた。

何をもって誠実とするのか。

どう接するのが正解なのか。

もつとも、彼女が車イス生活者であろうがなかろうが、健全者だろうが障害者だろうが、人と人との正しい距離感、正しい人間関係の築き方なんてそう簡単に見定められるものでもない。

人は迷いながら、時に無意識のうちに相手のことを傷付け、また相手に傷付けられながら、それでも少しずつお互いのことを理解し合い、一歩ずつ歩み寄って行くしかないのだ……。

なんて、道德の授業のような答えに軟着陸した。

（つーか、そんな小難しいこと、俺が知るか）

自分はただ、彼女の力になりたいだけだ。

自分のこの手足が、誰かの助けになればいいと。

そもそもの話、人と人が関わり合いになる中で、その接し方や付き合い方に「正解」も「不正解」もないだろう。全部が手探り足探りである。

（難しいなあ……）

和隆はハアと大きなため息をついた。

「どうかしたん、難しい顔して？」

遙が小首を傾げて尋ねてきた。

「人間って難儀な生き物だよな、って話だよ」

知った風な顔をして答えると、彼女は「……？」と頭の上にはてなマークを浮かべていた。

三人は校舎の四階まで上がってきた。ゆっくりと遙の車イスを地面に下ろす。

和隆の心配をよそに、一行は何の問題もなく、階段を上がり切ってしまった。

「手伝ってもらってありがとうね」

遙は改めて宇津見にお礼を言った。

「いえ、こちらこそすみませんでした。また何かあった時は、遠慮なく声をかけてください」

宇津見は「では失礼します」と言って、ぺこりと頭を下げて、自分の教室の方へと去っていった。

彼は最後の最後まで、紳士然としていた。

手を振ってその後ろ姿を見送りながら、遙が言った。

「……いい人やったね」

「……ああ、いい人だったな。間違いなくいい人だ」

和隆が気を回し過ぎていただけで、彼は本当に「ただの人の良い好青年」だったらしい。たぶん赤い羽根募金などを見かけたら、必ずお金を寄付するタイプだ。横断歩道を渡れずに困っているお年寄りがいれば、担いで向こう岸まで連れて行ってあげるタイプだ。疑いの目で見えていた自分の心が恥ずかしい。

当たり前のことだが、世の中には悪い奴もいれば良い奴も同じだけ……それ以上にいるものだ。

3 - 2 ・ 青空ランチ

― 2 ―

三年一組の教室に到着した後、和隆はいつ間山がやって来るだろうと警戒して教室の入り口を睨みつけていたのだが、ついに彼は登校して来なかった。

その後も間山は学校には現れず、不登校になっていた。

後で知った話だが、彼は家で自分の部屋から出てこなくなり、引きこもり状態になったらしい。

（お灸が効き過ぎたかな……？）

和隆はこの休日、二度とあんな事が出来ないようにと彼の家に壊れたビデオカメラを送りつけたり（データは抜いておいた）、怪文書を投函したりして間山にプレッシャーをかけていた。

元々逆境に弱い線の細い性格をしていたようだし、自分の殻に閉じこもってしまったのかもしれない。いつ警察が自宅に踏み込んでくるかと、ベッドの中でビクビクしている。

少々やり過ぎたかなとも思ったが、まあいいやと開き直った。自業自得だ。ざまあ見やがれという感じである。

そしていつの間にか、彼は「転校」した事になっていた。

何事もなかったかのように世界はまた日常を取り戻し、退屈な授業は続いていった。

四時間目の授業が終わり、昼休みの時間となった。

「終わったー」

「昼飯だー！」

勉強から解放されたクラスメートたちは、次々と猫のようにうー

んと大きく伸びをした。ある者は売り切れ御免のコロッケパンを求めて、購買部目指して教室から飛び出していく。ある者は馴染みのグループと一緒にご飯を食べようと、机を動かしてくっつけ合う。途端に教室や廊下の方がガヤガヤと賑やかになった。

そんな中、遥は相変わらず一人飯だった。

自分の席にちょこんとついたまま、そそくさとカバンから弁当箱を取り出す。

その様子を眺めていた和隆は、意を決したようにすくつと自分の席から立ち上がった。

遥の机に歩み寄り、声をかける。

「今日も教室で食べんの？」

弁当の包みを広げようとしていた遥が顔を上げた。

「うん、そのつもりやけど。どうしたの？」

「ええと、その……」

なんとなく照れくさくて、気恥しくて。

和隆は視線を逸らしてポリポリと頬をかきながら、自分のお弁当箱を片手に切り出した。

「た、たまには外で食べないか？　一緒に食おうぜ」

そう誘われて、遥は面食らったような表情をしていた。

「え……。どうしたん、急に？」

「いつも教室の中じゃ息が詰まるだろ？　せつかくのいい天気だしさ。たまには表で食おうぜ」

和隆は窓の外を眺めた。

そこには、抜けるような青空が広がっていた。教室に籠ってご飯を食べるには惜しいくらい、いい陽気である。

遥はしばらくの間眩しそうに教室の窓から外の景色を眺めていた

が、表情を曇らせて、小さく首を振った。

「外で食べるっていつでも、私は……階段の上り下りとか、大変やし……」

人に余計な迷惑をかけないようにと気を遣って、遠慮する。

「ごめんやけど、私は行かれへんわ。誰か他の人を誘ってくれる？」

しかし、和隆は引き下がらなかった。遥の前に座り込み、半ば強引に食事に誘う。

「いいじゃん、俺が外で食いたいんだよ。付き合ってくれよ」

「でも……」

「なんだよ？ それとも何か？ 俺なんかとは一緒にご飯は食べたくないつて思ってるのか？ お前なんか一人で便所飯でも食ってるって？」

「ええっ！？ だ、誰もそんなことは言っていないよ！」

彼女は慌てたように、大真面目な顔をしてブンブンと両手を振った。

和隆はとりわけ気軽に口調で言った。

「だったらいいじゃん。一緒に行こうぜ。外で食った方が、絶対美味いよ」

遥はしつこく「ええと、でも……だけど……」などと消極的な言葉を呟いていた。膝掛けに覆われた自分の下半身を、ちらりと見下ろす。

けれど和隆に熱心に誘われて……最終的に、遠慮がちに、彼女は言った。

「……本当に、いいの？」

おずおずと、上目遣いに和隆の顔を覗き込んでくる。

和隆はニツと微笑みながら答えた。

「おう、もちろんだ」

「ほんとにほんと？」

「だからいいって言ってるんだろ。むしろこっちがお願いしてんだよ」
そう言つと、彼女はなんだか照れたような、嬉しそうな顔をして、小さく綺麗にはにかんだ。

「ん……分かった……。それじゃあ私も、喜んで、お供させてもらうわ」

「なになに、表にご飯食べに行くの？」

若文が話しかけてきたので、三人で行くことにした。

和隆は若文と協力して、遙を車イスに乗せたままえっさほいさとお猿のかごやよろしく階段を下りていった。

宙に揺られながら、申し訳なさそうな顔をして遙が言った。

「いつもごめんね。渡辺くんも、一緒に運んでもらって」

「いいってことよ。気にしなさんなって」

彼は気軽に口調で答えた。

「そついえば和隆。お前、その手どうしたんだよ？」

若文が和隆の左手の包帯を見詰めながら尋ねてきた。

「ああ、これか……？」

しばし逡巡した後、和隆はナチュラルに嘘をついた。

「料理しようとしたら、間違つて包丁で切っちゃって」

間山に斬りつけられたなんて話したら、そうだった経緯まで説明しなければなくなる。遙を守るためにも、出来ればあの事件のことは全部無かったことにしておきたかった。

事の真相には気付かず、彼は自分が傷を負ったみたいに痛そうに顔をしかめた。

「何してんだよ、ドジだなー。気をつけろよ？」

「ああ。慣れないことはするもんじゃないな」

遙が物言いたげな顔をして和隆の顔を見上げてきたが、目配せし
て黙っていてもらった。

「で、でも、赤坂くん……」

「いいんだよ」

彼女が無事だったのだから、自分としては他に何もいらぬ。

一階に到着した後、和隆は若文に尋ねた。

「それはそうと若文。お前弁当は？」

和隆の弁当は遙に持つてもらっているが、彼は手ブラだった。

「ああ、俺はいいよ。今日弁当持ってきてないし。よそで食べるわ」

「ん？ だったら購買部で何か買ってくればいいじゃないか。一緒に
に食おうぜ」

そう言つて昼飯に誘ったのだが、彼はノーサンキューという風に
手を前に突き出して、静かに首を振った。

「……和隆。お前だつて彼女と青空の下で、二人っきりで食事がし
たかつたんだろ？ そのために勇気を出して誘つたんだろ？ 邪魔
はしないぜ」

彼は訳知り顔をして、一人でうんうんと頷いていた。

和隆は少し赤くなりつつ否定した。

「な、何言つてんだよ？ 別に俺は、そんなつもりじゃ……」

「皆まで言つな。お前の気持ちは分かっている」

グツと親指を突き立ててきた。

「てめえ、何をどう曲解しやがつた」

「とにかく、俺は行くわ。渡辺若文はクールに去るぜ」

そう言つて、彼は何事かを背中で語りながら、クールに去つてい

った。

去り際、和隆の肩をぼんと叩いて「頑張れよ！」と無駄に熱いエールを残していった。

てつきり三人で昼飯を取るものだと思っていたので、予期せず遥と二人きりになってしまい、和隆は変に意識してドギマギしてしまった。

（あの野郎、変なこと言いやがって……）

チラリと遥のことを見下ろすと、彼女の方もほんのりと頬を赤くしていた。車イスの上で赤くなって、「いや、別に……あの……ねえ……？」などと呟きながら、膝の上に置いたお弁当箱の紐をもじもじと指先で弄っている。

和隆はため息をつきながら言った。

「ったく、あいつはろくな事を言わないな」

「でも、いい人だよな」

「……あいつがあ？」

和隆は「冗談だろ？」という風に訝しげに眉をひそめた。

「ま、いいや。とりあえず行きますか」

和隆は遥の後ろに回り込み、車イスのグリップを握った。

二人で中庭に出る。

「あそこにしょっか」

二人は大きな木の下の日陰に入った。地面には青々とした芝生が茂っている。

テニス部のコートの方から部員たちの練習の音が聞こえ、どこからか音の外れたプラスバンドの演奏が響いていた。

日差しは穏やかでいい陽気だった。風が吹き抜け、遥の長い髪を

さらりと撫でる。

そこに、和隆らのように外で昼食を取っている学生たちがいた。

「降りられる？」

遥が車イスから降りようとしたので手を貸そうとしたが、彼女はよいしょと両腕の力で体を持ち上げ、自分の力だけで器用に地面に下りてみせた。芝生の上でちょこんとお姉さん座りになる。

「うまいもんだな」

感心したように言うと、彼女はやや自慢げに胸を張って答えた。

「それでも車イス歴五年ですから」

足の位置や膝掛けを直す。

そういえば彼女は、中学一年の時に、事故で足を失ったんだっただけ……。

和隆は遥の車イスを見詰めた。

彼女の青春、学生生活は全て車イスと共にあったのだ。

好きな時に好きな所に行くこともままならず、ちよつとした段差にもつまずいてしまう人生。

元気にのん気に、部活だ何だと青春を謳歌している同級生たちを見ては、「どうして私だけが」と、己の動かない足を責め苛んだこともあるだろう。枕を濡らした事があるに違いない。

しかし現在、和隆の前にいる彼女はそんな色は一切見せず、元気にのん気に「さあ食べるぞー」と弾んだ声を出していた。

二人はお弁当を広げてお昼ごはんを食べ始めた。

和隆は彼女のお弁当箱を見ながら言った。

「ずいぶんとちっちゃな弁当箱だな」

「そお？」

「小学生用なんじゃないか、それ？ そんなんで足りるの？」

「うん。割とお腹一杯になるよ」

「育ち盛りの男子からすると、よくそんな量で夕食まで持つなと思った。」

「まあ、あんまり激しい運動とかしないからね」

「そう言って、彼女はパクツとご飯の塊を口の中に放り込んだ。」

「その卵焼きうまそうだな」

「いる？」

「いいの？」

「ええよ。味は保証できへんけど」

「じゃあ代わりにひじきをやるよ、ひじき。丸ごと持ってけ」

「ひじき嫌いなん？」

「や、そんなことはないですよ。大好物ですよ」

「彼女は笑いながら言った。」

「そんな事言って、嫌いな物を私に押し付けようとしてるだけやないの？ セリフが棒読みですよ」

「昼下がりの青空の下。」

「芝生の上でお昼ごはんをパクつきながら、二人は色々なことを話した。」

「ところで、こっちのうどんやお蕎麦のおつゆって、からくない？」

「濃すぎるっていうか」

「そうかー？」

「あんなん、よう飲めんで」

「……え、飲むの？」

「……え、飲まんの？」

「二人は顔を見合わせた。軽くカルチャーショックである。」

和隆は改めて遙のことを観察した。

彼女はなかなか頭が良かった。この間のテストも、クラスで一番だった。全体の成績も、かなりのレベルの高さにいる。

穏やかで人当たりのいい性格をしているし、いつも朗らかだし、容姿も……なかなかにかわいい系の顔立ちをしている。

関西弁はきつく聞こえるという先入観があったが、彼女の話す方ははゆったりとしていて、聞いていてなんだか心地よかった。優しい感じがする。

チラリと、和隆は膝掛けのブランケットに覆われた彼女の脚を見下ろした。

幸せそうな顔をして、ほくほくとご飯をパクついている遙の顔を見詰める。

(どうしてこいつは……)

ふいに、会話が途切れた。

じっと見詰められていることに気づき、遙がお弁当から顔を上げた。

「どうしたん？ 私のほっぺたに何かついてる？」

「いや……」

前から聞こうかどうしようかと迷っていたことがあったのだが、この和やかな空気を壊すのもなんだ。「何でもない」と和隆は首を振った。

しかし、気持ちが顔に出てしまったらしい。遙は言った。

「なにか質問？ があるなら、何でも聞いてくれてええよ」

「何でもっスか？」

「スリーサイズ以外ならね」

彼女は冗談めかして微笑んだ。

「ええと……」

和隆はかなり逡巡した後、躊躇いがちに口を開いた。

「別にそれが悪いっていうわけじゃないし、ただ前から気になってた、ってだけなんだけど……」

などとたくさん言い訳を重ねた後、正面から彼女に尋ねた。

「春川は、どうしてこの学校に転入してきたんだ？ 養護学校とかでなく」

今は特別支援学校というのだろうか？

そっちの方が建物のバリアフリー化が進んでいるし、整備やサポ―トも整っていたはずだ。車イスという事でクラスメートから白い目で見られることもなかっただろう。

小学生でもなし、わざわざ自分から突っかかってイチャモンをつけるという事はなかったけれど、教室には未だ遙を極端に避けている者は多かった。そういう学校に行っていれば、間山みたいな奴に嫌な目に遭わされることもなかったはずだ。

「うーん……」

彼女は箸を置いてしばし思案してから、喋り出した。

「家から遠くて通えなかった」

和隆は半ば呆氣に取られたような顔をして答えた。

「距離の問題なのか？」

「養護学校は、一番近くてここから電車で九十分くらいの所にあつてん。毎日通うには、ちょっとね」

「遠くて通えなかったって……関西からこっちに引っ越してくる時に、学校のことは考えなかったのかよ？」

娘が車イス生活者なのだから、真っ先に考えそうなことだと思うのだけど。親御さんは何をしていたんだ？

遥は表情を曇らせた。

言おうかどうしようかと迷うように、何かを言いかけては口をつぐむ。

「えと……」

「なにか、あるのか？」

なにか……他人が安易に踏み込んではない領域にズカズカと土足で踏み入ってしまったような気配を感じ、和隆は不安げな表情を作った。やはり訊くんじゃなかったか。

遥は言いにくげに、言葉を選ぶような慎重な口調で答えた。

「私の足は交通事故に遭って動かんようになった、つてのは話したっけ？ 別に隠してたわけじゃないんだけど……その時に、私の両親は亡くなってしもてん」

「……え？」

和隆は絶句した。

「事故に遭った日、私は両親と一緒に車に乗ってたんやけど、その時、前から走ってきたトラックと正面衝突して……。後部座席に座ってた私は足の怪我だけですんだんやけど、前に乗っていたお父さんとお母さんは……」

「そうか……」

知らなかったとはいえ、嫌なことを思い出させてしまった。和隆は「ごめん……」と頭を下げた。

気まずげに恐縮して顔を伏せると、遥は慌てたように明るい声を出して「別にいいよ」と手を振った。

その後、両親を失い車イス生活になった遥は、親戚の家を転々としていたらしい。

「今までは関西に住む親戚たちの家を渡り歩いてたんやけど、今度は、この町に住む父方の叔父さんの家に厄介になることになって……。この家で、八件目かな」

和隆は気難しげに眉をひそめた。

「親戚の家をタライ回し、ってやつか？ ひどいな……」

よくある話とはいえ、実際に自分の耳で聞くとなると……その実例を目の当たりにしてしまつて、やっぱり少し、ショックだった。

親戚の家を八件もタライ回し。

まるで厄介な荷物を押し付け合うように、「次はお前の所で面倒を見る」、「いいやお前の所だ」などと醜く話し合っている大人たちの姿が目に見えた。

そして、そのやり取りを廊下で盗み聞きしてしまい、唇を噛みしめて涙を流す車イスの少女……。

いや、まあ、それは和隆の勝手なイメージなのだけど。

憤る和隆に対し、遙は曖昧な表情を作つて言った。

「養つてくれるだけ、ありがたいと思つてるよ」

力ない微笑みを浮かべる。

公園の側に建つ、離れ付きのでかい屋敷のことを思い返した。あそこには実の家族と住んでいるのではなく、あくまで、下宿させてもらっているだけなのか。

そういえば、と和隆はある事を思い出した。

間山に襲われそうになつた後、一人になつた遙は「お父さん……」

「お母さん……」と嗚咽交じりに両親の事を呼んでいた。あれは、天国にいる両親に語りかけていたのか。

ひとりぼっちの、春川遙。

下宿させてもらっている叔父の家からは養護学校は遠かつたし、

叔父たちの支援は望めない状況だった。だから彼女は、この普通の公立高校に通うことになったという。

遥は気持ちを切り替えるように明るい声で言った。

「でも私は、この学校を選んで良かったと思ってるよ」

「なんで？」

「養護学校卒だと、この先の進学や就職に不利になる、ってこともあるらしいしね。私も、元々夢の実現のために普通の高校に通いたいと思ってたし」

「ああ、そうか……。そういう事も考えなきゃいけないのか」

高校を卒業したらそれで終わりなわけではない。

大学に行くか、どこかの会社に就職するか……。どちらにしても、これから先も彼女の人生は続いていくのだ。この動かない足を引きずりながら。

和隆は自分の考えの足りなさを恥じた。

この先のことを考えると、やはり遥は、普通学校に通った方が良かったのだろう。足が動かない以外は至って健全なのだし。例え風は冷たくとも。

そこまで考え、ふと思った。

（……っーか、夢ってなんだ？）

遥は朗らかに言葉を続けた。

「うん……やっぱり、この学校を選んで良かったと思うよ。赤坂くんとも、出会えたしね」

そう言って、彼女は和隆の顔を見詰めながら、にこりと春風のように優しく笑った。

「……そうっすか」

よくそんな気恥ずかしいセリフを臆面もなく言えるな、と思った。

和隆はどう反応したものかと、若干照れて赤くなりながら答えた。

「……お前さ、天然って言われない？」

「えー？」

彼女は不思議そうに小首を傾げていた。

3・3・書を捨てよ、町に出よう

— 3 —

弁当を食べ終わった後も、二人は芝生の上で足を延ばして、青空の下で色々とお喋りを続けていた。

二人の頭上で学校のチャイムが鳴り響いた。

「しまった、もうこんな時間か」

すっかり話しこんでしまい、時間が経つのを忘れていた。

周りにいた生徒たちは次の授業に備えて既に教室に戻っていて、中庭にはもう誰も残っていなかった。

遙は慌てて車イスの上に降り、二人は校舎の中に戻った。

階段の前まで移動する。

二人して眼前に立ちはだかる白い階段を見上げた。

車イスの彼女を上まで連れて行くのを手伝ってくれるような人間は辺りにはおらず、廊下はガランとしていた。人っ子一人いない。

「あー……どうしよう？」

遙が困ったような顔をして和隆を見上げた。

やはりこの学校にはエレベーターが必要だと思った。

「んー……」

和隆は階段を見上げてしばし逡巡した後、気だるげに腰に手を当てて言った。

「四階まで春川をおんぶして上がって、一階まで戻って、また車イスを持って四階へ……っていうのはさすがに面倒だな」

「うー、ごめん……」

遙は恐縮しながら頭を下げた。

「なんなら赤坂くんだけ教室に行ってくれても構へんよ」

「お前はどうするんだよ？」

「私は……どつかその辺ブラブラしとくわ」

大分親しい間柄になったとはいえ、相変わらず彼女は人に物を頼むのが苦手というか、遠慮があるようだった。

和隆は言った。

「四階まで階段を上がっていくのは面倒だ。つーことで、もう午後の授業はサボっちまおうぜ」

「えっ？」

遙は驚いたように目を見開き、和隆の顔を見詰めた。

「学校を抜け出してどつか遊びに行こう」

「遊びにつて……え？ 私も一緒に？」

「うん」

「どっかって……どこへ？」

「どこへでも」

和隆はチェシヤ猫のように、にやりと大仰に笑ってみせた。

「引っ越してきてからしばらく経ったとはいえ、まだこの町に慣れてないんじゃないか？ どこに何があるとか知らないだろ？」

「まあ、あんまり詳しくはないけど……」

「よーし、俺がこの町を案内してやるよ」

でも、だけど……と躊躇っている彼女の後ろに回り込み、和隆は半ば強引に車イスを押して遙を玄関の方へと連れ出した。

「こんなことしててええんかな？」

「いいんだよ」

「校則を破ることになるし……」

「校則は破るためにあるんだよ」

「受験生なのに、授業をサボったりして……」

「学校では学べないことだってあるさ」

和隆は訳知り顔をして気安い口調で答えた。「今のなかなか深いセリフじゃね？」などと、上機嫌に車イスを押していく。

下駄箱に行き、彼女の靴を履き替えさせた。

遙はまだ不安げな表情を浮かべていた。

「今からでも、赤坂くんだけでも教室に戻った方がいいんじゃない？ 見つかったら怒られるよ」

真面目な委員長のようなことを言う。

「もう遅い。脱走が見つかった時は、お前も共犯だからな」

「ええっ!？」

彼女は面食らったように声を荒げ、次いで、朗らかな口調で答えた。

「じゃあその時は、私は『赤坂くんに誘拐されました。私は無実です』って言うわ」

開き直ったようにくすりと笑う。

「なんだよ、自分だけ助かるつもりかよ。ひどい奴だ」

彼女は楽しげに笑っていた。和隆も笑って言い返す。

教師たちに見咎められないように二人はこっそりと学校を抜け出し、町に出た。

— 4 —

みんなは教室で勉強をしているというのに、二人だけ学校を抜け出して授業をサボるというのは何だか少しスリリングでワクワクした。

いつもの通学路を外れて適当に歩き出す。

川沿いの道に出た。

和隆はゆつくりと車イスを押して土手の上を歩いた。グリップにくくりつけ直されたスヌーピーの人形が、風に揺られてプラプラと揺れている。ひどくのどかだった。

「こっちの方は始めて来るなあ。いつも同じ道しか通らないから」
遥は車イスにゆつたりと腰掛け、なすがままに車イスに揺られていた。風景を楽しむように遠くを眺める。

通行人とすれ違ったびに、物珍しげにじろじろと見詰められた。
こんな時間に高校生がこんな所で何やってんだ、ということもあるのだろうが……やはり、あまり気持ちのいいものではなかった。
遥と目が合うと、相手は気後れしたように慌ててずっと視線を逸らしていた。

和隆はいちいち「車イスの女子高生がそんなに珍しいかよ」と突っかかりたくなつたが、遥は慣れているのか、素知らぬ振りをしてそれらの視線をやり過ごしていた。遠くの景色を眺めている。

「いい天気やなあ」

遥はうーんと大きく伸びをし、手でひさしを作って空を見上げた。
心地よい風が頬を撫でる。

「こんな風に学校をサボるのは、初めてかもしれない」

「そうなのか？」

「うん。何だか少し、ドキドキするね」

背もたれに頭を預けて、後ろにいる和隆のことを逆様に見上げてきた。にこっとイタズラっ子のように微笑する。

その笑顔に、なんだか和隆の方までドキドキした。

二人は工事現場の側を通りかかった。

マンションの解体工事をしているのか、ショベルカーやダンプカ

「などが忙しく土煙を上げて働いているのが土手の上から見える。」
「あつ」

工事現場の中を見下ろし、遙が声を上げた。

「どうした？」

「男の人に混じって、女の人が働いてた。重そうな袋を軽々と担いでた」

立ち止まって和隆も工事現場の中を見回してみたが、遙の言う女性は見当たらなかった。どこかの物陰に隠れてしまったのかもしれない。

「その女の人がどうかしたのか？」

「いやあ、背が高くて筋肉もムキムキしてて、よく日に焼けていて……。すごく格好良かったなあ、と思って」

ちよつと想像してみた。

背が高くて、筋肉がムキムキで、褐色の肌の大女……。

「なんだそれは、アマゾネスか」

ジャングルに生息していると言われる幻の女蛮族の姿が浮かんできた。

「そういうんとは違うよ。なんかこう、いかにも強そうで大らかそうで…… ああいうのに憧れる」

「え？」

「私も体鍛えてみようかな？」

和隆は遙のことを見下ろした。

目の前の少女は体も小さく色も白く、いかにもひ弱な感じのする女の子だった。障害にもめげずに一生懸命頑張っている姿も、逆に庇護欲をかき立てられるというか、放ってはおけないという気持ちにさせられる。

そんな遙が体を鍛え、褐色の肌のムキムキ女になった姿を想像してみた。

車イスに乗ったアマゾネス。

ボディービルダーのように、ムキツとポーズを決めている。

「……春川は今のままで十分だと思うよ」

そつと進言しておいた。

ちよつとした化け物じゃねえか。

「でもあの体は羨ましかったなあー」

「そんなに格好いい女性だったんだ？」

「うん」

彼女は興奮気味に頷いていた。

そして自分の平べったい胸元を見下ろし、ため息交じりに、独り言のようにぼそりと何かを呟いた。

「それに胸もすごく大きかった。私なんてぺったんこやし、すごく羨まし……」

「何か言った？」

「や、何でもないです！」

彼女は慌てたようにブンブンと首を振った。

「目の見えない人は聴覚が異様に発達する、って話あるやん？」

話を切り替え、遥が唐突にそんな話題を振ってきた。

「ああ、あるな」

人は五感の一つを失ったとしても、それを補うために別の器官が特出して進化することがあるらしい。

どんな小さな音でも聞き分けられるようになったり、人の声の調子から嘘を見抜けるようになったり。世の中には、チツチツと舌打ちをすることで、その反響音からどこに何があるかを立体的に把握することが出来る盲目の人間もいると聞いた事がある。まるでイル

カや蝙蝠のように、エコーケーションを用いて世界を視る。

遥は自分の腕をペタペタと触りながら言った。

「それみたいに、足が悪い人も、なんか能力がつかないかな？ 主に腕関係で」

「能力？」

和隆は首を傾げて尋ね返した。

「例えばどんな能力が欲しいよ？」

「動かなくても遠くの物が取れるように、こう……腕が伸びたり？」

「どこのダルシムだよ」

そんな人間がいたらホラーである。

二人は橋を渡って商店街に向かった。入り口の部分に大きな鳥居が立っている。

「ここは来たことある？」

「ううん、初めて」

和隆は車イスを押して鳥居をくぐった。遥は物珍しそうに辺りをキョロキョロ見回している。

遥がぼつりと感想を漏らした。

「……なんだか、寂しい感じがするね」

折からの不況や大型デパートの進出などの影響で、世のご多分に漏れずこの町の商店街も店じまいをしてシャッターを下ろしている店が多かった。昔はもつと賑やかだったらしいが、今では見る影もない。

大判焼きを売っているお店を発見した。中に餡が詰まっている、円盤状のタイ焼きのような和菓子である。

「あれ食おうぜ」

おやつ代わりに二人で買い食い。

制服姿の二人を見て店のおばちゃんに「学校はどうしたの？」と尋ねられたが、「午前授業だったんだよ」とナチュラルに嘘をついておいた。最近、自分の嘔吐スキルがぐんぐん向上しているような気がする。

道の端っこに移動し、二人して大判焼きをパクついた。

遥はリスのように両手で大判焼きを持ち、うまうまと美味しそうにそれを頬張っていた。

「うまいな、この大判焼き」

「おいしいね、この回転焼き」

二人同時に感想を言い、和隆と遥は「えっ？」という顔をしてお互いの顔を見やった。

「なんだ、回転焼きって？」

「ああ、こつちでは大判焼きって言うんだ？ 関西だと回転焼きとか、太鼓焼きとか呼んでたから」

「へえ。地域によって名前が違うのか」

またしてもカルチャーショックだった。こういう些細な所で、自分たちの育った土地や風土の違いを実感する。

中学の頃から長期休暇のたびに日本中をフラフラと旅して彷徨ったりしたが、そういう所にはあまり注意していなかったな。今度から気を付けてみようか。

和隆は遥に質問してみた。

「関西人の家には一家に一台たこ焼き機があるって聞いたことがあるんだけど、あれってマジ？」

「うーん、どうだろ？ 家にはあったよ」

「大阪のおばちゃんは、みんなヒョウとかチーターの絵柄が入った服を着てるんだって？」

「確かに、大阪の商店街でのエンカウント率は高いかも」

遙は故郷を懐かしむようにくすりと笑った。

「道端で一人がボケると、通行人全員で『なんでやねん』ってツツコミを入れてくるんだろ？」

「いや、さすがにそれは……てゆーか、どんな町を想像してるんよ？」

軽く怒られた。

遙は所々歯抜けのようにシャッターの下りにいる寂れた商店街を見回し、語りだした。

「私は関西で育ってんだけど、私の両親は、元々こっちの人やってん。両親とも、実はこの町で生まれてんて」

「そうなの？」

「お母さんは、今の私たちの学校に通ってたらしいねん」

「あの高校のOGなんだ？」

色んなところをタライ回しにされたあげく、遙は母親の母校に転入してきたらしい。何だか不思議な縁である。

「で、そこでお父さんと出会って恋をしたって……」

「ん……？　ちょっと待て。お前の所の両親は、高校の時から付き合ってたのか？」

「らしいよ」

「そしてそのままゴールイン？」

「うん」

彼女はこくと頷いた。

「はあ……なんかすげーな」

和隆は感嘆の声を上げた。

学生時代の恋愛は長くは続かないものだ、などと言われているが、世の中にはそんなカップルもいるのか。

遥は自分が生まれるよりもずっと昔のことを追想するように、両親の学生時代のことを夢想するように、そっと瞳を閉じた。

「お母さんたちも、学生の頃はこうやってこの商店街を歩いたりしたのかな？」

そこは今のよう寂れたシャッター商店街ではなく、もっと活気があっただろう。

「こうやって買い食いをしたり、手を繋いで歩いたり……」

「かもな」

「若い頃は、見てるこっちが照れるくらいラブラブだったらしいよ」
彼女はそれを誇るように、楽しげな口調で両親のことを話した。

和隆は遥のことを見下ろした。

その顔は夢見るようでもあり、そして、何かを諦めたようでもあった。ひとしきり語った後で、ハアと小さくため息をつく。

彼女は車イス生活者だ。

もしもこの先、彼女に恋人が出来たとしても、普通の恋人同士のように「手を繋いで並んで歩く」ということは出来ないだろう。他にも色々、普通の恋人同士と違って障害は多いはずだ。憂いは絶えない。

「……次行くか」

遥が気落ちしてしまう前に、和隆は大判焼きを口の中に放りこんで立ち上がった。車イスの後ろに回ってグリップを掴む。

彼女を押して歩き出した。

例え手を繋いで並んで歩くことは出来なくても、恋人はこうやって、彼女の車イスを押して一緒に歩くことは出来るのだ。遥の未来の恋人には、ぜひとも全力で彼女のことを支え、愛してあげてほしいものだ……などと思った。

「あー……」

そこまで考え、和隆はふと思った。

車イスの少女と、その後ろを押して歩いている自分。ハタ目にはどう映っているのだろうか？

身体障害者と介助者？

ただの学校の同級生？

それとも、恋人同士？

思えば一緒に登校したり、一緒にお昼ごはんを食べたり、一緒に学校を抜け出して町を散策したり……。

自分では意識していなかったが、これではまるで、付き合いたてのカップルのようではないか。

和隆はその場で石になったように固まってしまった。意識してしまった瞬間、心がカツと熱くなる。

「どうしたん？」

突然変な声を出して立ち止まってしまった和隆のことを、遥は無邪気な顔をして見上げてきた。綺麗な二重の瞳で上目遣いにこちらを見詰め、子猫のように小首を傾げる。

「な、なんでもねーよ。前を見る、前を」

和隆は遥の頭に手を当て、ぐりんと前方を見させた。

「なによ、どうかしたん？」

「なんでもねーよ」

「いや、なんでもないって事ないでしょ？」

しつこく問いただされたので、和隆は後ろから遥の髪をかき回した。

「なーんーでーもーねーよー！」

子犬でもを愛できるように、その頭をわしやわしやと撫でて引つかき回す。

「ちよ、ちよっと……！ 何なんよー！ もぉ！」

遙はくすぐったそうに首をすくめ、車イスの上で身をよじった。それこそ恋人同士のように、二人は道端でじゃれ合っていた。

3 - 4 ・ドライブ

— 5 —

車イスを推し進めていると、遙が前方に何かを見付けて声を上げた。

「あつ」

彼女の視線の先にはゲームセンターがあつた。看板にはきらびやかなネオンが灯っている。

和隆は遙の顔を覗きこみながら尋ねた。

「どうした？ ゲームセンに入ってみたいのか？」

彼女は遠慮がちに頷いた。

「う、うん、ちょっとだけ……」

和隆は意外そうな顔をして言った。

「学校をサボってゲーセンで遊びたいとは、お主も悪よのぉ」

「だ、だって今まで機会がなくて、一度も入ったことがないねんもん」

「一度も？」

それもまた珍しい。

和隆は車イスを方向転換させてゲームセンターに入った。

途端にピコピコと騒がしい音が耳を打つ。

「おお、これがゲームセンターかぁ」

遙はキョロキョロと物珍しげに並んでいるゲームの機械たちを眺めた。自分で車イスを転がして見て回る。

時間が時間だけに、遊んでいるお客さんの数は少なかった。暇そうな大学生風の若者がちらほらとおり、カウンターの中で店員が眠たそうに欠伸をしている。

試しに遙でも出来そうなシューティングゲームや音ゲーと一緒にプレイしてみたが、TVゲーム自体あまりやったことがないのか、彼女はすぐにゲームオーバーになっていた。

「あやや、終わってもた」

それでも彼女は楽しそうだった。

和隆はクレーンゲームの中にスヌーピーのぬいぐるみが入っているのを発見し、ちよいちよいと遙を手招きした。

「どれか欲しいのある？ 記念に取ってやるよ」

「こついつの得意なん？」

「まあ任せんさいって」

遙は背伸びをするように車イスから身を乗り出し、クレーンゲームの中を覗きこんだ。

ケースの中にはスヌーピー以外の、『ピーナッツ』に登場する人間のキャラクターのぬいぐるみも並んでいた。『ピーナッツ』に詳しくない和隆には、主人公のチャーリー・ブラウンくらいしか名前が分からなかったけれど。

ふと、和隆は訝しげに眉をひそめた。

「おい、スヌーピーたちの中に全然関係ないキャラのぬいぐるみが混じってるぞ」

「ん、どれ？」

「ほら、あそこ。サザエさんの花沢さんがいるぞ？」

そこには赤い洋服に身を包んだ花沢さんのぬいぐるみが転がっていた。

カツオの嫁の、押しの強い女の子。素知らぬ顔をしてスヌーピーたちの中に混じっている。

そう指摘すると、遙は呆れたような表情をして言った。

「……あれは花沢さんと違うよ。ルーシーっていう、れっきとしたピーナッツの一員です」

「え、そうなの？」

和隆は首をひねりながら、ルーシーという女の子のぬいぐるみを見詰めた。

「でも花沢さんにしか見えないよな？」

「いや、確かにぬいぐるみの出来がイマイチで少し花沢さんの顔になってるかもしれないけど、似てるかもしれないけど、それはないわ。それはないわ」

二度ツツコまれた。

気を取り直し、和隆は「で、どのぬいぐるみが欲しい？」と遙に尋ねた。

どのぬいぐるみも微妙に顔やポーズが違っていて個性があった。

「うーん……」

遙は美術品を見定める鑑定士のような真剣な瞳をして、ケースの中のぬいぐるみたちを見詰めた。

ターゲットを一つに絞り、ビシッと指差す。

「あれ。あれがいい。ウッドストックを抱いてるスヌーピー」

「ウッドストック？」

「あの黄色いひよこみたいなの」

たくさんのぬいぐるみの山の中に、膝の上にひよこのような黄色い鳥を抱いているスヌーピーのぬいぐるみがあった。確かに、この中で一番かわいいかもしれない。

しかし目標のぬいぐるみは、他の人形たちに半ば埋もれるように配置されていた。吊り上げるのはなかなか難易度が高そうである。

「難しいかな？ 無理っぽかったら、他のでもいいけど」

「余の辞書に不可能の文字はない」

和隆は余裕の表情でナポレオンのようなことを言い、機械にお金

を投入した。

が、勢い込んで挑戦したはいいものの、あっさりと三回もミスってしまった。

「あれ、おかしいな……」

ちくしょう、次こそはと思って続けて二回トライしたが、やっぱり駄目だった。

目標のスヌーピーをぬいぐるみの山から発掘してアームで掴むのには成功したものの、クレーンのアームは、すぐにぽとりとスヌーピーを取り落としていた。無人のまま初期の位置に戻って来る。救出されそうになりながら何度も地面に落ちていくスヌーピーの姿は、なんだか『蜘蛛の糸』のカンダタを彷彿とさせた。

和隆はガラスに額をくっつけ、ぶら下がっているクレーンを見詰めた。

うーん、と唸りながら一人ごちる。

「なんかアームが弱い気がするな……」

負け惜しみで言っているのではなく——八割方その気持ちもあるけど——本当にそう感じたのだ。

ゲーム店にとっては、クレーンゲームは勝手にお金が溜まっていく貯金箱のようなものである。一回のゲームが短いから回転も速いし、「次こそは！」と意固地になった客からは数千円も絞り取れる魔法の箱。難易度を上げるためだと称して、アームに細工をしていても不思議はない。

渋い顔をしてクレーンを見詰めていると、遙が言った。

「難しそうなら無理しなくてもええよ。お金もつたいないし」

既に和隆は千円のお金を無駄にしていた。高校生がアルバイトした時の、時給一時間強のお金を物の数分でドブに捨てたようなもの

である。地味に財布が痛かった。

しかし、ここまでくるとプライドのためにも後には引けない。

「まあ待て。男に二言はない」

何としても、あのウッドストック付きスヌーピーをこのガラスの箱から救出してやるのだ。

和隆は気合を入れて、百円玉を機械に投入した。

そして七回目のチャレンジで、ようやく目標のスヌーピーをゲットすることに成功した。

アームがガツチリと重心を捕らえてぬいぐるみを持ち上げ、受け取り口の穴にぽとりと落とす。

「やったっ！」

横で見ていた遙が手を叩いて歓声を上げた。

遙は身を屈めて、受け取り口からスヌーピーのぬいぐるみを取り出した。

「うわ、なにこの子？ 体がすっごいもふもふしてて、すっごくかわいい！」

彼女は嬉しそうにぬいぐるみをぎゅーっと抱きしめた。

ぬいぐるみは彼女の頭よりも大きかった。抱きしめるにはちょうどいいサイズである。

「赤坂くんも抱っこしてみいな。すっごいもふもふ！」

彼女は新しいおもちゃを買ってもらった子供のように、嬉しそうにはしゃいでいた。

ウッドストックを抱っこしているスヌーピーを抱っこしている車イスの女の子。

なかなか絵になる光景だった。

「これ本当にもらつていいの？」

「ああ、プレゼントするよ」

「嬉しい、ありがとう！」

彼女の笑顔を見て、和隆も幸せそうに表情をほころばせた。
「どういたしまして」

— 6 —

遙はぬいぐるみがとても気に入ったのか、自分の膝の上に置いてじーっとスヌーピーのことを見詰めていた。ポンポンと頭を叩いては、感触を確かめるようにぎゅーっと抱きしめている。見ていてすごく可愛らしかった。

この大きさ、このもふもふ加減で千四百円なら上々か。クレーンゲームを途中で諦めなくて本当に良かったと心から思った。

ゲーセンの中、彼女の車イスを押して移動していると、レースゲームのシートから下りた人とぶつかりそうになった。

「あ、悪い」

その人は手短かに謝って去っていった。

何気なくそのゲーム機を見る。

それはスピードを競うレース系のゲームではなく、自動車の運転シミュレータだった。『電車でGO』や『パイロットになろう』みたいに、普通車やトラックの運転を体験出来るゲームである。実際の交通法規も学べる教習ゲーム。

「こんなのまであるねんな？」

遙は物珍しげにシミュレーションゲームを見詰めた。正面にあるモニターには、3Dモデリングされた市街地の風景が流れている。

ゲーム機を見下ろしながら、何気なく和隆は呟いた。

「ああ、免許欲しいなあー……」

今はまだロードバイクにしか乗れないけれど、車があればどこにでも行ける。どこへだって行ける。高校を卒業したら真っ先に取り

に行くつもりだった。

その言葉に、遙もうんうんと頷いた。

「いいよねー。私も欲しいな、車の免許」

和隆は車イスの少女を見下ろしながら、遠慮がちに尋ねかけた。

「……その体で免許って取れるの？」

アクセルとかブレーキとか踏めないじゃん、と首を傾げる。

「手動運転装置っていうのがあるらしいんよ。アクセルもブレーキも、全部手で車を操縦出来るようになるやつ」

「ああ……。そういえば、昔何かで見たことあるな」

ドキュメンタリー番組か何かで、下半身のない人が普通に車を運転している姿を見たことがある。自分は特殊な体をしていると自覚している分、その人の運転は一般的なドライバーよりも慎重で安全意识が高く、ドライビングテクも巧みだった。

遙はじーつと自動車のシュミレーションゲームを見詰めていた。

和隆は遙の顔を覗きこみながら尋ねた。

「やってみたい？」

「でもこれ、足でアクセルとかを踏む、普通の車のやつやろ？ 私にはちよつと……」

和隆は腕を組んで「うーん……」としばし思索し、ピコーンと名案を閃いた。

「よーし、それじゃあ、二人で運転しようぜ」

「えっ？」

遙は不思議そうに首を傾げた。

「二人でって……どうやって？」

「俺にいい考えがある」

和隆は得意げに言い、にやりと不敵に微笑んだ。

彼女の車イスをゲーム機の横につける。

「俺がアクセルとブレーキを担当するから、春川はハンドル操作担当な」

「うん……？」

和隆は足を広げてゲーム機のシートに深く腰掛け、アクセルペダルに足をかけた。そして自分の膝の間に遙を座らせ、ハンドルを握らせる。

これぞ、秘技・二人羽織り走行！

「ええと……この体勢はどうなの？」

遙は顔を赤らめて、体をもじもじそわそわさせながら呟いた。ハンドルに覆いかぶさるように前屈みになって、ちょこんと和隆の膝の間に座っている。

「自分で誘つといてなんだけど……うん、俺もそう思う」

和隆も赤くなって体を硬直させていた。ロボットのよう動作がぎこちなくなる。

一つのシートに二人で座っているこの体勢。この状況。

ほとんど膝の上に抱っこの状態だった。

後ろからギュッの状態だった。

なんと密着感。

ちよつと身動きを取ることが出来なかった。手の置き場所に困り、視線が泳ぐ。

「ええと……ま、まあ、座っちゃったんだし、とりあえずやってみようぜ」

和隆はそそくさとコインを投入した。

ゲームには、実際の自動車教習所のように色々なドライビング操作をテストする教習モードと、町中を自由に走れるチャレンジモードがあるらしかった。

「これどうやって選択するん？」

「たぶんハンドルを切り替えたら選択できると思うよ」

和隆は遥の脇から手を伸ばしてハンドルに手を添えた。まるで後ろから彼女のことを抱きしめているみたいだった。

とりあえずチャレンジモードを選択させる。

なかなかゲームがスタートしないなと思っていたら、機械の人に「シートベルトをしてください」と注意された。さすが本物の自動車学校と提携して作ってるだけあって芸が細かい。

「シートベルトってどこだ？」

「あ、それじゃない？」

仕方なく二人は、二人の体ごと袈裟がけにシートベルトを締めて体を固定した。

二人の体がさらに密着した。

否応なく、ぴたりと肌がくっつく。

「……………」

二人は赤面しつつ黙り込んだ。

なんという密着感。気まずいってレベルじゃねーぞ。

彼女の体温、そのぬくもりが触れた肌を通して伝わってきた。ぽかぽかと温かい。

ドキドキと高鳴っている自分の心臓の音が相手に伝わってしまうのではないかと心配になり、余計にドキドキと和隆の脈拍は早くなっていた。

遥の後頭部がすぐ目の前にあった。

シャンプーのいい香りがした。サラサラとした彼女の髪が、和隆の鼻先をくすぐる。

和隆は無意味に背筋をピンと伸ばしてシートに座っていた。ごほんごほんとわざとしい咳払いをする。

ゲーム機のシートに二人乗りして座っている和隆らを見て、「なんだこいつら？」という顔をした大学生が後ろを通り過ぎていった。

緊張した面持ちで遙が尋ねてきた。

「……で、次はどうすればいいのかな？」

頬をほんのり朱色に染めつつ、気まずさを埋めるようにやたら力チャカチャとワイパーやらウインカーやらを弄っている。

正面のモニターには、市街地の風景が表示されていた。道路を3Dの車が走っている。

「道に丸いマーカーが出てくるから、それを拾いながら矢印に従って進んでいけばOKだ。じゃあ、スタートするぞ」

和隆は足を伸ばし、ゆっくりとアクセルペダルを踏み込んだ。

それに伴い、モニターに表示されていた風景が前に進み始める。

「おお、結構良く出来てるねー」

遙は感心したように言い、ハンドルを回した。

正面のモニターは三つに分かれており、視界も広がった。ルームミラーやサイドミラーにもちゃんと流れていく風景が描画されている。

「次、右に曲がるよー」

その言葉に応じて、アクセル係りの和隆がブレーキをかけたたりスピードを緩めたりした。ハンドルを切りながら、遙の体は曲がる方向に若干体が傾いていた。

「スピード出しすぎ、少し緩めて。次、前方赤信号だよ。ブレーキかけて」

遙は教習所の教官のように、アクセル係りの和隆に注文をつけてきた。

ゲーム相手にしっかりきっかり交通ルールを守ろうとしていた。真剣な顔をして、じーっとモニターを見詰めている。

和隆はぼやいた。

「うーん……前がよく見えないんだよなー」

彼女の頭が視界を遮っていて、モニターが良く見えなかった。

急に子供が飛び出してきたので慌ててブレーキをかけると、減点を食らった。

やはり難しいな、二人羽織り走行。

「うーん、これで見える？」

遙はぞもぞと体を動かし、ずりずりとお尻をずらして頭を下げた。彼女は半ば、和隆の胸の上に寝っ転がるように頭を預けてきた。

無防備に和隆に体を委ねる。

「いや、まあ……よく見えるけど……」

何だか人間椅子になった気分だった。しかし、不思議と居心地は悪くない。

ちらりと視線を落とすと、制服の隙間から、彼女の胸元が覗けてしまった。

「……あ」

白い素肌がちらりと視界に飛び込んでくる。

余計な物までよく見えるようになってしまい、和隆は慌てて視線を正した。思わず車のエンジンをブォンとふかす。

遙が首をひねって和隆のことを見上げてきた。

「なに、どうかしたの？」

「い、いや、にやんでもない」
軽くセリフを囁んだ。

傍から見たら、二人はさぞやおかしな風に見えただろう。

これは安全運転の意識向上や、優良ドライバーの育成を目的としたシュミレーションゲームである。

なので仕方がないといえば仕方がないのだが、スピード系のレースゲームに慣れた和隆には、運転シュミレータのスピードは少し生温かった。速度がゆるすぎる。

「もつとスピード出していこうぜ」

「あかんよ。この道の制限速度は四十キロやねんから」

遙はそう言つて和隆をいさめたが、彼女の背後で、和隆はイタズラっ子のようににやりと笑った。彼女に無断で、いきなりアクセルペダルをぐいつと踏み込む。

いきなりの加速。

そのまま車はコーナーに突っ込んだ。

「はい、そこでドリフト！」

「ええっ！？ ちよっ……わ、わ、わっ！？」

遙は慌ててハンドルを切った。

日本の住宅街を、ハリウッドのカーアクションばりの無謀さで爆走する。

「ちよつと早いつて、早いつて！」

遙は必死にハンドルをさばいていた。

自分の膝の間であたふたと慌てふためいている少女を見下ろし、和隆はのん気にけらけらと笑った。

和隆らの車は物凄い勢いで減点を食らっていき、最終的に、車道

の真ん中でゲームオーバーになってしまった。

車が停止した後、遙がくりとこちらを振り向いた。

「まあ、あんなにスピードを出して！　これが本物の車やったら、大事故になってたかもしれないんやからね！？」

彼女はプリプリと怒っていた。

「事故は本当に恐ろしいものですよ！」

なぜか標準語＋敬語でお説教された。

そういえば彼女は自動車事故で足を失ったんだっただかと思い直し、和隆も笑いを引っ込めた。

「そうだな、すまんかった。次は真面目にやるわ」

「次は安全なスピードでお願いしますよ」

「分かりました。善処します」

心を入れ替え、再びお金を投入する。

「次は事故らんようにせんと……」

遙はがっしりとハンドルを握り、真剣な瞳で画面を見詰めていた。

和隆はゆつくりとアクセルペダルを踏みこんだ。

車が発進する。今度はしっかりと法定速度を守って走らせた。

彼女はとても慎重で安全に車を操った。

注意一秒、怪我一生。安全第一で車を走らせる。

世間の人がみんな彼女のように安全運転を心掛けたら、交通事故も無くなるだろうにな、と思った。

「次、左折するよー」

徐々に二人の息は合っていき、まるで一人の人間が車を運転しているかのような安定した走りになっていった。減点もなく、滑らかにドライブは続いていく。

遙も弾んだ口調で「すごいすごい、いい調子！」と言った。相性

ばつちりである。

「手動運転の車は色々と面倒くさそうやし、実際に免許取る時も赤坂くんにアクセル係りを頼もつかない？ そうしたら、一発で免許取れるかも」

和隆は笑いながら答えた。

「そんなことしたら一発で免停になるよ」

調子よくハンドルを握っている遙の頭の上に、和隆は自分の顎をこつんと乗つけた。

画面の中、移り変わっていく偽りの風景を見詰める。

「実際に免許取ったらさ……」

和隆は遙に話しかけた。

「ん？」

「春川が免許が取った時は、隣りに乗せてくれよ。一緒にどこかその辺ドライブしようぜ」

彼女は少し恥ずかしそうに目を伏せて、こくりと小さく頷いた。

「ん……その時は、ナビをよろしく」

二人の運転はハイスコアを記録した。

3 - 4 . ドライブ（後書き）

昔ゲーセンにあった『免許の鉄人』的なあれ。

3・5・二人の足音

171

十分に遊び倒した後、二人はゲームセンターを後にした。

ずっと騒がしい店内にいたので、外の静けさが耳に心地よかった。遥の膝の上には、クレイゲームで取った大きなスヌーピーのぬいぐるみが置かれてあった。買い物帰りらしき親子連れの幼女が、羨ましそうに遥のぬいぐるみを指差している。

「ああ、楽しかった！」

遥は満足したように息を吐き出し、和隆のことを見上げた。

「スヌーピーを取ってくれたり、ゲームに付き合ってくれたり……本当、ありがとうね」

「いいってことよ。俺も楽しかったし」

「このスヌーピーは、うちの家宝にさせてもらっわ」

彼女は幸せそうに、ぎゅーっとふかふかもふもふのぬいぐるみを抱きしめた。

「ずいぶんと安価な家宝だな」

笑いながら答えると、彼女は「だって嬉しかったんもん」と言つて、子供のように無邪気に笑っていた。ほくほくと表情をほころばせる。

「あ、そういえばさ……」

思い出したように遥が言った。

「そういえば、カバンってどうする？」

「ああ、学校に置きっぱだったか」

昼食を食べ終わった後そのまま学校を出てきてしまったので、学

生力バンや教科書の類は全部教室に置きっぱなしになっていた。空になった弁当箱は、下駄箱の所に置いてきた。

一度取りに戻らなければならぬか？ 面倒だな……。

そんな事を考えていると、ふと、和隆の目の端にあるものが映った。

「あつ……」

商店街の右手の方に、スーツを着た男の姿を発見した。

その男性の腕には、「生徒指導」と書かれた腕章が取り付けられてあった。キヨロキヨロと辺りに視線を飛ばしながら、道の向こうからやって来る。

それは見回りの先生だった。学校をサボって遊び歩いている生徒はいないかと、近隣の学校の教師たちが協力して商店街などの見回りしているのだ。たぶん他の高校の教師である。

高校の制服に身を包んだ車イスの少女と男子学生が存在は、嫌でも目立った。

見回りの先生がこちらに気付く。

まさに学校をサボって遊び歩いていた二人組を見つけ、教師はムツと眉をしかめた。遥の膝の上に乗っているスヌーピーの人形を見て、さらに険しい表情を作って、ツカツカと大腿にこちらに歩み寄って来る。

遥が焦り気味に言った。

「ど、どうしよう。見つかったしもた」

和隆はしかめっ面をしながら、近付いてくる教師を見詰めた。捕まると面倒だなあ、説教も長くなりそうだなあ、などと一人ごちる。

「……よし」

和隆は車イスのグリップを掴み、くるりと百八十度回転させた。教師に対してお尻を向ける。

遥の前に回り込み、彼女の前で背中を向けてしゃがんだ。

「乗って」

「え？」

「おんぶだよ、おんぶ」

背中に回した手を動かしてカモンカモンと催促した。

「で、でも……」

「いいから早く」

急かすように言うと、彼女は戸惑いながらも車イスから身を乗り出して、和隆の背中に体を預けるようにおぶさってきた。

和隆は立ち上がり、よいしょと遥の小さな体を背負い直した。

遥は首を傾げながら和隆に尋ねた。

「一体どうするつもりなの？」

そうこうしている間にも、見回りの先生がすぐそこまで迫っている。

和隆はたった一言で簡潔に答えた。

「逃げる」

「ええっ!？」

無人になった車イスは、足で動かしてゲーセンの看板影の邪魔にならない所に押し込んでおいた。

そして道の前方を見据える。遥の太もも辺りをしっかりと抱え、ロックした。

「よし、行くぞ!」

位置について。

よい……どん!

和隆は遙をおんぶしたまま走りだした。

いきなりのフルスロットル。

「ちょ、ちよつと……！」

遙は突然の事に後ろにのけ反りそうになり、慌てて和隆の肩に手をかけた。取り落としそうになったスヌーピーのぬいぐるみを抱え直し、和隆の首に腕を回す。

突然走りだした和隆らを見て、背後の教師も「待ちなさい！」と駆け出した。

和隆は遙をおんぶしたまま猛ダッシュした。

「しっかり掴まってるよ、春川ーっ！」

猪突猛进、風を切って商店街を駆け抜ける。

「わ、わっ……！」

普段は車イスで、ゆっくりとしたペースで歩いている彼女にとっては、こんなスピードで道をひた走るのは久しぶりの事だったのだらう。

遙は和隆の背中の上で、怯えたように体を強張らせていた。きつく目をつぶり、後ろからぎゅっと抱きつかれる。

恐る恐る、遙はうつすらと目を開けた。

風が全身にぶつかり、長い髪をなびかせる。

景色が次々に後ろに吹っ飛んでいった。

振り向くと、教師の姿は遙か後方に遠ざかっていた。

それでも二人のスピードは衰えない。

彼女の重さ、その温もりを背中で感じながら、和隆はさらに加速していった。軽やかな足音を響かせながら、制服姿で町中を疾走する。

遙が興奮気味に頬を上気させて叫んだ。

「これからどこに行くん？」

和隆はチエシヤ猫のようにニッと笑って陽気に答えた。
「どこへでも」

4 - 1 ・放課後

— 1 —

ある日の放課後。

夕焼けに照らされて朱に染まる教室で、和隆と遥は顔を突き合わせていた。

誰もいない教室で二人きり。机を挟んで向かい合う。

「数学の分は終わった？」

「うん。次こつちお願い」

二人は居残り勉強をさせられていた。

学校を抜け出して遊んでいたのがバレたので、大量の宿題・課題を出されたのである。

あの時は遥をおんぶしたまま町を爆走、見事見回りの先生をまくことに成功したのだが、車イスを回収しにゲームセンターの前に戻った時に、待ち伏せをしていた先生に掴まってしまった。

「車イスに乗っている姿は目撃していたんだから、取りに戻ってくるのは分かっていた。……というか、車イスを置いて逃げるとかお前馬鹿だろ？」

先生にツッコまれてしまった。

「ですよー」

あの時は二人の時間に水を差されるのが癪で、とにかく逃れることしか考えていなかった。立つ鳥後を濁す。世の中はままならない。その後二人は長々とお説教を受け、さらに学校の方にも連絡をされてしまった。その罰として出されたのが、この課題の山である。

和隆と遥は、二人きりの教室で片っ端から課題を片付けていった。

グラウンドの方からは、運動部の部員たちの練習の声が聞こえていた。

「うーん、何とかならないかなあ……」

机の向こう側に座った遙が、ノートを見詰めながら何事かを唸っていた。

和隆は教科書から顔を上げて尋ねかけた。

「どこか分らない所でもあったか？」

彼女の方が頭は良いのだし、彼女が分らない問題を自分が解ける気がしなかった。そうならお手上げである。

「いや、そうじゃなくて……ちよつとね」

「どうした？」

「トイレの問題が……」

「トイレ？」

和隆は首を傾げて聞き返した。

「トイレに行きたくなった？」

「いや、今は大丈夫。でもトイレに行きたくなるたびに、人に付き合ってもらうのはどうもね。なんとかならないかなあ、と思って」

皆の前で「遙の面倒は俺が見る」などと勢いよく宣言したものの、さすがに毎度毎度、男の和隆が女子トイレまで付いていくことは出来ない。なのでトイレの介添えだけは他の女生徒や先生たちに任せていた。

和隆はクルクルとペンを回しながら答えた。

「でも、トイレの問題はじきに解決するだろ？」

遙は車イスが入る広いスペースと手すりがあれば——そして便器が洋式ならば——一人でも用を足すことが可能だった。

そこで学校は、遙がよく利用する一階と四階のトイレだけにでも、

車イス用のトイレを設置してくれる事になったのだ。国だか県だかから助成金が出たらしい。

「この勢いでついでにエレベーターも設置してくれよ」と陳情をしたのだが、さすがにそれは難しいらしかった。

まあ、なにはともあれ、遥の快適な学生生活に向けて一歩前進である。

「でもトイレの工事が完了するまで、まだしばらくかかりそうやる？ その間、他の子たちに迷惑をかけちゃうし……」

遥はそう言って、居心地悪げに顔を伏せた。

和隆はじつと遥の顔を見詰めた。

また何か、一人で色々を抱え込んで悩んでいるな。

彼女は放っておくと、周囲に迷惑をかけないようにと自分を殺してばかりいる気がする。「自分で出来ることは自分でやるようにしてるから……」などとうそぶいて。

今回の補習だって、遥は「私が無理矢理赤坂くんを誘って付き合させた」と言って、一人で罪をかぶろうとしていた。

和隆も「いや、俺が無理矢理春川を誘って連れ出した」と言って、彼女を庇おうとした。

「いや、私が」

「いや、俺が」

互いに互いの事を庇いあい、で、結局二人仲良く補習である。

和隆はため息をつきながら答えた。

「こればかりは仕方ないだろ？ どうしようもない生理現象だ」

「でも……」

「だからって、トイレに行く回数を減らすために水を飲まないだとか、ギリギリまで我慢するとか止めるよな？ 体に悪いから」

シャーペンを突き付けてそう忠告したが、それでも彼女は「うん……」と唸って思案顔を作っていた。

「あっ！」

何か閃いたらしい。遙の頭上でピコーンと豆電球が灯った。

「どうした？ 何かいい考えでも思いついたか？」

「それやったらさ、私がオムツ履けばいいんじゃないん？」

「……え？」

ちよつと予想外の発想だった。

「トイレに行けないのなら、オムツを履けばいいじゃない」

彼女は世紀の大発見をしたような、自信満々の表情をしていた。

我ながらナイスアイデアという顔である。

和隆は半ば呆れ顔をして車イスの少女を見詰めた。

「お前ってさ……頭いい割にバカだよな？」

「あれ、なんで？」

彼女は心底不思議そうな顔をしていた。

「だって実用的じゃない？ オムツを履いていれば、他の人の手を煩わせなくてもすむし」

「いや、まあ……それはそうかもしれないけど……」

和隆はポリポリと頭をかいた。

そんなことを同級生の男子学生の前で口に出すなよ、と言いたい。思わず変なことを想像してしまうのではないか。

「確か大人用のオムツってあったよね？」

「まあ、ドラッグストアとかで売ってるよな。介護用とか」

しかし、だからといってオムツを履いて学校に登校する女子高生もなかなかいないだろう。

「え、本気で言ってるの？」

「駄目かな？ いいアイデアだと思ったんやけど」

彼女はひどく真面目な顔をしていた。本人はいたって大マジのようである。

「うーん……」

和隆は顎に手を当てて思考を巡らせた。

初めて聞いた時は「年頃の娘さんがオムツってどうよ？」とも思っただが、よくよく考えてみれば、確かに実用的な案かもしれない。宇宙飛行士はみんなオムツを着用しているというし。羞恥心さえ気にしなければ、これほど便利なものもないだろう。

ただし、一つ問題点があった。

和隆は拳手をして質問した。

「……一つ質問していい？」

「なに？」

「オムツを着用するのはいいとして……一体誰がそれを履かせて、誰が交換するんだよ？」

「あー……」

彼女はぼかんと口を開けて宙を仰いだ。考えていなかったらしい。

「やっぱり一人じゃ出来へんのかな？」

「さあ……？」

和隆も首を傾げた。そこまでオムツに詳しくはない。

「自分で交換出来たとしても、場所が問題だよ。そこの空き教室でこっそり履き替える、って訳にもいかないだろうし」

「ああ、そっか。その問題もあるね」

遙は腕を組んで、どうすればその問題をクリア出来るだろうかと真剣に考え始めた。

和隆は机に肘をつき、ニヤニヤと笑いながら提案した。

「なんなら、俺が履き替えるの手伝ってやろうか？」

オムツを履いていれば、例え授業中でもそのままおしっこをすることが出来る。

ちよつと脳内シミュレーションをしてみよう。

授業中、遥は突然尿意に襲われてしまった。

スカートの上からおまたを押さえ、車イスの上で体をもじもじとさせる。時計を見ると、授業の終わりまではまだ大分時間があつた。しかし、自分はオムツを履いているので大丈夫。まったく問題ないのである。

クラスメートたちは真面目に授業を聞いていて、黒板の方を見詰めていた。誰も遥に注目していない。

遥は周囲の視線を気にしつつ、そつと股の筋肉を緩めた。

誰も気付いていないとはいえ、授業中の教室で、みんなの前でおしっこをするというのはかなり勇気のいる事だった。

「んっ……」

遥は顔を真っ赤にして、思わず声が漏れそうになりながらも、オムツの中におしっこを漏らした。

ぎゅつとスカートの裾を握る。プルプルと体が震えている。

「んはぁ……」

全てを出しきった後、遥は頬を上気させてくたつと机の上に突っ伏した。

その後、休み時間に和隆が遥を保健室などに連れていき、彼女をベッドに寝かせて新しいオムツに履き替えさせてあげるのだ。

長いスカートをたくし上げて下半身を露出させ、履いているオムツを露わにさせる。

「は、恥ずかしいよ、赤坂くん……」

羞恥心で真っ赤になっている少女。

そんな彼女をよそに、お構いなしにビリビリとオムツのマジックテープを剥がしていく自分。

もちろんオムツを脱がせた後は、股周りがかゆくなってしまわないようにと親切丁寧に、しっかりと丹念に拭いてキレイキレイにしてあげるのだ。

——集団監視の中での、オムツを履いてのお漏らしプレイ。

及び、その交換による羞恥プレイ。

なんとというアブノーマル白書。

思わずテンションが上がってきた。

「よし、とりあえず紙オムツにするか布オムツにするか、真剣にデイベートといこうぜ」

あるいはパンツタイプでも可。

真面目な顔をして提言すると、彼女は夕日のように顔を真っ赤にして、動揺しつつ叫んだ。

「あ、あ、赤坂くんのアホー！」

消しゴムを投げつけてきた。

「なんだよ、オムツがどうのこうの言い出したのはそっちじゃないか」

「だからってそれはないわ！ だからってそれはないわ！」

二度ツッコまれた。

遙は頬を真っ赤に染めて、うーっと唸りながらこちらを睨みつけてきた。

「……赤坂くん。なんか今、変なこと想像してたやろ？」

「何を失敬な。足の不自由な女の子のために、俺には一体何が出るんだろ」と真剣に考えていたところですよ」

紳士面をして平然と答えておいた。

遥は訝しげ、胡散臭げな表情をしてさらに追求してきた。

「本当に？ まったく変なことは考えていなかった？」

「本当に。まったく」

「絶対に？ 神様に誓える？」

「誓う誓う」

「だけど少しは、えっちいこと考えてたやろ？」

「……ごめん、少しだけ」

そう答えると、遥は顔から湯気が出そうな程力アと赤くなり、怒ったようにぷいっとそっぽを向いてしまった。

「もお！ 私は真面目に悩んでるんやからね！」

あっかんべーと舌を出す。

何やら子供っぽくて可愛らしかった。

「じゃああれだ、尿瓶を使ったらどうだ？」

「それを使えばトイレに行かなくてもすむけど、どこでおしっこをしろっていうんよ？」

「膝掛けの下でこっそりやればバレないんじゃないか？」

「いや、普通バレるでしょ」

彼女は呆れ顔をして言った。「真面目に考えてる？」とふくれっ面をしながら睨みつけられる。

「そもそも尿瓶を使っても、結局誰かに瓶の処分を頼まなきゃいけなくなるし……私嫌やで？ 出したばかりの、自分の瓶詰めのおしっこを誰かに手渡すなんて」

「まあ、それもそうか」

色や量を見られたり。

触るとほんのり温かかったり？

「想像しただけで、恥ずかしくって死にたくなるわ」

「それでも生きる」

他に尿道力テールをぶっ刺すというアイデアを提供したが、「怖そうだから嫌だ」と却下された。

和隆は結論を下した。

「やっぱりもうしばらくは、トイレの件はクラスの女子たちに頼むしかないな」

「それしかないか……」

遙はがくりと肩を落とし、深いため息をついていた。

和隆は重くなり過ぎないように注意しながら、あえて気軽に口調で言った。

「お前は人に遠慮し過ぎなんだよ。一人で何とかしようとしすぎ。もっと頼れ」

二人の距離は大分近いものになっていた。

こんな事を言ったら相手が気にするんじゃないか、相手を傷付けるんじゃないかと恐れて変に躊躇ったり、遠慮することがなくなっていた。

もちろん何でもかんでも口に出して言うわけではないが、昔から馴染みのある友人と話すように、二人の関係は気さくでざくばらんなものになっていた。

肩肘を張らずに、冗談を言っただけは相手を茶化す。

その果てが、平気な顔をして下ネタトークというのもどうかと思うけど。

4 - 2 ・ お好み焼き屋さん

- 2 -

補習として出された課題をすべて片付けた和隆と遙は、職員室に寄ってから学校を出た。

西の空には大きな夕日が雲の切れ間に覗いており、世界を茜色に染めていた。車イスの少女と、その後ろを押して歩く和隆の影が長く地面に伸びている。

校門を出た所で和隆が言った。

「頭を使つたせいでお腹すいたなー。何か食べたい」

ちらりと腕時計に目を落とす。このまま家に直帰しても、晩ごはんまでまだ少し時間があつた。

「俺は寄り道していくんだけど、よかつたら春川も付き合わないか？ 何か食つて行こうぜ」

「何かつて？」

「んー、お好み焼きとか？」

少し行つた所に、学校帰りの学生たちがよく利用するお好み焼き屋さんがあるのだ。

「でも買い食いも寄り道もあかんよ。校則で禁止されてるし」

彼女は真面目な委員長のようなことを言っていた。

「それに、私たち先生に怒られたばかりやん」

「お前は真面目だなー。この真面目星人め。もつと人生をエンジョイしようぜ」

和隆は甘言を弄して遙を悪の道へと誘いこんだ。

「大丈夫だよ。そこは先生たちの手が届かない治外法権だから」

「治外法権？」

「店主のじいちゃんが怖くて近寄れないんだ」

遥は小首を傾げながら質問してきた。

「怖い人がやつてるお店なの？」

「まあ、ある意味な。だから見咎められても無問題」

「ふーん……？」

「つーわけで食いに行こうぜ」

和隆は車イスのグリップを握り、さつさと押して歩き出した。彼女の家とは違う方向に車イスを進ませる。

車イスの上で、遥が言った。

「あの、私はまだ行くとは言ってないんですけど？」

「いいじゃん。一人で食べてもつまらないよ。お前も付き合え」

半ば強引に彼女を誘う。

「……まあ、しょうがないなあ」

口では「まあ、しょうがないなあ」などと文句を言う割に、彼女は何だか嬉しそうな顔をしていた。今にも鼻歌でも歌い出しそうな感じで、くしゃりと笑う。

「そこのお店って美味しいの？」

「うん、うまいうまい」

二人は『からくさ』という名のお好み焼き屋さんの前にやって来た。レトロな外観をした、こじんまりとした小さなお店である。お店の前には簾が斜めに張られてあり、グリーンカーテンとして植物のツルが巻きついていていた。

和隆は引き戸を開けてのれんをくぐった。

「こんにちはー」

お店の中は制服姿の学生や若者たちで賑わっていた。熱せられた鉄板の熱気と、お好み焼きの焼けるいい匂いが鼻孔をくすぐる。

「いらっさーい」

エプロン姿の、頭の白いおじいちゃんが二人を出迎えた。

車イスの遙をちらりと見下ろし、おじいちゃんは何気ない口調で遙に尋ねた。

「今は座敷の方しか空いてないんだが、大丈夫かね？」

「あ、はい」

遙が頷く。

「そうかね。じゃあそちらにどうぞー」

奥に案内され、和隆は車イスを座敷の所に横付けした。

「自分でいけるか？」

「ん、大丈夫」

遙は座敷に手をつき、よいしょと体を持ち上げて、自力で座敷の方に移った。

座敷の縁に腰かけて靴を脱ぎ、ずりずりと下半身を引きずって、鉄板付きのテーブルの前へと移動する。

側に立って遙のことを見守っていた和隆は、ふと、何者かの視線を感じた。

（なんだ……？）

何気なく店内を見回す。

遙が席に着くまでの間、一瞬、ポリウムを捻ったように店内がずっと静かになり、店中の視線がこちらに集中していたような気がした。

遙は座布団の上にお姉さん座りに座っていた。膝掛けをかけ直し、ブランケットで下半身を覆い隠す。

和隆も靴を脱いで座敷に上がり、テーブルを挟んだ反対側に腰を下ろした。

メニューを広げて尋ねかける。

「何食べたい？」

関西風の物から焼きそばが入った広島風の物まで、メニューは豊富だった。トッピングも自由自在。もんじゃ焼きもメニューに載っている。

「家に夕飯もあるし、そんなに多くはいらないんやけど……」

「じゃあでかいの一つ頼んで二人で分けるか？」

遥は何年も前から使われている古びた手書きのメニュー表を見ながら言った。

「ずいぶんと、値段が安いんやね？」

お好み焼きの値段は、どれも子供のお小遣い程度の価格だった。これで採算が取れるのかよ、と心配になるほど値段が安い。

店の常連である和隆が説明した。

「あのじいちゃんのスタイルなんだよ。学生さんからそんなに金を取れるかって言って、開店以来ほとんど値段を上げてないらしい」
このお店は、高齢のおじいちゃんが一人で経営していた。

学生相手の小さなお店だし、今では儲けなんてほとんどないだろう。むしろ毎月赤字かもしれない。

それなのに、このお店は何十年も前からこの場所で店を開き続けていた。お腹をすかせた学生さんたちのために。同じ味、同じ値段で。

話し合いの結果、二人は豚やらエビやらがふんだんに入ったノーマルタイプのお好み焼きを注文した。

遥は物珍しげに店の中をキョロキョロと見回して観察した。

学生たちの楽しげな声が、狭い店内に響き渡っている。

店は店主のおじいちゃんと同じで、いい感じに古ぼけていた。築数十年のレトロな建物。

店の壁には、ボラロイドカメラで撮られた子供たちの写真が所せましと貼り付けられてあった。店にやって来た子供たち、学生たちが撮影して残っていたものだ。中には何十年も前に撮られただろう古い写真もあった。すっかり日に焼けて、セピア色に変色している。

まるでこの店の歴史を物語るように、あらゆる年代の子供たちの姿が、そこには収められてあった。美味しそうにお好み焼きを頬張っている姿が映っている。

店の奥の方では、小学生くらいの少女が三人、顔を突き合わせて「もういいかな?」「まだじゃないですか?」「お腹すいたー」などと、ああでもないこうでもないという騒ぎながら、お好み焼き作りに悪戦苦闘していた。この店は基本セルフである。

店内はとても和やかで温かく、アットホームな雰囲気包まれていた。

遙が感想を言った。

「いい感じのお店やね。初めて来たのに、なんだか懐かしい感じがする」

「ただ古ぼけてるだけ、って見方もあるけどな」

「学校の近くに、こんな所があったんだ……」

遙は感慨深げに、物思いにふけるような静かな口調で言葉を続けた。

「赤坂くんと知り合っていないければ、私は……こんな所にこんな素敵なお好み焼き屋さんがあるなんて、知りもしなかったんやろうね。ずっと、家と学校を往復するだけの毎日を過ごしてたと思う……」

「よければもつと色々、紹介するよ」

和隆はずっとこの町で暮らしてきた。この町のことは自分の庭のように知っている。

そして彼女にも、この町を好きになってもらいたかった。

「うん……ありがとう」

彼女は少し照れくさそうに笑い、こくりと小さく頷いた。

しばらくして、店主のおじいちゃんがお好み焼きの具材とヘラを持ってやって来た。

頼んでもいないのに、なぜか生卵を二つ、小皿に乗せてテーブルに置かれた。

和隆はおじいちゃんの顔を見上げた。

「あれ？ 卵なんて頼んでないよ？」

「これはじいちゃんからのサービス」

「サービス？」

「お嬢ちゃんは、この店に来るのは初めてだね？ これからもご贔屓にね」

そう言って、おじいちゃんは茶目つ氣たつぷりに、遙に向けてぱちりとウインクをした。愛嬌のあるシワの多い顔に、さらに深いシワが出来る。

おじいちゃんは座敷の縁によつこらせと腰掛けた。

和隆の顔を見詰めながら、何やらニヤニヤといやらしい笑みを浮かべて、親しげに話しかけてくる。

「お前さんが女の子同伴でうちに来るなんて珍しいなあ。いや、初めてのことか？ 明日は雪が降るかもしれんなあ、おい」

「うるさいなあ。ほっとけよ」

和隆はバツが悪くなつて邪険に振る舞った。視線を逸らしてコッ

プの水を飲む。

おじいちゃんは遙の方に向き直り、彼女と話し始めた。

「お嬢ちゃん、お名前は？」

「春川遙です。はじめまして」

遙は礼儀正しくぺこりと頭を下げた。

おじいちゃんは目尻を下げて、うんうんと嬉しそうに頷いていた。
「うんうん、ちゃんと挨拶の出来るいい子だねえ。大和撫子だねえ」
可愛らしい孫娘でも愛できるように、好々爺の表情を作る。

「喋りに方言があるね。関西の人かい？」

「はい。この春こっちに引っ越してきて……」

「こっちの生活にはもう慣れた？」

「ええ、まあ。赤坂くんも、フオローしてくれてるし」

「そうかいそうかい。……で、君は和坊のコレなのかい？」

コレなのかい？　と言いながら、おじいちゃんはピツと右手の『小指』を立てた。

何の前振りもなく、ナチュラルに下世話な話を振ってきた。

「ぶっ……！」

あまりにもストレートな物言いに、和隆は思わず飲んでいた水を吹き出しかけた。

「二人はどこまでいったね？　Aかね、Bかね。それともCかね？」

おじいちゃんは「誰にも秘密にしとくから」という風に、人目を忍ぶように口元に手を当ててこそそと話しかけてきた。

「ほれほれ、じいちゃんにちよろつと話してみ」

遙は突然の質問に仰天し、頬を朱に染めながらブンブンと両手を振った。

「ええっ！？　あ、あの、私たちはそういうんじゃない……！」

和隆も声を荒げて叫んだ。

「どこまでもいったも何も、どこにもいつとらんわ！」
いきなり何を言い出すんだ、このじじいは。

「なんだ、まだやつとらんのか。つまらん」

おじいちゃんは心底つまらない、というような表情をしていた。
ブーブーと唇を尖らせる。

「おい、いきなり何てことを言うんだ、じじい。ついに頭がバグったか」

和隆はじろりと店主の老人をねめつけた。

おじいちゃんはこっちの話を無視して、一人感慨深げにうんうんと頷いていた。

「Aもまだとはいえ、あの小さかった和坊にもついに彼女が出来たか……。こいつはめでてえ！」

「いや、人の話を聞けよ」

「ついにお前さんにも春が来たわけだな。春川だけに」

「やかましいわ」

「お前にはもつたいたいなべっぴんさんじゃないか。うん、可愛い可愛い。……まあ、うちの死んだばあさんには負けるけど」

「うるせえ、さらつと嫁自慢してんじゃねえよ」

「せつかくだ。記念に赤飯でも炊いてやろうか？」

「炊かんでいい！ お好み焼き屋で何を売り出すつもりだ！」

おじいちゃんはニヒルな笑みを浮かべながら、和隆の肩をポンと叩いた。

「鉄板の上で焦がすのは『お好み焼き』だけにしときな。『恋』を焦がしちゃあ、いけないぜ」

「いや、なに『俺うまいこと言った』みたいな顔してんだよ！ 全

然うまくないから！ 何もかかってないから！」

「誰の頭がバグったって？ まだボケとらんわ」

「遅せーよ、ツツコミ入れるの遅せーよ！ 何個前のセリフだよ！？」

二人は本物の祖父と孫もかくやという激しさでやり取りをしていた。遠慮なしの言葉の応酬を繰り広げる。

和隆は必死になって言い返したのだが、老人は飄々とした顔で、こちらのセリフを右から左に受け流していた。何を言っても馬耳東風という感じで、ニヤニヤと笑っている。

「もうお好み焼きの材料は受け取ったんだから、あんたは用済みだよ。さっさと引っ込め」

和隆はうるさい八工でも追い払うかのようにしっしつと手を振った。

「なんだよ、邪険にするなよ。じいちゃんと和坊の仲じゃないか」

「どんな仲だよ」

鬱陶しげな顔をして眉間に深いシワを刻む和隆。

「それに、いつまでも人のことと和坊って呼んで子供扱いすんなよな」。こっちはもう、十八歳の大人なんだから」

ため息を吐きつつ文句を言っていると、彼は自慢げに胸を張って答えた。「それがどうした。こっちは八十一歳の老人だぞ」

目尻に深いシワを作り、ニツと不敵に微笑する。

ざつくばらんにやり取りをする二人の顔をキョロキョロと交互に見比べ、呆気にとられたような顔をして、遥が口を挟んできた。

「二人はずいぶんと……仲良しさんやね？」

「まあ、小学生の時からこの店に入り浸ってたからな。すっかり顔なじみだよ」

「こいつの事なら毛が生える前から知つとるよ」

おじいちゃんは和隆の頭をポンポンと叩きながら気安く言った。

「遙ちゃん。こいつに泣かされるようなことがあればじいちゃんに言いなさい。じいちゃんがこいつを泣かせてやるつ」

カッカッカと水戸黄門のように明るく笑う。

もうこの老人には勝てる気がしなかった。

このおじいちゃんは和隆が子供の頃からおじいちゃんですつとこの場所でお好み焼き屋を経営していた。

もう八十を過ぎているというのに、腰も曲がらず元気である。自分たちが老人になった時も、この人は相変わらずここでお好み焼きを焼いているんじゃないだろうかと思われた。

この町で育った者の大半はおじいちゃんの店でお好み焼きを食べたことがあり、その大半がおじいちゃんの子供、孫のようなものだった。

うちの学校の教師たちもそうだ。

「寄り道や買い食いは禁止されていると言ってるだろう！」

そう言つて見回りの先生が店に乗り込み、生徒たちを摘発しようとした事があつたのだが、その時、おじいちゃんはその先生に真っ向からこう切り返していた。

「おうおう、中学の頃までおねしょをしていた坊主がずいぶんと偉くなつたじゃねえな」

「お、親父さん……！？」

四十を過ぎたベテランの教師も、おじいちゃんの前ではたじたじになっていた。

子供の頃のある事やこんな事、色んな弱みや秘密を知られているので強くは言えない、頭が上がらないのだ。

「悪さをするでなし、いいじゃねえか。仲間同士集まって、学校帰りに道草を食う代わりにお好み焼きを食つて何が悪い」

「いや、しかし……」

「まあせっかく久しぶりに来たんだ。お前さんも何か食ってけ」

最終的にその先生は、おじいちゃんに丸めこまれて、生徒たちと一緒に机でお好み焼きを食べて、一緒に帰っていった。

おじいちゃんの前では、みんなが小さな子供に戻ってしまう。

それ故に、このお好み焼き屋は教師も手を出せぬ学生たちのオアシス、治外法権なのだった。

「すみませーん！」

向こうでお好み焼きを焼いていた小学生の三人組が、「おじいちゃん助けてー！」という風にヘルプを呼んだ。鉄板から黒い煙が立ち上っている。

「ほらほら、お呼びですよおじいちゃん」

和隆はこれ幸いと、おじいちゃんを急かして追い払いにかかった。パンパンと手を打ち鳴らす。

おじいちゃんは少女らを見て、好々爺の表情で目を細めた。

「あらあら、仕方がないな。今行くよー！……じゃあ和坊、遙ちゃん、ゆつくりしていきなさい」

「はい、ありがとうございます」

「言われなくても居座ってやるぜ」

和隆は憎まれ口を叩き、いーっと唸って老人の背中を見送った。

「やっと行ったか、あのじじいめ……」

和隆は疲れたようにふうとため息をついた。

「……なんか色々ごめんな、春川」

遙の顔を窺いながら謝った。いきなりAだのBだの言い出した時はどうしようかと思った。

「連れてくる店を間違えたな」

「ううん、そんなことはないよ」

彼女は愉快そうに微笑みながら、ふるふると首を振った。

向こうで小学生にお好み焼きの上手な焼き方を教えている老人の背中を見詰める。

「優しく、楽しそうなおじいちゃんやったね」

「楽しすぎてたまに困るぜ」

人懐っこいというか、砕けた性格というか。あの人は初対面の人間でもお構いなしに、同年代の友達のようなノリで話しかけてくるのだ。

しかし、なぜかそれが嫌ではなかった。どうしても憎めない。

この店はひどく居心地が良かった。なんだか自分の家に帰って来たような気にさせられるのだ。

おじいちゃんにさんざんっぱらからかわれて「もう二度と来るかこんな店ー！」と思っけていても、なぜかまた、自然と足を運んでしまふ不思議な空間。時々おじいちゃんの顔を見たくなる。

遥はおじいちゃんの背中を見詰めながら、感謝するような口調で言った。

「いい人やったね。私の足のことも……全然何も言わなかったし」

「ああ、そういえば……そうだな」

おじいちゃんは一切遥の足、車イスのことには触れなかった。普通のお客さんと接するように、自然な感じで遥に話しかけていた。

「うん、やっぱりこのお店を紹介してもらってよかったよ」

遥は新しいお気に入りを見つけたように、にこりと朗らかに微笑んだ。

「……ありがとうね」

話をしていると、唐突に遙にお礼を言われた。

「ん、何が？」

和隆は首をひねって尋ね返した。

「私は今まで……この体になって以来、出不精な人間になってた。

自分は足が不自由だからって、面倒くさいって言って、あんまり外を出歩こうとはせず、家に籠りがちになってた」

遙は唐突に、そんな事をしゃべりだした。

突然どうしたんだろうと思いつながら、和隆は彼女の顔を見詰めた。

「……そうなんだ？」

彼女は車イス生活者だ。

町には色々と障害も多いだろうし、外出が億劫になるのも無理ないだろう。

「ここに引越してくるまでは、ずっと家と学校の間を往復するよ
うな……家と学校の間を往復するだけの毎日の送っていた。同じ道
を行ったり来たりするだけの、平坦な日々。変わらない毎日」

遙は自虐的な口調で語り、座敷の側に置かれた自分の車イスをちらりと見詰めた。

「赤坂くんと出会っていないければ、私の世界はもっと小さく、閉じたものになっていたやろうね」

何だかアンニュイな表情をしてネガティブな事を言い出した遙のことを心配し、和隆は不安げな顔をして尋ねかけた。眉をひそめる。

「おい、いきなりどうした？ 大丈夫か？」

「ん、大丈夫ですよ」

遙は和隆の不安を中和するように、うんと頷いて明るい表情を作った。

すっと背筋を伸ばして、姿勢を正す。

「私はずっと一人だった。一人で車イスを漕いできた。だけど赤坂

くんは……そんな私の車イスを押して、色んな所に連れて行ってくれた。連れ出してくれた。君と出会ってから……私の世界には起伏が生まれ、奥行きが出来た」

まるで祈りを捧げるような瞳をして、まっすぐに見詰められた。

「君と出会って、私の世界はずいぶんと広がったよ」

そして彼女は、ひまわりみたいに、にこりと優しく微笑んだ。

「だから……ありがとう。私をそこから連れ出してくれて」

「そんなこと……俺は別に……」

和隆は照れくさそうに鼻の頭をこすった。

彼女と出会ってから、淡々と過ぎて行くだけだった和隆の日常に変化が訪れた。

世界に色が付いた気がしていた。

今まで勉強にも部活動にも打ち込めずにのりくらりと生きてきたが、やっと自分の体の使い道が分かった気がした。

「それはこっちのセリフだよ」

彼女の笑顔は、今の自分にはひどく眩しかった。

4 - 3 ・ お好み焼き屋さん2

— 3 —

鉄板も十分温まったことだし、和隆はお好み焼きの具材が入ったボールを手に取った。お好み焼き作りを開始する。

それを見て遥が言った。

「私がやるのか？」

「ん、出来るの？」

「関西育ちやからねー。タコ焼きとかお好み焼きを作らせたなら、ちよつとしたものですよ」

彼女は自信ありげに胸を張っていた。

「じゃあお願いしようかな」

和隆はボールを手渡した。

遥は素早い手付きでボールの中の具材をかき混ぜ、タネを作った。熱した鉄板の上に薄く油を敷き、静かにタネを流し込む。ヘラを巧みに操り、生地を綺麗なまん丸に広げた。じゅーっという耳心地の良い音が小さく響く。

「お好み焼きはな、引っくり返すタイミングが一番大事やねん」

彼女は両手にヘラを握り、この道一筋三十年の職人さんのような真剣な眼差しで鉄板の上を見詰めていた。

遥の長い髪が前に垂れた。

彼女はそれを邪魔そうにかき上げ、耳の後ろに引っ掛けた。背中の方に髪を流す。

テーブルに肘をついてその様子を観察しながら、和隆は何気ない口調で遥に尋ねた。

「春川ってさー、髪長すぎじゃないか？」

遙は目を寄り目にしつつ、上目遣いに自分の前髪を見上げた。

「……そうかな？」

「そうだよ」

彼女はとても艶やかで綺麗なストレートの黒髪をしていたが、髪型がちよつとアレだった。

背の肩甲骨辺りまである長い髪は伸ばしっぱなしで毛先がバラバラだし、前髪も目元が隠れそうになるほど長かった。髪の量も多いし、見方を変えたらちよつとした貞子である。

まるで髪の毛で顔を覆い隠そうとしているみたいだった。後一ヶ月もすると、完全な前髪っ娘、目隠れっ娘になるかもしれない。

「髪切らないの？」

「うーん……」

尋ねかけると、彼女は渋い声を出して難しい表情を作った。

何か、今の髪型にこだわりでもあるのだろうか？

「バツサリ切らないにしても、毛先を軽く切り揃えとか。リボンやゴムで縛るとか」

「私には、どうせ似合わないよ」

彼女は曖昧な表情を浮かべていた。謙遜するように首を振る。

「そんなことないって」

和隆は腰を持ち上げ、遙の後ろに回り込んだ。

「ちよいと失礼」

もし髪型を変えたとしたらどんなのが似合うだろうと、勝手に彼女の頭を弄り始めた。

長い髪を一つにまとめて、後ろで縛ってポニーテールにしてみた。次いで、可愛らしくツインテールにしてみる。

あるいはカチューシャ等で前髪を持ち上げて、おでこを出させてもいいかもしれない。

和隆は遥の前髪をかき上げ、おでこを露出させた。隠れがちな彼女の顔を露わにさせる。

烏の濡れ羽色をした彼女の髪は、触るとシャンプーのCMのようにサラサラとしていて手触りが良かった。

「いつそ思い切ってショートカットとかどうよ？ 春川は短くしても、似合うんじゃないか？ うん……ショートでもいける気がする」

遥は小首を傾げながら尋ね返した。

「そう、かな？」

「うん。つか、単に俺がショートカット好きだけなんだけどな昔から、なんとなくショートカットの女の子が好きだった。活発的というか、快活な感じがして。」

とにかく、どんな髪型にしても彼女には似合うだろうと思われた。なにしろベースがいい。

「いつそ切っちゃえよ。邪魔くさくないか？ 量も多いし」

「というか……いつまで触ってるつもりなんよ？」

好き勝手に遥の頭をいじくって、「パイナップルヘア」などと遊んでいると、彼女はくすぐったそうに身をよじった。

「止めてえや」

若干頬を染めながら、照れくさそうに両手で頭を押さえた。髪の毛をおでこに撫でつけ、顔を隠す。

「ごめんごめん」

和隆は笑いながら自分の席に戻った。

「私は別に、このままでいいよ」

「美容院で毛先だけでも切り揃えてもらえばいいのに」

それをするだけでも、大分見た目も変わるはずだ。

「……あんまり遊んでると、お好み焼きが焦げてしまうよ」

遥は会話を切り上げるように言い、鉄板を見下ろした。

鉄板の上では、お好み焼きの生地が狐色に焼け始めていた。

「そろそろかな……」

遥は呟き、シャキーンと両手にヘラを構えた。真剣な瞳をしてお好み焼きを睨みつける。その様は、なんだかこれから一勝負行つた女賭博師のようでもあった。

和隆は遥に尋ねた。

「大丈夫か？ 一人で引っくり返せる？」

お好み焼きは結構な大きさに広がっていた。女の子が一人で引っくり返すのはかなり難易度が高そうである。

「まあ見てて」

遥は両手に持ったヘラをお好み焼きの下に潜り込ませ、精神を集中させるようにふうーと息を吐き出した。

次の瞬間、「やあっ！」と裂帛の気合いと共に、手首を返した。くるんと見事にお好み焼きがひっくり返る。

「おおお」

和隆は素直に感嘆し、パチパチと拍手をした。

「どんなもんよ？」

彼女は少し自慢げに胸を逸らしていた。

「うん、すごいすごい」

和隆は裏面も良く焼けるようにとお好み焼きを上から押し付けようとしたのだが、それを見た遥が、不正でも見つけたかのように「あっ！」と鋭い声を上げた。ちよっと待ったと止められる。

「なんだ、どうした？」

「駄目だよ、そんなことしたら。空気が逃げて、フワフワ感がなくなってしまうよ」

「ん、そうなの？」

「色々とコツやタブーがあるんよ。庶民的で簡単そうに見えても、これでなかなか、奥が深いんだよ？ お好み焼き作りは」

まるで考古学でも語るような顔をして説法された。

さすが粉ものの文化圏から来た人だ。色々とかだわりがあるらしい。

「はあ、勉強になります」

「食に命懸けてるからね、あっちの人は」

「お好み焼き一枚焼くのに命懸けかよ。すげえな、おい」

「お好み焼きを上から押し付けようものなら、その人自身が熱せられた鉄板の上に押さえつけられることになります」

「怖えよ、どんな拷問だよ」

自分が下手に手を出すより、彼女に一任の方がよさそうだ。和隆は大人しくヘラを置いて完成を待った。

その後、遥お手製のお好み焼きが完成した。

「マヨネーズつけてかける？」

「うん、頼んだ」

遥は両面焼き上がったお好み焼きにソース、マヨネーズをかけ、その上に青のりやカツオ節やらをふんだんに振りかけた。さらに、オマケしてもらった卵でプリプリの半熟目玉焼きを作り、お好み焼きの上にそつと乗せる。

「はい、出来ましたー」

「おお、美味そう！」

このままメニューの写真として使えるんじゃないかというほど、彼女の作ったお好み焼きは見栄えもよく美味しそうだった。生地の上でカツオ節がゆらゆらと踊り、立ちのぼる湯気が食欲をそそる。

思わず腹の虫がぐーと鳴った。

「食べやすいように先にカットしてしまうね」

遙はヘラを使って、お好み焼きを格子状に細かく分け始めた。

それを見て、和隆は首を傾げた。

「あれ、そういう風に切るんだ？」

「え？ 他にどうやって切るっていうん？」

「ピザとかケーキを切るみたいに、こう、放射状に……」

身振り手振りを加えつつそう説明すると、彼女は信じられないという風に目を見張っていた。

「嘘おー！？」

「いや、嘘おーって言われても困るんだけど」

自分の周りではそういう人間が多かった。

「関西だと、大抵格子状に切るよ。サイの目状っていうか」

「そうなんだ？」

またも意外な所で地域差が出た。

「端の方から食べていけば、厚くなって火が通りにくい真ん中の部分も最後においしく食べられるし、それに……」

遙はお好み焼きの焼き方や切り方についてとつとつと語り始めた。本当にお好み焼きが好きらしい。

「お好み焼きはおかずですよ？ お好み焼きと一緒にごはんを食べるねんから」

「それこそ嘘だろ？」

軽くドン引きした。なんという炭水化物祭り。

それはともかく、実際に食べてみることにした。

二人揃っていただきますと手を合わせる。

遙はヘラを食事前の小さな物に持ち替えた。カットした一切れをヘラですくい取って、ふーふーと息を吹きかけて冷ます。

そしておもむろに、お好み焼きの乗ったヘラを和隆の方に差し出してきた。

「はいどうぞ」

「ん、何が？」

「たぶんうまく出来たと思うんやけど、味を確かめてみて？」

彼女はとても純粹で無邪気な表情をしていた。あどけない顔をして、和隆に味見を要求してくる。

和隆は半ば呆気に取りられたような表情をして、遙のことを見詰め返した。

「……マジか？」

これは俗に言う、お口あくんというやつではないだろうか？

男子の憧れ、お口あくん。

しかも手料理。

……いや、正確には店の料理だけど。

和隆は無意味にしゃちほこばってしまった。

（こいつ、狙ってやってるのか……？）

一瞬からかわれているのだろつかとも思ったが、天然っぽかった。彼女は不思議そうな顔をして、戸惑っている和隆のことを見詰めている。

「ん？ どうかしたん？」

「い、いや……」

和隆は首を振った。

まあ、彼女が直接食べさせてくれるというなら、自分はただその恩恵を賜るのみである。

「あーん……」

若干の気恥しさを感じつつ、和隆は大きく口を開けてテーブルから身乗り出した。

が、その時。

ふと視線を感じて、和隆は横手を見た。

和隆らのテーブルの側に、店主のおじいちゃんがしゃがみこんでいた。

テーブルの端から目から上だけを覗かせて、じーっとこちらの様子を観察していた。和隆らのことをガン見している。

「いやあ、いいですなあ。青い春ですなあ。」

おじいちゃんはニヤニヤといやらしい笑みを浮かべていた。

「うおいつ!？」

和隆は驚いて、反射的に乗り出していた体を引つ込めた。

半ばどもりながら尋ねかける。

「な、なんだよじいちゃん!?　なんでそんな所にいるんだよ!？」

「ここはじいちゃんの店だぞ?　どこにしようと、じいちゃんの勝手じゃないか」

老人はなんら悪びれた様子もなく、むしろ開き直ったような口調で言った。ニヤニヤとにやけた顔をして、「やるじゃねえか、おい」と和隆のことを見詰めてくる。

「いいねえ、鉄板も溶けるほどのアツアツっぷりだねえ」

「テーブルのすぐ側で客のやり取りをガン見してんじゃねえよ!」

「いやあ、若いつていいねえ。じいちゃんも若い頃は、死んだばあさんと……」

「だから人の話を聞けつての!」

こっちの話を無視して、おじいちゃんは勝手にしみじみと思い出

に浸り始めた。

遙も遙で、「あ、おじいちゃんも一緒に食べますか？」などと言つて、のん気な顔をしておじいちゃんにお好み焼きを差し出していた。

「やらんでいい！」

餌付けを阻止する。

ここにはボケしかないのか。

「なんだよ、冷たい奴め」

おじいちゃんは小さな子供のようにはブーブーと唇を尖らせていた。
「うるせえ、いちいち出てくんない」

しつしつと手を振って店主のおじいちゃんを追ひ払う和隆。

「つたく、油断も隙もないんだから……」

やはり遙を連れてくる店を間違えた気がする。和隆はハアと深いため息を吐き出した。

おじいちゃんが離れていくのを確認した後、改めて実食である。

「はい、あ〜ん」

相変わらず、遙はお好み焼きをお口あ〜んと差し出していた。

こいつは計画犯じゃないだろうなと少し疑いたくなった。俺を悶え殺すつもりか。

和隆は照れて赤くなりながら、身を乗り出して遙の差し出すお好み焼きを頬張った。

「あーん……」

「どうかな？」

遙が小首を傾げて尋ねてくる。

「うん……うまい」

彼女の作ったお好み焼きは、掛け値なしにうまかった。

「なんだこれ、滅茶苦茶うまいぞ？」

和隆は不思議そうな顔をして鉄板の上のお好み焼きを見下ろした。この店の味は熟知しているが、果たして、この店のお好み焼きはこんなにも美味だっただろうか？

オーバリアクションで驚いている和隆を見て、遥は「そんなに？」と言って、嬉しそうに微笑んでいた。

「俺が作った時と全然味が違うなあ。やけに生地がフワフワもちもちしている。具材は同じはずなのになあ……」

店が出された物を元に作ったのだから、隠し味も何もないはずだ。焼く人間が変わるだけで、こうも味が変わってくるものなのか？

それとも、彼女が作ったものだから……彼女が食べさせてくれたものだから、こんなにも美味しく感じるのだろうか？

大切なのは何を食べるかではなく、誰と食べるか、という話。

和隆は大仰に頷いた。

「うん、すげーうまい。さすが本場仕込みは違うな。店を出せるぞ」

「いやあ、それほど」

べた褒めすると、遥は頭をかきかき照れていた。

4 - 4 ・ お好み焼き屋さん3

— 4 —

うまいうまいと舌鼓を打ちながらアツアツのお好み焼きを頬張っていく。

残りも大分少なくなってきた頃、遙が自分の前髪を弄りながら思い出したようにぼつりと小さく呟いた。

「美容院かあ……」

「ん……？」

和隆は顔を上げて彼女を見詰めた。どうやら先程の髪の毛の話に戻ったらしい。

遙は髪の毛を弄りながら、なぜか気だるげというか、物憂げな表情をしていた。

（なんか俺、地雷踏んだのか……？）

目に見えて彼女の様子がおかしくなっていた。なんだか気落ちしたように、ハアと大きいため息をついている。

和隆は若干不安になりつつ遙に問いかけた。

「なんだ、美容院がどうかしたのか？」

「ん……いや、別に」

彼女は何でもないと風を振った。

「なんだよ、何かあるなら言えよ？」

追求するように尋ねかけると、彼女は話そうかどうかと迷うに言い淀んだ後、小さな声で語り出した。

「こっちに引っ越してきた時……新学期が始まる前に、私も髪の毛どうにしないといけないなって思って、美容院に行ったんだよ」

「ああ、美容院に行っただ？」

和隆は小首を傾げた。

その割には、毛先も揃っていないし雑然としているな？

「まあ、行くには行っただけ……」

「行っただけ？」

「断られてもた」

「断られたあ？」

和隆はオウム返しに聞き返した。

一瞬、意味が分からなかった。

「断られたって……え？ 髪の毛のカットを？」

「うん」

「なに、よっぽど変な髪型をお願いしたの？」

彼女は言いくそくに言葉尻をぼかしながら答えた。

「いや、普通にカットだけを頼もうと思ったんだけど……店に入っ
た時点で、うちでは無理ですって断られちゃって……」

和隆はぼかんと口を開けて、遙の顔を見詰め返した。

「はあ？ 何だよそれ？」

訝しげに眉を寄せながら、慎重な口調で尋ねかけた。

「何だよそれ……？ 断られたって、それはお前が……車イスだからか？」

そう質問すると、彼女はやや目を伏せがちにして「うん、たぶん
と言って、頷いた。

「美容院の人に『ごめん、うちではそういうのはやってないから』
って言われてもた」

「……そういうの？ そういうのはやってないから？」

和隆はまたもオウム返しに聞き返した。ちよつと意味が分からな

い。

その時の情景を思い浮かべてみた。

髪の毛をカットしてもらったために、美容院を訪れた遙。

しかし美容師は、そんな車イスの少女を見下ろして、言ったという。

「ごめん、うちではそういうのはやってないから」

……何だそれ？

遙は赴いた美容院で、こんな事を言われたらしい。

「うちはバリアフリーとか整っていないし、あなたに不自由な思いをさせてしまうかもしれない。うちのお店よりも、よそに行った方がいいですよ。出張美容や訪問理容のサービスをやっている所もあるし、そういうのを利用すればいいんじゃないかな？」

和隆は信じられないというような顔をして、遙を見詰めた。

「お前……そんな事言われたのか？ 店の奴に？」

「うん、まあ……。そんな感じのことを」

彼女は曖昧に頷いた。

和隆は言葉を失い、二の句を継ぐことが出来なかった。

何だよ、それ……。

言葉は着飾っていても、要するに「障害者お断り」ってことじゃないか。

「私も、電話して確認してから行けばよかったね」

遙は、まるで自分が悪かったみたいな言い方をした。

和隆が口を挟む。

「いや、そういう事じゃないだろ。そういう話じゃねーよ！」

眉間のシワを深くしながら、和隆は苦虫を噛み潰したような顔を作った。お好み焼きを食べる手が止まる。

今までの和氣藹々とした和やかな空気は、全部どこかにすっ飛んでしまった。

「なんなんだよ、その話は……」

和隆は忌々しげに呟いた。

「おい、それどこの美容院だよ？」

「ケーキ屋さん近くの……」

遥の説明を聞き、ああ、あそこかと頷いた。

和隆は利用したことはないけれど、金髪のスカした男が店長をやっている店だ。店内がやたらおしゃれに装飾された、所謂チャラ男の店である。

おおかたその美容師たちは、車イスの遥を見て「ああ、面倒くさいのが来たなあ……」とでも思ったのだろう。だから適当に相手を氣遣うようなことを言って、遥のことを追いつ返したのだ。

遥は氣まずげな口調で言った。

「まあ、昔そんな事があったんよ。だから他の美容院に行っても、また同じように断られてしまうんじゃないかって思えて、なんだか行きにくくて……。訪問美容っていうのも、どこに頼めばいいか分からなかったし」

「そんな……」

和隆は半ば絶句しながら遥の頭を見詰めた。

毛先がバラバラな、伸ばしっぱなしのその髪の手を見詰める。

だから彼女は、ずっとこんな髪型をしていたのか。

美容院にも行けずに、貞子のように。

「美容院に限らず、たまにそういう事があるねんな。入店拒否つてわけじゃないけど、あからさまに嫌な顔をされたり……」

遥はこの場の空気を重くしないようにと、無理にあっけらかんと

した口調、さばさばとした口調で語っていた。

「まあ、仕方ないことだけどね」

そう言っつて、諦めたように肩をすくめる。

まあ、仕方ないことだけどね。

しかし、そう語る彼女の顔は、どこか泣き笑いのような表情になっていた。寂しげに儚く微笑する。

和隆は大いに憤慨した。ギョツと拳を握りしめる。

「おい、こんな所でのん気にお好み焼きなんか食ってる場合じゃねえよ。そういう事はもっと早く言えよ！」

お好み焼きのヘラを握りしめて、バツと座敷に立ち上がった。

「今からでも、その店にクレームつけに行くぞ！ 殴り込みだっ！」
そんな店は潰れてしまえと、和隆は鼻息を荒くして拳を振り回した。周りの客たちが何事だという風にこちらを見る。

腹を立てて熱くなる和隆に対し、テーブルの向こう側に座る遥はひどく静心としていた。

「いやいや、何もそこまでしなくても」

座敷にちよこんと座ったまま、困ったような表情を浮かべていた。まあまあ、抑えて抑えてというジェスチャーをしている。

「とりあえず落ちついてよ、赤坂くん」

「これが落ち着いてられるかよ！」

「でも、もう大分前の話やし」

「泣き寝入りはよくないぞ。ここぞという時は、ビシッと言ってやらなきゃ！」

一人傷付いて、我慢して……。

このままでは、彼女は不当な扱いを受けるばかりではないか。

「というか、なんで君がそんなに怒ってるんよ？」

「お前が怒らないからだよ」

なんでこいつは、こんなにも平静としていられるんだ。ここはブチ切れてもいい所だろ？

「ああ、もう、考えれば考えるほど腹が立ってきた」

和隆は頭をくしゃくしゃとかき回した。

何様だ、馬鹿野郎！

今にも店を飛び出さんばかりの和隆に、恐縮しながら遥は言った。
「いや……本当に、もういいのよ。私自身、あんまり騒ぎを起こしたくないし……」

和隆のことをたしなめる。まるで全てを諦めたかのように、ふるふる小さく首を振る。

「でも……！」

和隆は声を荒げて叫ぼうとした。

しかし、遥がそれを遮った。

「赤坂くんの、その気持ちだけで十分だよ。私なら、大丈夫やから」
私なら大丈夫やから……。

そう言って、彼女は気弱げに微笑んだ。

「こういうのには慣れてるからね。いちいち目くじらを立てていて
もしようがないっていうか、こっちが馬鹿を見るだけだっていうか
……。うん、私なら大丈夫やから」
「……っ」

和隆は口をつぐんだ。唇を噛みしめる。

彼女がそう言うのなら、仕方がない。自分だけが暴走しても、
彼女に迷惑をかけるだけだ。

何だか全身の力が抜けてしまった。

和隆は力なくため息を吐き出し、座布団に座り直した。

苛立ちまぎれに、目の前にあったお好み焼きを口の中に放りこむ。

それでも腹の虫は治まらず、店主のおじいちゃんに頼んだ。

「じいちゃん、酒だ！ 酒をくれ！」

芋焼酎でも煽りたい気分だった。

「ガキに出せるか、馬鹿たれ。十年早いわ」

あっさりと断られてしまった。

テーブル越しに遥のことを見詰めると、彼女は気まずげに視線を下に落としていた。まるで自分が悪い事をしたみたいに、居心地悪げに小さくなっている。

「ごめんね、こんな話しちゃって。せつかく楽しい食事会やったのに……」

二人はそれきり、黙り込んでしまった。

お互いに何もしゃべらない。

じゅーじゅーと鉄板の上のお好み焼きが焦げていく。

周囲の学生たちのおしゃべりの声が、いやらしげに聞こえた。

「はあ……」

和隆はもう一度深くため息を吐き出した。固めた拳をぎゅっと握りしめる。

お好み焼きを焼き始める前に遥が語った言葉が思い出された。

『ここに引越してくるまでは、ずっと家と学校の間を往復するよ
うな…… 家と学校の間を往復するだけの毎日を送っていた』

…… 多分、これが初めてではないのだろう。

美容院だけではなく、色んなお店で「そういう事」があったに違いない。バスや電車などの公共の乗り物に乗る時も、同じような気分を味わった事があるのかもしれない。

そりゃあ外出が億劫になって、出不精な性格にもなるだろうさ。

彼女は自分の知らない所で、様々な障害を感じながら生きてきたのだらう。

色んな壁にぶつかりながら、生きてきた。

自由に動く足を持つ和隆には想像も出来ないような世界で。

これから先も、彼女は車イス生活者ということで、身体障害者という事で様々な所でつまずき、不自由を感じるのだらう。バリアフリーやノーマライゼーションといっても、所詮限界はある。

この世のあらゆるしがらみや苦しみが彼女を襲い、その心に、徐々に徐々に「諦観」という名の杭を穿つのだらう。

「私はこんな体だから、そういう扱いをされても仕方ない……」

そう言って、全てを諦めてしまう。諦め癖がついてしまう。

澱のように、彼女の心に絶望が降り積もる。

その心を犯していく。

それを思うと何だかひどくやるせなくて、泣きなくなった。

— 5 —

「……代わりの美容院を探しといてやるよ」

和隆はぼつりと切り出した。

「一人で行くのが不安だったら、俺が付いて行ってもいい。訪問美容つてのに頼んでもいい。俺も付き合うから」

「うん……いや、やつぱりいいよ」

しかし、彼女はふるふると首を振ってその申し出を断った。

「見た目も悪いし髪の毛切らなきゃいけないとは思ってたけど、私自身、本当はあんまり切りたいとは思ってなかったし……」

遙は物憂げな口調で答えた。

それはまるで、他にも美容院に行きたくない理由、髪を切りたくない理由があるかのような口ぶりだった。本当の事を押し隠すかの

ように気まずげに顔を俯かせ、和隆から視線を逸らす。長い前髪で表情を覆い隠そうとする。

（なんだ……？）

そんな彼女の様子を見て、和隆は再び訝しげ眉をひそめた。

「なんだよ、まだ何か問題でもあるのかよ？」

まだ何か、彼女は憂いや悩みを抱えているのだろうか？

この子は一体どれだけの憂鬱を一人で抱えているんだよ、と思った。

「何か悩みや問題事を抱えてるんなら……俺でよければ、相談に乗るよ。力になる」

和隆は彼女の瞳を見詰めながら言った。

「俺じゃあ頼りにならないかもしれないけど、人には話にくいこともあるだろうけど……一人で抱え込んでいても、重いだけだろ？」
彼女の抱えている問題、憂いがどういった類のものなのかは分からなかったが、彼女のために何かをしてやりたかった。

例え日常の中で嫌なことがあったりしても、他人にグチをこぼすだけで結構楽になったりするものだ。俺でよければ、何十時間だって付き合ってやる。

「俺が駄目なら、なんならあのじいちゃんに相談してみてもいい」
「……おじいちゃんに？」

遙は顔を持ち上げて、不思議そうに店主のおじいちゃんの背中を見詰めた。彼はこちらの視線には気付かず、よその高校の制服を着た女子高生たちと親しげにおしゃべりをしていた。

亀の甲より年の功。松傘より年嵩。

あの老人は普段はとぼけた言動をしているが、この店でお好み焼きを焼きながら、教会の神父のように、迷える子供たちの話を聞い

てはその悩みを解決してきた。

新宿の母ならぬ、お好み焼き屋のじいじ。

取り分けて建設的なアドバイスをしてくれるわけではないけれど、相談して心が軽くなった、問題が解決したという学生は少なくない。「そうかそうか、そんなことで悩んだのか。今まで一人で、よく頑張ったなあ」

そう言っておじいちゃんの無骨な手で頭を撫でられたりすると、なんだかすつと肩の力が抜けたりする。心が軽くなったりする。自分分は一人ではないのだと実感させてくれる。和隆も、昔はよくお世話になったものだ。

周囲に迷惑をかけないように、他人の手を煩わせないように自分を殺してばかりいる彼女。

そんな彼女に、和隆は真摯な顔をして語りかけた。

「とにかくだ。『自分で出来ることは自分で何とかするようにして』とかなんとか言って、何でもかんでも一人で抱えこんでんなよ。俺にも背負わせる。俺はお前の味方だ」

もう一度、その言葉を繰り返す。

「例え何があっても、誰が何を言おうと、俺はお前の味方をする。無理矢理にでも、手を貸すぜ」

勝手に一人になんか、させはしない。

何でもかんでも自分でやろうとする、自分一人で何とかしようとするのは、自立ではなく孤立である。

いいじゃねえか、たまには人に頼ったって。泣き言を言ったって。「赤坂くん……」

遥は和隆の瞳を見詰め返しながら、小さく呟いた。

しばらくの間、遙は思い詰めたような表情をして、和隆のことを見詰めていた。長い前髪の隙間から、綺麗な黒い瞳でじっと見詰められる。

言葉につつかえながら、彼女は何事かを言いかけた。

「あのね赤坂くん、私は……」

何かを言いかけては、遙は躊躇うように「でも、やっぱり……」などと呟いて、言いにくそうに口ごもっていた。

和隆は口を挟まず、じっと彼女の言葉を待った。

しばしの逡巡、葛藤の末、遙は何かを決意したような顔をして口を開いた。

「それじゃあ……赤坂くん。私の悩みっていうか、お願いを……聞いてくれるかな？」

「おう、何でも言え」

和隆は力強く頷いた。どんなお願いだろうが、どんと来いだ。

遙は和隆の目を見詰めながら、そのお願いとやらを口にした。

「だったら、赤坂くんが切ってくれへんかな？ 私の髪の毛」

束の間の静寂の後、和隆は呆気に取りられたように聞き返した。

「……はい？」

この子は予想外のことばかり口走るなと思った。

「え、なんて？」

「だから、私の髪を赤坂くんがカットしてくれへんかなー、って」
どうやら聞き間違いではなかったらしい。

「この俺がヘアカットお？ いやいや、無理無理！」

和隆は素っ頓狂な声を上げて、ぶんぶんと手を振った。そんなお願いは承れませんと、いきなりの前言撤回である。

「つか、なんだその願いは？」

「俺にそんなスキルねーよ。っていうか、なんで俺だよ？ 普通に美容院に行つて、プロの人にお願ひしたらいいだろうが？」

「それでまた、美容師の人に色々言われて断られたらどうするんよ？ 私は立ち直れなくなってしまうわ。私は美容院恐怖症になってしまうわ」

遥は冗談を言うような、あっけらかんとした口調で言った。

今までの思い詰めたような表情を打ち消し、彼女はなんだか、穏やかな表情をしていた。「これで問題は全て解決！」というような、さっぱりとした顔をしている。

「いやいや。だからそんなことは二度とないようにと俺がお店を手配して、付き添つてやるって言ってるんじゃないか」

そう言つて説得しようとしたのだが、遥はこちらの話をさらりと聞き流していた。

「いやあ、赤坂くんがいい人で良かったあ。これで私の髪の毛の問題も、万事解決！」

勝手に話を推し進め、一人で勝手に良かった良かったと頷いていた。

「待てやこら。まだ誰も了承してないっての」

遥は唇を尖らせながら言った。

「最初に髪を切らないの、髪を切れて言い出したのは赤坂くんの方やる？ それに、相談に乗るよ、力になるよって言ってくれたやん」

「いや、言つたけど。確かに言つたけども。そんな事頼まれても……」

「あれは嘘だったの？ 口当たりのいい言葉だけを並べて、私のことを誑かしていただけの？ 人の弱みに付け込んで、たらし込もう

としていただけなの？」

ものすごく純真無垢な目をして見詰められた。雨の日に段ボールに入れられて捨てられた子犬のように、ウルウルとした瞳で和隆のことを見詰めてくる。

「いや、別に誑かすつもりはなかったんだけど……人聞き悪いな」

和隆は困ったようにポリポリと頭をかいた。

何だかよく分からないが、いきなりキャラ変わり過ぎじゃないか、こいつ？ 春川遥ってこんなキャラだったけ？

和隆はあれやこれやと切言して遥の考えを改めさせようとした。

「髪を切つてと言われても……こっちは生まれてこの方、他人の髪の毛なんてカットしたことのないズブの素人なんだぞ？」

小学校の図工の時間に、チョキチョキ画用紙を切ったことがあるくらいだ。

「そんな奴にヘアカットを頼むなんて正気か、お前？」

しかし、遥はひどく樂觀的な口調で言った。

「大丈夫やつて。簡単だよ。くしで梳かして、ハサミでチョキチョキ切るだけやん」

女は度胸という風に、ドーンとしている。何だこの男前っぷりは？

「切るだけやんつて……。他人事のようにあっさり言ってるけど、それお前の髪の毛なんだぞ？ 俺なんか手を出して、もし失敗したらどうするんだよ？」

「その時はその時だよ。まだ起きてもないことを心配して躊躇っていたら、私たち人類は何も出来なくなってしまうわ」

「いや、まあ、それはそうだけど……」

正論中の正論を言われ、和隆は言葉に詰まった。何だかスケールが大きくなってきたな。

遥は話を切り上げるように、パンツと大きく手を打った。

「とにかく！ その時は、よろしくね。私の味方さん？」

テーブルの向こうに座る遥は、なんだか吹っ切れたような表情をしていた。

にこりと爽やかな頬笑みを浮かべている。

和隆は不安げに尋ね返した。

「……マジっすか？」

4 - 5 ・彼女の世界

— 6 —

数日後、二人はくしやハサミを買って公園にやって来ていた。遥の家の正面にある、あの児童公園である。

砂遊びをする幼稚園児やウォーキングをしている老人、井戸端会議を繰り広げている奥様方と、午後の公園内は色んな人で賑わっていた。向こうでは小学生くらいの少女が三人、楽しげにバドミントンをしている。

「どんな髪型になるか楽しみやなあ」

遥は気楽な調子で言い、のんびりと車イスに腰かけていた。

公園に備え付けられた木製のテーブルの上に鏡を置き、それを覗きこみながらパラパラと前髪を払ったりしている。

家の中では後片付けが大変だと、二人は公園の片隅でヘアカットを行おうとしていた。

草木の生い茂る芝生の上で青空美容室である。

和隆は生まれて初めて道具を手にしたチンパンジーのように、物珍しげに散髪用の細身のハサミを手の中で弄んでいた。チヨキンチヨキンとハサミを鳴らしたりする。

不安な顔をして遥に尋ねかけた。

「なあ、本当にやんの？ 止めるなら今のうちだぜ？」

人の髪の毛をカットするなんて、初めての事だった。

とりあえずヘアカットの仕方が載っている雑誌を読んだり、馴染みの美容院に行ってプロの美容師の手ほどきを受けたりもしたが、まったく自信がなかった。うまくカット出来る気がしない。自分の

せいで、彼女の頭がボンバーヘッドになったらどうしよう。
「やっぱり止めとこうぜ。責任持てねえって」

ゴチャゴチャと駄々をこねて躊躇っていると、不意に遙がこちらを振り向いた。真剣な瞳をして、まっすぐにじっと見詰められる。

その視線に軽く気圧され、和隆は少したじろいだ。

「な、なんだよ？」

「ねえ、赤坂くん。ちょっと私の話を聞いてくれる？」

「ん……？」

急に改まった口調で話しかけられ、和隆は首を傾げた。

「なんだ？ そんなに改まったりして」

「あんな、ちよつと言いにくいことやねんけど……私は実は、視線恐怖症やつてん」

彼女は躊躇いがちに、唐突にそんな話を打ち明けてきた。

和隆は驚いたようにぽかんと口を開き、訝しげな表情をして聞き返した。

「シセンキョウフシヨウ？」

まるで生まれて初めて耳にした異国語をしゃべる時のように、イントネーションが大分おかしくなっていた。

視線恐怖症。

どこかで聞いたことがあった。

自分の視線が他人を不快な気持ちにさせるんじゃないかと思い込んで人と目が合わせられなくなったり、あるいは、他人の視線を過剰に意識しすぎて情緒不安定になったりするという、あれか？

高所恐怖症の人間が高い所を恐れるように、視線恐怖症の人間は自分の眼差しや、他人の視線を恐れてしまう。

最悪、自分や他人の視線を気にするあまりまともに人間関係が築

けなくなつて、鬱病になつたり対人恐怖症になつたりするらしい。

その、視線恐怖症……？

そう尋ねると、遥は和隆から視線を逸らしつつ、こくんと小さく頷いた。

「私の場合は、後者やね。他人の視線が……怖かった」

「他人の視線が？」

和隆は戸惑い気味に遥のことを見下ろした。

彼女は車イスの上で小さくなっていた。

膝の上で手を組み、視線を下に落としている。顔を伏せがちにして、長い前髪で表情を覆い隠そうとしていた。目元を隠し、和隆と目を合わせようとしない。

いきなりそんな事を言い出して……どうしたっていうんだ？

和隆は突然のことに戸惑いを覚えた。

とにかく彼女の話の聞こえと近くの椅子に腰を下ろし、遥と視線を同じにした。じつと彼女の顔を覗きこむ。

「私って、車イスがないとどこにも出掛けられない人やん？」

和隆の困惑をよそに、遥は唐突に、そんなことを言い出した。

「……まあ、そうだな」

和隆も頷いた。

彼女は自力では立てない、歩けない体をしている。どこに行くにしても、車イスが必要だった。

「それがどうかしたのか？」

「車イスに乗って外を出歩いていると、どうしても目立ってしまうねん。どこにいても、どこに行っても……みんなから見られている気がする」

「見られている？」

「私が自意識過剰なだけかもしれへんけど、そうやって車イスを転がして歩いていると……歩いていてだけで、みんなから注目されて見られてる気がしてたんよ」

和隆は今までのことを思い返した。

登下校中の通学路。

学校の廊下や、階段の昇降時。

商店街のゲーセンで遊んでいる時や、お好み焼き屋で座敷に上がる時など……。

確かに、車イスの彼女はどこにいてもよく目立った。物珍しげな顔をして人から注目されがちだった。隣りにいる和隆も、何度か他人の視線を感じたことがある。

「でもそれは……ある程度は、仕方のない事じゃないか？」

多分これは、彼女にとっては非常にデリケートな問題だ。和隆は相手を刺激しないようにと注意しながら、慎重な口調で答えた。

人と違うという事は、どうしても、それだけで悪目立ちしてしまうものだ。それが制服姿の女子高生とあってはなおさらだろう。

「他人の目なんて気にすんなよ。そんな事で悩んでたら、将来ハゲるぞ」

わざと冗談めかして気楽な風に言ったのだが、彼女は嫌々をするように首を激しく左右に振った。軽く髪が振り乱れる。

「私もそう思っただけで意識しないようにと心掛けてたんやけど、そうやって意識しないようにと意識すればするほど、逆に意識してしまっ……なんだかみんなが、私のことを変な目で見ているような気がしてたんよ」

「変な目？」

「みんなが私のことを色んな『目』で見てる。かわいそうっていう哀れみの目だったり、うざったいっていう蔑みの目だったり、ある

いは、珍しい生き物でも見るような目だったり……」

ゆっくりとした口調で語り続ける遥の声のトーンは、どんどん暗いものになっていった。言葉はつかえつつかえになり、声に抑揚がなくなっていく。

遥は、何やら思い詰めた表情をしていた。

自分の手元を見下ろしながら、ここではないどこかを見ているような目をしていた。じつと虚空を見詰めている。忙しく指先をこすり合わせたりしている。

「みんなが私のことを見て、嗤っているような気がして……」

同情的な他人の視線。

差別的な他人の視線。

奇異の物でも見るような、好奇心満ちた他人の視線……。

それらの視線に怯えるように、彼女の体は車イスの上で小さく震えていた。

「そういうのが嫌で、そういうのを視界の外にシャットアウトしてしまいたくて……私は髪を伸ばしていた、っていう理由もあったんだよ。自分を閉ざしてしまいたくて」

遥は下を向いたまま自虐的な口調で言った。「ほんと、どうしようもなく駄目な子やね」と言っ、自嘲的にフツと笑う。

（まさか……）

和隆は無言で遥の長い黒髪を見詰めた。

目隠れっ娘ばりの、長い髪。

貞子のようなロングストレートのその髪を見るたびに、「まるで髪の毛で顔を覆い隠そうとしているみたいだ」などと感想を抱いたこともあったが、まさか本当にそういう意図があったとは。

「そういう気持ちがあつたから、教室でもあんまり人に話しかけていくことが出来なかった。車イスの私が話しかけても、『かわいそう』って目で見られるんじゃないかって……あるいは、『面倒くせえな』って目をされるんじゃないかって思えて……怖くって」

遙係りという強制が無くなったことにより、三年一組の空気も今では大分柔らかいものになっていた。遙に関するわだかまりも少なくなっていた。

しかし遙は、人から話しかけられたら気さくに明るく受け答えをするものの、相変わらず、自分からは他人に深く接触していく事がなかった。

彼女のことだから他人に迷惑をかけないようにと気を遣っているだけ、極力他人の手を煩わせないようにと周囲に遠慮しているだけだと思っていたけれど……まさか、まさか、そんな事を考えていたなんて。

和隆は言葉を返すことが出来なかった。

今まで自分の胸の内側だけに押し隠していたものを、そつと吐露しだした遙の顔をじつと見詰める。

（こいつは今まで、そんな事を考えて生きていたのか……）
そんな世界で生きてきたのか。

足の動かない自分。

車イスに乗っている自分。

そんな自分を見詰める他人の視線。

そんな他人の視線が……怖かった。

和隆は黙って遙の独白に耳を傾け続けた。

真剣な表情をして、その一言一言を聞き漏らさないようにと彼女

を見詰める。

彼女は人とは異なる不自由な体をしていながらいつも朗らかとしていて、障害なんかに負けるものかという風に凜としていて……周囲の視線なんか、全然気にしていないと思っていた。

春川遥はいつも凜としていて孤高であると。

和隆はそんな風に思っていたが、思い込んでいたが……。心の中では、彼女はそんな事を考えていたのか。

人から注目されることへの忌避感。

それをシャットアウトするための長い前髪。

視線恐怖症……。

彼女はいつも明るく振る舞っていたし、そんな事まったく全然、これっぽっちも気付かなかった。

彼女はただ、『障害にも負けないポジティブな女の子』というペルソナを被っていただけなのだろうか？　そういう演技をしていただけ？　和隆がそういう風に思いたかっただけ？

いや、全部が全部嘘演技という事もないだろうが、無理をしているたのは確かだろう。

「春川……」

和隆は痛ましげな声を出した。

頭を俯かせて、長い前髪で顔を覆い隠そうとしている遥のことを見詰める。

遥にとってこの貞子のように長い黒髪は、『他人の視線』から自身を守るための盾だったのだろうか。一種の防御壁だった。心の壁。

……そこまで考え、和隆はふとある疑問に思い至った。

彼女は、自分が彼女を見詰めるその視線をも、恐怖に感じていたのだろうか？

和隆はそつと息を吐き出し、気まずげに口を開いた。

「……ごめんな、気付いてやれなくて」

たぶん彼女は、人前というか、人が大勢いる所が苦手だったはずだ。苦痛すら感じていたかもしれない。

それなのに自分は、良かれと思って好き勝手に彼女を色んな所に連れ回してしまった。

「……お前そんな事で悩んでたんだな」

和隆は腕を伸ばし、遙の頭を撫でた。

そういう弱み、悩みを人に打ち明けるのはかなり勇気がいっただろう。

「今まで気付いてやれなくてごめん。話してくれて、ありがとう」
今まで一人で辛かっただろうな、よく頑張ったなと、彼女の頭を優しく撫でる。

「んっ……」

遙は頭を撫でられながら、さらに顔を俯かせた。照れたように車イスの上で小さくなる。髪の毛の隙間から覗く彼女の頬は、ほんのりと赤く染まっていた。

「っーかお前、そんな重大な悩みがあつたんなら言えよ。話せよ。相談しろよ」

和隆は半ば逆ギレ気味に言った。

頭を撫でる手に力を込めて、そのまま下にぐぐぐつと彼女の頭を押し込んでいった。

「ん……あ、あれ……？」

慰められていると思っていいたら、いきなりのこの仕打ち。遙は乱暴にぐいぐいと頭を押されながら、戸惑ったような声を上げた。

「ちょ……痛い、痛いよ、赤坂くん？」

和隆はその声を無視して怒ったように言った。

「なんで言わないんだよ、一人で抱え込んでんじゃねーよ」
お前も気付いてやれよ、お好み焼きを食べさせてもらって浮かれてんじゃねーよちくしょうめ、と自分を罵る。間拔けな自分に腹が立った。

頭を鷲づかみにされながら、遙は困ったような表情を浮かべた。
「いや……だから今、こうやって赤坂さんに話してるんやん？」
「いや、まあ、そうだけど。それはそうだけど。もっと早く言え、馬鹿」

思わず馬鹿とまで言っていた。

秘密を打ち明けてくれたのは嬉しかったけれど、どうせならもっと早く言ってほしかった。

もっと早く相談しろよ。頼ってこいよ。

そうしたら自分だって色々と手を貸して、力になれたかもしれないのに……。

和隆は自分の手元を見下ろした。こんな状況で、俺はなんで散髪用のハサミなんて持っているんだよと、自身にツツコむ。

遙は微笑しながら、恐縮するように謝った。

「ごめんね、余計な心配かけちゃって」

そして照れくさそうに頬をかきながら、言葉を続けた。

「突然こんな話してごめん。心配してくれてありがとう。でも、もう大丈夫。その問題なら……うん、解決したから」

「……えっ？」

和隆は呆気にとられたような顔をして尋ね返した。

「か、解決したんだ？」

「うん」

あまりに急転直下な解決ぶりに、和隆は拍子抜けしてガクツと椅

子からずり落ちかけた。

「な、治ったの？ 視線恐怖症？」

「うん、まあね」

彼女はあっけらかんと頷いた。

話している時の彼女の感じからして、今も視線恐怖症を絶賛発病中なのかと思っていた。

しかし、ずいぶんとあっさりと解決したんだな？ 恐怖症や神経症なんて、そんな簡単に治るものなのか？

「まあねえ、いつまでもうじうじと思い悩んでも仕方ないしね」

遥は何かを吹っ切ったような、さっぱりとした表情をしていた。

俯きがちになっていた顔を持ち上げ、パツと勢いよく髪を払う。長い黒髪が、鳥の翼のように彼女の背中中でふわりと大きく広がった。

「視線恐怖症といっても予備軍というかもどきというか、そういう軽いものやったからね、私の場合は。ちょっと神経が過敏になっただけ、人から注目されるのが苦手だった、っただけで」

「そうなのか？」

和隆は安心したようにほっと胸を撫で下ろした。

「なんだよ、この野郎。心配させやがって」

和隆はもう一度彼女の頭を撫で回した。わしゃわしゃとその髪を引つかき回す。

「あはは……心配かけてごめんね？」

彼女は気恥ずかしそうに小さくはにかんだ。

何にしろ、視線恐怖とやらが治って良かった。本当に良かった。てつきりこのまま鬱イベント、引きこもりルートに突入かと思ったよ。

……いや、それとも和隆に心配をかけないようにと、もう治ったと強がっているだけか？

遙は自分の顔を覆わんばかりに伸びた長い前髪をつまみながら言
った。

「髪の毛で視界を覆い隠して見たくないものを見ないようにしてい
ても、それはたんに問題から逃げているだけやしね。問題の解決に
はならない」

「まあ、そうだな」

「それに、分かったから」

「分かった？」

和隆は首を傾げて尋ねかけた。

「私はずっと、人から見られるのが苦手だった。人の視線が怖いと
思っていた。でも赤坂くんはずっと私のことを気にかけてくれてい
て、ずっと見守ってくれていて……。君が私を見詰めるその目は、
その視線は……。全然嫌じゃなかった。怖くなかったよ」

遙まっすぐに和隆の目を見詰め返しながら言った。

じっと視線を外さない。

「すごく温かくて安心出来て……。全然、怖くなかったよ」

そして照れたように頬を赤らめ、彼女はにこりと微笑んだ。

「赤坂くんだけじゃない。この間のお好み焼き屋のおじいちゃんや、
渡辺くんや、宇津見くんや、鶴木さんや……。他にもたくさん、世
の中には偏見を持たずにまっすぐに私のことを見てくれる人もいる。
それなのに、私だけうじうじして視線を逸らしていたら、失礼やも
んね」

遙はそこでいったんセリフを区切り、言葉を続けた。

「うん。私もすっかり、向かい合っていかなくちゃ！」

遙は「やるぞー！」という風に、力強い口調で語った。

凜と背筋を伸ばして、覚悟を決めたように自分自身にうんと頷く。
ぎゅっと胸の前で両手を固める。

「あ、それと……」

思い出したように遙が付け加えた。

「赤坂くんが私のことを色んな所に連れて行ってくれたこと……あれは本当に、楽しかった。嬉しかったよ。だから気にしないで」

「……うん。分かった」

和隆は小さく頷いた。

「というわけで、私は今日、髪を切ります！」

遙は選手宣誓をするスポーツマンのような健やかさで宣言した。車イスの上で、ピンと空高くに片手を掲げる。

（なるほど、そこでヘアカットに繋がるのか……）

和隆は手の中の美容ハサミを見下ろし、納得したように頷いた。

遙にとってこの伸ばしっぱなしの長い髪の毛は、他人の視線を恐れる気持ちの表れであり、自身を守る防御壁だった。

拒絶の象徴。

しかし今、彼女はその髪を切ろうとしていた。

ケーキ屋さん近くの美容師のせいで一度は諦めてしまったけれど、もう一度チャレンジしようとしている。

これはちょっとした、歴史的瞬間なのではないだろうか？

遙にとって髪を切るという事は、ある種の決別の儀式なのだろう。髪型が変われば、気持ちも変わる。鏡を見るたびに昨日までの自分とは違う自分と向き合うことになり、気持ちもシャキッとなる。

昨日までの私にサヨナラ、というやつだ。

過去からの脱却。

今の立ち位置から一歩前に踏み出すための、小さなきっかけ。その通過儀式。

遥は一人で悩み、一人で答えを出していた。

自分の中の弱さ、脆さと向かい合い、「いつまでもこのままではあかん！」と一人で答えを導き出していた。

自分を覆う長い髪の毛を切り落として、人と向き合っていく決意をした。世間に真っ向から立ち向かっていく決意をした。

彼女の敵は『他人の視線』なんていうひどく漠然としたもので、およそ勝ち目のある戦いではなかった。

遥自身がどういう心構えでいようが、そんなこととは無関係に、世間の人々は身体障害者である遥のことを見て、色んなことを思うだろう。色んな目で、彼女のことをじろじろチラチラ見るのだろう。それは哀れみを含んだ同情的な視線だったり、蔑みを含んだ差別的な視線だったり……。

それでも彼女は逃げることを止め、まっすぐにこの世界を見据えていくという。

この、ろくでもない世界を。

和隆は改めて遥のことを見下ろした。

車イスの女の子。

(こいつは強えなあ……)

改めて、この子は強く気高く孤高だなと思った。

しかし、彼女の決意のほどは分かったけれど、そんな重大なことを自分何かが引き受けていいのだろうか？

今更ながら、遥の髪を切るという事に対して不安になって来た。ヘアカットに失敗したらどうしよう？ 余計に人からじろじろ見られるようになり、視線恐怖症が再発、悪化するかもしれない。

つか、なんで俺に切ってくれなんて頼むんだよ。

和隆はもう一度確認してみた。

「本当に、俺がお前の髪を切っていいの？」

心機一転、再出発をしたいというのなら、どこぞの美のプロフ

エッショナルルたちに頼んだ方がいいのではないだろうか？

遙は答えた。

「赤坂くんのおかげで、髪を切る勇気が出たんよ。赤坂くんが『春川は短くしても似合うんじゃないか？』って言ってくれたから、私も踏ん切りがついた。……だから他でもない、赤坂くんに切って欲しい」

まっすぐに見詰められ、お願いしますとぺこりと頭を下げられた。
(そういや、そんなことも言ったなあ……)

何気なく言ったセリフのせいで、まさかこんな展開になるなんて「赤坂くんがセツトしてくれた髪型なら、私はどんな風になっても文句は言わないから」

「んなこと言われてもなあ……」

和隆はどうしたもんかと、ポリポリと頭をかいた。

ずいぶんと信頼されてしまったものだ。こっちは散髪用の美容ハサミなんてろくに握ったことのない、ズブの素人だというのに。

しかし、自然と嫌な感じはしなかった。

むしろ誇らしくもある。

「しょうがねえなあ……」

和隆はふうと息を吐き出した。

そこまで言うなら仕方がねえ。こっちも覚悟を決めよう。

和隆は気合を入れるように腕まくりをして、シャキーンと両手にくしとハサミを握った。

「そこまで言うなら仕方がねえ。こうなったら腕によりをかけて、お前の頭をカリスマ美容師も真っ青のモテカワ愛されキューティヘアーにしてやるぜ」

4 - 6 ・青空美容室

— 7 —

和隆は遙にヘアカットを頼まれた後、美容院に赴いて髪の毛の力ツトの仕方などを学んでいた。

もちろん遙のことを追いついたケーキ屋さんの近くの美容院ではなく、昔から和隆がお世話になっていた顔馴染みの美容院である。

「ちよつと知り合いの女の子の髪の毛を切つてやる事になったんでヘアカットのコツとか教えて欲しいんですけど……」

そう言つて訪ねると、美容師のお兄さんは不思議そうな顔をしていた。

「君がヘアカットをするの？ その子をここに連れてくるんじゃないくて？」

「なんか美容院恐怖症らしくて」

その時は視線恐怖症云々の話を知らなかったので、そう語る和隆の口調も戸惑い気味だった。

お兄さんは「ふーん……？」と首を傾げていたが、親切丁寧にハサミの扱い方やカットの仕方を教えてくれた。その時店に来ていたお客さんにも協力してもらい、横で見学、実演までしてもらった。

ハサミを動かしながら、美容師のお兄さんは和隆に言った。

「事情はよく分からないけれど、君にヘアカットを頼んだという女の子は、よほど君のことを信用していたんだろうね」

「え？」

「異性に頭や髪の毛を触られるのは苦手だ、嫌だつていう女性は多いからね。美容師にも触られたくないって人もいるくらいだし。な

のに君は、その子にヘアカットを頼まれたという。だから……ね？」
お兄さんはパチリとウインクをしてきた。

「はあ……？」

分かったような分からないような顔をして答える和隆。

「まあとにかく、髪は女性の命だからね。失敗のないよう、慎重に丁寧にかットしてあげてね」

彼はそう言つて、にこやかに微笑んだ。

その後、新米美容師が練習に使うという首だけのマネキンとカットウィッグを借りて、自宅でも練習してきた。

「あんた受験勉強もせず何やってんの？」

母親に見つかり「なに？ 美容師になるつもりなの？」などと色々突っ込まれたりもしたが、右から左に聞き流しておいた。

「そういえば母さん、最近髪切つてなかったよな？ 俺がカットしてやろうか？」

実験台にしてやろうと右手に美容ハサミ、左手にすきバサミを持つてバルタン星人のようにフオフオフオと追いかけて回したのだが、結局は逃げられてしまった。

そんな事がありつつ、和隆は今日という日を迎えていた。

目の前に、遥の長い黒髪がある。

色々と下準備をしたとはいえ、プロの美容師のようにうまく出来るとは到底思えなかった。

しかし、これは遥たつてのお願いなのだ。

なればこそ。自分はただ全力を尽くすのみである。

和隆はハサミやくしと一緒に持ってきた白いシルクのシーツをパツと広げ、遥の首に巻きつけた。彼女の車イスごと、その体を白い布で覆い包む。

「大丈夫？ きつくない？」

「うん、平気」

白いシーツをレインポンチョのように纏った彼女は、なんだかデカイてるてる坊主のようだった。

和隆はちらりと空を見上げた。

木々の葉っぱの隙間から、午後の柔らかな木漏れ日が差している。清々しい程の青空。風もほとんど吹いていないし、突然の突風にヘアカットを邪魔されることもないだろう。

公園の片隅で着々と散髪の準備を進める二人。

そんな二人を見て、公園の向こうでバドミントンをしていた少女たちが、「あの人たちは一体何をしているんだろう？」という顔をしてこちらを眺めていた。

和隆は美容ハサミをシャキンと構えて、遥の後ろに回り込んだ。本職の美容師のような顔をして遥に問いかける。

「ようこそ青空美容室へ。お客さん、今日はいかがしましょう？」

「お任せで」

車イスにゆったりと腰掛けた遥は、のん気な口調でそう言った。

「お任せって言われてもな……」

和隆はむうと困ったような表情を作った。

「具体的にどんな風にしたいとか、タレントの誰それみたいにして、とかないのかよ？」

「いつても、こっちは付け焼刃の知識とスキルしかないのだ。パーマ機もないし、難しい髪型をリクエストされてもそれを忠実に再現できる自信なんてなかったけれど。」

「この体になって以来、ヘアスタイルの事とかファッションの事とかからは遠ざかってたからね。というのが流行ってるとか、全然

分らないんよ。適当に私に似合いそうな感じにしてくれたら助かる」
「適当に、って言ってもなあ……」

こっちは素人なのだし、シザーハンスのようにバカスカ刈っていいわけにもいくまい。

「うーん、どうすっかなあ……」

和隆は腕を組んで唸った。

自分のカットの腕と相談しながら、彼女の頭をじっと見詰める。
彼女にはどんな髪型が似合うだろう？

和隆はふと思いついて提案した。

「……いつそバリカン買ってきて坊主にするか？」

遙は呆気にとられたような顔をして聞き返した。

「ぼ、坊主……？」

それならば頭に沿ってバリカンを動かしていただけだし、自分でもパーフェクトに出来る気がする。

ある映画ではナタリー・ポートマンやデミ・ムーアも坊主頭にしていたし……。

丸刈りという選択肢。

無くはない！

「坊主はいいぞ。頭洗う時楽だし、寝癖や髪型に悩まされることもないし」

そう力説すると、遙は眉間に深いシワを寄せ、とても気難しげな表情を作った。人非人でも見るような目で見詰められる。

「……さすがにそれはごめん、止めてください」

丁重にお断りされてしまった。

警戒するように、じりじりと車イスを後退させて和隆から遠ざかっていく。

「分かってるよ、冗談だよ。そんな離れていくなよ」

和隆は慌ててフォローを入れた。

「ま、まさか赤坂くん、坊主頭の女の子フェチとか……？」
「違いーよ。どんなフェチだよ」

冗談はさておき、とりあえず髪の長さだけでも決めておくか。

和隆は指をチョキにして、適当な位置で遥の髪の毛を指で挟んだ。
「長さはこれくらいにする？ 毛先を整えるくらいでいい？」

あまり大胆に手を出して失敗しても後が怖いと、和隆は申し訳程度に髪の先っぱをつまんだ。

しかし、遥がその手をずいーっと上の方に持ち上げた。

「もつと上、これくらいで」

毛先が肩につかないくらいの、ショートカットの位置まで和隆の手を持ち上げる。

和隆は渋い声を出した。

「結構いくなあ。そんなに切っちゃっていいのかよ？ 一気に二十センチ近くも短くなることになるぞ？」

ショートカット好きの自分としては嬉しいけれど。

遥は気楽な口調で言った。

「このさいだから、バッサリいこうと思ひまして」

まあ、このヘアカットには「今までの自分と決別する」という意味合いもあるし、それくらい思い切った方がいいか。

「今までずっとロングでやってきたけど、赤坂くんも『短くしても似合うんじゃないか？』って言うてくれたしね。だからちよつと、思い切つてチャレンジしてみようと思つて」

遥はそう言つて、肩越しににこりと微笑みかけてきた。

和隆はポリポリと頬をかいいた。

そのセリフを言った本人としては、こうも何度も引き合いに出されるとなんだか照れくさくなってくる。

「どんだけそのセリフ気に入ってんだよ」

まさか彼女は、ショートカットの子が好きだと言った自分の好みに合わせて髪を短くしようとしている訳ではないだろうな？

まあ、それはともかく。

「そんじゃま、そろそろ始めますか！」

和隆は気合を入れ直し、ヘアカットを開始した。

霧吹きで彼女の髪を軽く濡らし、長い髪にくしを通して真っ直ぐに撫でつける。

彼女のストレートの黒髪は非常にサラサラとしていて、シルクのように手触りが良かった。一瞬、目的も忘れて髪を切るのがもったいなく思ってしまう。

とりあえずダッカルピンを使って、髪の毛をいくつかのブロックに分けた。

美容バサミを握り直し、そのうちの一つを手には握んだ。まずは失敗しても修正を効かせやすい後ろ髪から。

和隆はスーハースーハーと何度も深呼吸して精神を集中させた。マネキンのカットウィッグで練習はしてきたが、本物の人の髪の毛を切るなんて生まれて初めてのことだ。緊張する。

「……いきます」

和隆は爆弾解除をする爆発物処理班のような慎重な手付きで、彼女の髪に一投目のハサミを入れた。

息を止めて、ハサミを持つ手に力を加える。

——チヨキン。

抵抗なくハサミは入り、髪が切れた。

首に巻きつけたシートの上を滑り、遥の足元にパラパラと髪の毛の束が舞い落ちる。

「おおお」

和隆は感嘆の声を上げた。なんだか感動した。
なかなか楽しいな。

「よし、この調子で刈っていくぞ」

チヨキンチヨキンとハサミを鳴らす。購入したばかりのハサミは
面白いようによく切れた。

美容師のお兄さんの教えを思い出しながら、左右のバランスを
気にしつつ髪にハサミを入れていく。気分はカリスマ美容師だった。

鼻歌交じりに尋ねかける。

「かゆい所はございませんか？」

「それシャンプーの時に言うセリフじゃない？」

調子よくハサミを動かしていると、公園の向こうでバドミントン
をしていた少女たちが、いつの間にか和隆らの側にやって来ていた。
ボーイッシュな格好をした、キャスケット帽子を被った女の子。
リンゴのアクセサリーが付いたヘアゴムで、髪を二つ括りにした
女の子。

猫っ毛でふわふわとしたロングヘアの女の子。

見た所小学四、五年生くらいだろうか？

三者三様の装いをした少女が三人、公園で散髪している遙と和隆
のことを物珍しそうにじいーっと見詰めていた。

「こんにちは」

遙は頭を動かさないように目だけを動かし、少女らに声をかけた。
バドミントンのラケットを片手にした、キャスケット帽子の女の
子が話しかけてきた。

「なんでこんな所で髪を切ってるの？」

「ちょっとね。お姉ちゃんが美容院に行けなかったから、この人に切ってもらってるの」

遙はそう答えて、体を覆っている白いシーツをめくり上げた。ちらりと座っている車イスを見せる。

それを見た三人の少女たちは、お互いに顔を見合わせて頷いた。

「お姉さんのことは知ってるよ。すぐその大きな家に住んでるよね？ 学校行く時とか、よく見掛けてたから」

「そっか。あなたたちもこの近くに住んでるの？」

「うん」

「あの……」

リンゴのヘアゴムをした女の子が、おずおずと尋ねてきた。教室で発言する時のように、顔の横に小さく手を挙げて質問する。

「あの……車イスでの生活って、やっぱり大変ですか？」

「まあ、それなりにねー。大変だね」

遙は気軽い口調で答えた。保母さんのような優しい口調で受け答える。

遙のことを気さくで人当たりのいいお姉さんだと判断したのか、少女たちは色々と質問をしてきた。

「どうして車イスに乗るようになったの？」

「立つことは出来ないの？」

「その足って、治らないんですか？」

などなど、無遠慮に興味津々に尋ねかけてくる。

遙も遙で、それらの質問に律儀に答えていた。

「昔ちよっと、自動車事故に遭ってしもてね」

「手すりがあれば少しは立てる、くらいかな。歩けはしないけど」

「うん、多分。完治は難しそうやねー」

後ろで両者のやり取りを聞いていた和隆は、半ば呆れ顔をしながら口を挟んだ。

「……遠慮なしだな、君たちは」

何度か道で見かけたことがあるとはいえ、ほとんど初対面だっというのに少女たちには遠慮がなかった。

一般的な大人たちと違って、少女たちには変な気負いや躊躇がなかった。偏見も差別意識もなく、ただただ純粋な瞳をして車イスの彼女に質問を投げかけてくる。

キヤスケット帽子の女の子が頭をかきながら謝った。

「ごめんごめん。お姉さんのことは毎日見掛けてたしね、一方的に知ってる気になっちゃってた。……ずっと気になってたから」

「気になってた？」

「車イスで移動するの大変そうだなあ、って」

三人の少女たちは気難しげな表情を作った。お互いに顔を見合わせて「ねっ」と頷く。

彼女たちはずっと、車イスの遥を見かけては、気にかけていくれたらしい。

少女は真摯な目をして言った。

「今まで機会がなかったけど……一度お姉さんとお話がしてみたいな、って思ってたんだ。私たち」

「お話？ 私と？」

遥が首を傾げて尋ね返した。

ふいにキヤスケット帽子の少女は言葉を止めて、遥の後ろにいる和隆のことを見上げてきた。

話を変えて、気さくな口調で尋ねてくる。

「お兄さんはプロの美容師志望の人なの？」

「いや、ただの素人」

「ふーん、そうなんだ？」

「だからあんまり茶々入れてくるなよ。手元が狂うから」

和隆は遙に正面を向かせ、中断していたヘアカットを再開した。その髪に手を添えて、ハサミを入れる。

公園で散髪している二人の事を見詰めながら、少女が小首を傾げて質問してきた。

「ところでさあ、二人は恋人同士なの？」

「うおい!？」

言った側から、少女は茶々を入れてきた。

突然の質問に驚き、和隆はあやうく自分の指をちょん切る所だった。

「な、な、なんだよ、突然？」

いきなり何を言い出すんだと狼狽しながら、和隆は尋ね返した。

「二人はさ、この間おじいちゃんの所のお好み焼き屋さんで、一緒に食事をしてたよね？」

「え？」

リンゴのヘアゴムをした女の子と、猫っ毛の少女もそれに追隨した。

「一つのお好み焼きを二人で分け合ったりして、すごく仲良しさんでした」

「アツアツだったよね」

少女らは「ねー」と声を合わせて、仲良く頷き合った。

和隆は少女らのことを見下ろした。

（ああ、こいつら……）

どこかで見たことのある女の子たちだなと思ったら、お好み焼き屋さんで一緒になった小学生の一団だ。お好み焼きを焦がして、「おじいちゃん助けてー!」と騒いでいた子供たちである。

少女らは改めて二人に質問してきた。

「で、二人は付き合ってたの？」

少女らはニコニコと無邪気に笑いながら、「そことことどーなのよ、お兄さん？」と、親戚のおばちゃんのような図々しきで尋ねてきた。

和隆は呆れたような表情をして子供たちを見下ろした。

最近のガキは遠慮もクソもねえな、と改めて思った。いつそその図々しさ、遠慮のなさが清々しい程である。

遥が若干頬を赤らめつつ、困ったような顔をして答えた。

「違うよ。私たちはただの……クラスメート、お友達だよ」

ただのクラスメート。

お友達。

イントネーション的に考えて、彼女の性格からして「赤坂くんが私の恋人だと思われたら彼に迷惑」という気持ちで言ったのかもしれないけれど……軽くヘコんだ。胸にグサリときた。

まあ実際の所、自分たちの関係はただのクラスメート、お友達なのだけ。

「ふーん？ そうなんだ？」

少女たちはいまいち納得がいかないというような顔をしていた。小首を傾げる。

「毎日一緒に登下校してたし、てつきり恋人同士なのかと思ったよ」
間山の一件以来、和隆はほぼ毎日遥と一緒に登下校していた。彼女を家まで送り迎えしていた。

学校までの道のりには緩やかとはいえ坂もあるし、一緒に行動していれば小さな段差や学校の階段などのフォローも出来るし。

リーダー格のキャスケット帽子の女の子が言葉を続けた。

「お兄さんは毎朝高校のある方向からやって来て、お姉さんと合流して、また元来た道に戻って行ってたからね。たぶんわざわざすこ

い遠回りをして、お姉さんのことを送り迎えしてたんだよ」
少女の言葉に、遙が「えっ？」と声を張り上げた。

体をひねって後ろにいる和隆のことを見上げてくる。

「赤坂くんの家って、こっちの方にあるんじゃないの？」

「ん？ ああ……」

和隆は曖昧に答えた。困ったようにポリポリと頭をかく。

そんな和隆の様子を見て、遙が察した。

「通学路の途中に私の家があるんじゃないかと思ってた……。赤坂くん、わざわざ遠回りをして、私の登校に付き合ってくれてたの？」

「ん、いや……まあな」

和隆はバツが悪い思いをしながら頷いた。

和隆の家は、遙の家から見て学校を挟んだ向こう側にあつた。

なので和隆は毎朝、一度学校に登校してその横を素通りし、遙の家の前で彼女と合流して、そこからUターンして遙の車イスを押しながら再び学校に登校する、という面倒な生活を送っていた。

彼女がその事を知ると気を遣わせてしまふと思って今まで黙っていたのだが……。

真実を知った遙は、ひどく申し訳なさそうな顔をして恐縮した。

「そつか……わざわざごめんね。私のために……」

しょんぼりとした表情を作る。

「私知らなくて……」

「い、いや、遠回りっていつでも別に大した距離じゃないし。気にすんなよ」

俺も朝のウォーキングになるし、などと言って適当に誤魔化した。

和隆は少女らを見下ろして質問した。

「ついにお前たちは、なんでそんなことまで知ってたんだよ？」

なんだこいつらは？

どこぞのスパイか？ マタ・ハリか？

「私たちは小学校に行く時、いつもこの公園に集まって集団登校をしているからねー。他の子たちを待っている間、よくお兄さんのことを見かけてたんだよ」

和隆は思い出しながら呟いた。

「ああ……。そういや、よく小学生の群れと行き合ってたな……」

「そうやって遠回りをしてまで一緒に登校してくらいだし、だから私たちは、二人は付き合ってるんじゃないかと推理したわけだよ」

少女はふふんと胸を張っていた。

「うるせえ、馬鹿。勝手に推理してんじゃねーよ」

なんだか気恥しくて、和隆はぶつきら棒に言い返した。

しかも外してるじゃねーか。

「こっちは慣れない散髪で忙しいんだよ。お前らなんかに構ってる暇はないの。遊びたいなら向こうで遊べ」

和隆はうるさい子犬でも追い払うように、しっしつと手を動かした。

しかし、それにもめげず、少女たちは和隆らの側から離れようとはしなかった。人懐っこく、しっこくまとわりついてくる。

じーっと横から見詰められた。

「なんだよ、さつきから？」

キャスケット帽子の少女が言った。

「前から思ってたんだけど、お兄さんって何かに似てるんだよね。なんだろう？」

「ああ？」

少女は何かを思いついたように、ポンと手を打った。

「ああ、分かった。ハチ公だ！ 忠犬ハチ公！」
リンゴのヘアゴムの子と、猫っ毛の少女も「ああ、それだそれだ」と納得したように頷いていた。

和隆は訝しげな顔をして尋ね返した。

「はあ？ なんだよ、ハチ公って？」

「お兄さんはいつも、お姉さんが家から出て来るまでブランコの所で待っていたでしょ？」

「だからなんだ？」

「そういう所がハチ公っぽい」

少女はイタズラっ子のようにニツと微笑んだ。

「お姉さんが出てくるのを待つてる間はつまらなそう、眠たそうにブランコに腰掛けてるんだけど、お姉さんの姿を見つけるとシャキッと立ち上がって、『おーす、春川ー！』とか言って嬉しそうに駆け寄って……」

「まるで、ご主人様を毎日駅に送り迎えしていたハチみたいですよ」

「お兄さんに尻尾が生えていたら、きつとちぎれんばかりにブンブンと振っていただろうね」

少女たちはニヤニヤと笑いながら、お互いに顔を見合わせて「ねー」と頷き合っていた。

「よっぽどお姉さんと一緒に登校するのが楽しかったんだろうね。」

「いつも上機嫌に車イスの後ろを押してたし」

「いつもかわいいかわいいと思って見てました」

「胸キュンだよ」

胸の前で両手を合わせてハートマークを作る。

「う、うっせー、馬鹿！」

和隆は小学生の女の子たちに冷やかされてたじろいでいた。

まさかそんな所まで見られていたとは……。照れくさくて少々赤面する。

うるせー黙れと焦ったように乱暴な口調で言う和隆のことを見て、少女たちはさらに調子に乗った。

きゃーきゃーとかしましく黄色い声を上げる。

「あらやだ、お兄さんったら照れちゃってかわいいー！」

少女たちに囲まれて、ぬいぐるみか何かのようにかわいいいと言つて頭を撫でられそうになった。

「う、うつせえ、こつち来んなつ！ ええい、触んじゃねーよ！」

和隆は慌ててそれを邪険に振り払った。

小学生相手に本気で怒る。何だか余計に気恥しい気分になり、顔が熱くなった。顔から火が出そうだ。

お好み焼き屋のおじいちゃんにからかわれたり、小学生に冷やかされたり……。ここの所ろくなことがねえなと思った。

まったく、なんなんだこいつらは。まさかじいちゃんの差し金じゃないだろうな？

これ以上何かを暴露されても困ると思い、和隆は今度こそ少女らを追ひ払いにかかった。

「もお、ぺちやくちやとやかましいなあ。お前ら本当、どっか行けよ」

うるさい蠅でも追ひ払うかのように、ぞんざいな手付きでしつしつと手を振る。

少女らはブーブーと不服そうに口を尖らせた。

「なんだよ、いけずー」

「まったく、素直じゃないんですから」

「そんなんだから、いつまで経つても『お友達』止まりなんだよ」

言いたい放題、好き勝手に揶揄されてしまった。

「うるさいわ、ボケー！」

和隆は巻き舌調に叫んだ。今度こそブチ切れる。

「いい加減にしないと、お前らの頭も刈っちまうぞ！」

チョキンチョキンとハサミを打ち鳴らしながら、シザーマンのよ
うに少女たちを追いかけ回した。

「きゃーっ、怒ったー！」

少女たちは楽しげな声を上げて、頭を押さえて駆けていった。

— 8 —

「つたく……」

和隆は腰に手を当てて、逃げて行く少女たちの後ろ姿を見送った。疲れたように、ヘアと深いため息をつく。

「なんだったんだ、あいつらは？」

「さあ……？ でも、かわいい子たちやったね」

遥は自由気ままに駆けていく少女たちの後ろ姿を眺め、愉快そうにニコニコと微笑んでいた。

「かわいい？ あれがあ？」

散々茶化された和隆は、ひどくうつとおしそうな表情を作った。

閑話休題。

和隆は遥のヘアカットに戻った。美容ハサミを持ち直す。

「しっかし髪の毛の量が多いな、お前」

「そう？」

頭が重いというか、切っても切っても彼女の髪の毛の量は減らなかった。既に二人の足元には大量の毛が散らばっていた。

ある程度全体を短くし終えた後は、全体のボリュームを抑えるためにすきバサミを入れていった。

今のところ目立った失敗もなく、ヘアカットは順調に進んでいた。

「さて、と……」

和隆は一息ついて遥の正面に回り込んだ。

とりあえず後ろやサイドは何とかあったが、問題は前髪である。前髪を失敗したら、今までの全てが台無しになってしまっただろう。美容師のお兄さんからも「前髪は特に注意してね」と忠告されていた。

「どうすつかな……」

どうハサミを入れたらいいものかと、美容師のお兄さんの教えをブツブツと呪文のように復唱したり、テーブルの上に置いたヘアカットの入門本と何度もにらめっこをした。

遥の前髪を持ち上げたり、撫でつけたりして、眉間にシワを寄せながら真剣な顔をして悩む。

そんな和隆の様子を見上げながら、彼女はくすりと小さく微笑んだ。

「赤坂くん、変な顔してる」

白いシーツをてるてる坊主のように纏ったまま、彼女はのん気に屈託なく笑っていた。

「笑ってる場合かよ。ここを失敗したら、すげー悲惨なことになるんだぞ。お前の頭が」

遥は楽観的な口調で答えた。

「まあ、よほどの事がない限り大丈夫なんじゃない？」

「そんなもんか？」

「リラックスしないと、出来るものも出来なくなってしまうよ」

「それもそう……なのか？」

「リラックス、リラックス。顔が怖くなってるよ？」

彼女はスマイルと言うように、口の端に指を当ててニコツと笑ってみせた。

和隆はアドバイスされた通り、リラックスすべくふうと息を吐き出してみた。肩の力を抜き、腕を回したりして心を和らげる。慣れない作業をしていて、肩がすごく強張っているのが分かった。

「よし、いくか」

余計な力も抜けてリラックス出来たことだし、和隆は気を取り直してハサミを握った。

その前髪にハサミを入れる。

——チヨキン。

ちよつと嫌な音がした。

「あつ……」

和隆の手が止まった。

思わず口をぽかんと開けて、その場に棒立ちになる。

「え、何……？ 何か起きたの？」

今まで安穩としていた遙も、これには不安げな表情を作った。和隆のことを、上目遣いにこわごわと見詰めてくる。

「も、もしかしてアレですか……？ 失敗しましたか？」

「いや……ま、まあ待て。大丈夫だ。計画通りだ。万事順調です」
内心の焦りを押し隠しつつ、和隆はフォローを入れた。

「ほ、ほんまに？」

「ほんまです！ すべからくほんまです！」

思わずおかしな関西弁で受け答えをする。

「ほんまにほんま？ とても大丈夫とは思えない『あつ……』 やつてんけど……」

遙が車イスから身を乗り出して、テーブルの上に置いてあつた鏡を覗きこもうとしたので、和隆は慌ててそれを体でディフェンスした。背後の鏡を体で隠す。

「あ、あんまり動くなよ！ 手元が狂う」

「ちょっと鏡を見たいんやけど」

「それはほら……完成してのお楽しみという事で」
言いながら、和隆は後ろ手にぱたりと鏡を伏せた。

和隆は心の中で呟いた。

（やべえ、前髪ぱつさり行き過ぎた……）

本当は少しずつハサミを入れていかなければならなかったのに、
ちよつと気を抜き過ぎて、思わずぱつさりと一太刀でいつてしまっ
た。

和隆は二、三步下がって遙の頭を見詰めてみた。

彼女の前髪は、まるで日本人形のように一直線になっていた。

前髪ぱつつん。

子供っぽく見えるというか……幽霊の貞子が座敷わらしに進化し
た、みたいなことになっていた。

自分のせいとはいえ、これはひどい。

「ぶっ……!!」

思わず嘖き出しかけた。慌てて口元を押さえて笑いを堪える。

遙が不安げというか、泣きそうな表情をしながら尋ねかけてきた。

「ねえ、本当に私の頭は大丈夫なの？」

「う、うん……。大丈夫だ、問題ない」

和隆は笑いを噛み殺しながら頷いた。

それでも笑いを堪えきれず、ひくひくと口の端が引きつってしま
う。

「なんか赤坂くんの肩、小さく震えてるんやけど……」

「ごめん……や、なんでもないっス……」

やべえ、ツボった。

ヤバイ、前髪ぱつつんの遙ヤバイ。

なんだかすごく幼く見えて、かわいかった。
記念に写メでも撮っておくか。

しかし、いつまでも笑ってはられない。

（さて、どうするべ……？）

一直線に切ってしまったとはいえ、彼女の前髪は元々ひどく長かったし、まだリカバリーは効きそうだった。

まだだ、まだ終わらんよ。

とにかくここから何とか挽回しよう。

ハサミを真横から入れたのがそもその間違いだった。和隆はハサミを縦に持ち直し、ちょこちょこ少しずつ彼女の前髪をカットしていった。

さらにすぎバサミをも活用して、前髪を自然な感じにばらけさせようと試みた。ぱつつんになってしまった前髪を全力で誤魔化しにかかる。

ここまでくると、ヘアカットというよりオペだった。

悪戦苦闘、思考錯誤の末、なんとかヘアカットは終了した。

「うーん……こんなもんか？」

和隆は自信なさげに言いながら、静かにハサミを置いた。

とにかく、自分出来る事は全てやった。彼女の頭をばーっと引っかき回して、細かい髪の毛の破片などを払い散らす。

手ぐしで髪の毛を軽く撫でつけた後、伏せておいた鏡を遙に手渡した。

「とりあえずこれで完成なんだけど……どうかな？」

「拝見させていただきます」

遙は鏡を受け取り、黙って自分の頭をじーっと見詰めた。前髪をパラパラと払ったり、首をひねったりしてサイドの様子を確認する。

しばしの間、二人の間に静寂が訪れた。

和隆はドキドキとしゃちほこばりながら彼女の感想を待った。緊張の瞬間である。気分は面接試験中の就活生だった。

遥はうんと大きく頷き、明るい声で言った。

「すごくうまく切れてるやない。うん、大変気に入りました！」

「マジか？」

和隆は自信なげに聞き返した。

「なんなら今からでも美容院に行ってもいいんだぞ？」

遥はふるふると首を振った。

「うつん、この髪型が気に入ったから……。これでいい」

和隆は一步後ろに下がって、改めて大胆にヘアチェンジした彼女の頭を眺めてみた。

背の肩甲骨ほどまでであった彼女の長い髪は、今やばつさりと切り落とされていた。肩より少し上の長さの、カジュアルな感じのショートカット。

頭が軽くなり、前より明るく活動的な感じになっていた。

前髪に隠れがちだった顔も、ちゃんと表に見えている。

自分で言うのもなんだけど、初めてのヘアカットにしてはなかなかうまくいったと思う。

最初はやつちまったと思った前髪もちゃんと修正して自然な感じに仕上がったし、童顔な顔の作りをした遥にはショートの髪はよく似合っていた。すきバサミ等で髪の量を減らしたおかげで、もっさりとし重くなりがちだった黒髪も空気感のあるふんわりとしたものに仕上がっている。

髪型が変わるだけで、ここまで見た目の印象も変わるものなのか。つい先程まで貞子のように雑然とした頭をしていたのが嘘のよう

だった。自分でカットしたものとはいえ、思わずちよつと見惚れてしまう。

和隆は大いに頷いた。

「うん……似合ってるよ」

さすがショートカット属性歴十余年の俺。ショートカットの髪型に關してだけは外さない。

遙はくしゃくしゃと髪に手ぐしを入れた。水浴びをした犬のようにふるふると頭を振ったりする。

感動したように言った。

「おおー、頭が軽い！」

首に巻いたシーツを取り去り、遙は改めて鏡の中の新しい自分を見詰めた。

「すごいね、これが私……？」

信じられないという風に、ぼおつと鏡を見詰めている。

今までなんとなく垢抜けず野暮ったい雰囲気を出していた車イスの少女も、重たい髪をばつさり切ったことで洒脱な感じになっていた。

和隆は改めて思った。

いやあ、やっぱりいいわ。ショートカット。

かわいさ百倍増し、という感じである。

露わになった白い首筋が眩しかった。

遙が和隆のことを見上げながら言った。

「髪切るの上手やったんやね、赤坂くん。プロになれるよ」

「それほどでもねーよ」

和隆はふふんと得意気に鼻の頭ををこすった。

それもこれも、丁寧へアカットの仕方や仕上げのコツを教えて

くれた美容師のお兄さんのおかげである。後で菓子折りでも持ってお礼に行こうと思った。

遙は車イスを動かし、和隆の方に向き直った。

まっすぐに和隆の事を見詰めながら、お礼を言った。

「……ありがとうね。髪を切ってくれて」

もう、その目元が髪の毛に覆われて隠れることもなくなっていた。長いまつげ、綺麗なふたえの瞳が和隆の目にまっすぐに飛び込んできくる。

「ん。また何かあったら言えよ。力になるから」

「うん、ありがとう」

彼女はもう一度ありがとうと言って、にこつと爽やかに微笑んだ。まるで髪の毛と一緒に、今まで自分の内側に抱え込んでいたごちやごちやとした物も切り捨ててしまったかのように、彼女はすっきりとした表情を浮かべていた。

顔を覆っていた防御壁としての長い髪も無くなったことだし、これでもう、彼女は他人の視線から逃れられなくなった。

見たくないと思ったものでも、嫌でも直視していかなければならなくなつた。

ありのままに受け止め、立ち向かっていくしかない。

和隆はそつと手を伸ばし、彼女の頭を優しく撫でた。短くなったその髪に指をからませる。

「……頑張れよ」

和隆がそう言ってエールを送ると、彼女は「なんのこと？」と云つてとぼけたような表情を作った。
照れくさそうに、にへへと笑う。

ヘアカットが終わったと知って、先程の小学生の少女たちが戻ってきた。

新生ショートカットバージョンの遥を見て、少女たちは口々に感想を言った。

「お姉さん、よく似合ってるよ!」

「うん、前よりも良くなった!」

「そう?　ありがとう」

遥は前髪を弄りながら、気恥しげにはにかんでいた。

失敗しなくて本当に良かったと思いながら、和隆もうんうんと頷く。

いつの間にか、和隆の隣りにキャスケット帽子を被った女の子がこっそりと忍び寄っていた。ツンツンと肘先でつつかれる。

「やるじゃん、おにーさん」

「ん?」

「これでお姉さんの好感度もアップだね!」

パチリとおしゃまにウインクしてきた。

最近の子供は本当にませてんな、と思った。

「そいつはどーも!」

和隆は微苦笑しながら、大きな手で少女の頭をこねくり回した。

和隆は予め用意しておいたホウキとちりとりで散らばった髪の毛を集め、ゴミ袋に入れた。

「じゃあこれ処分してくるわ」

「うん」

ちゃんと後片付けをしておかないと、この大量の髪の毛を見つけた人は何事だと思っだろう。

ゴミを処分して戻ると、元いた場所から遙の姿が消えていた。木製のテーブルの上にハサミや畳まれたシャツなどが置いてあるが、遙の姿が見当たらない。小学生の女の子たちもいなくなっていた。

「あれ、どこ行っただんだ？」

和隆は首を傾げて辺りを見回した。

すると、公園の向こうから、パコーンパコーンとバドミントンの羽根を打つ軽快な音が聞こえてきた。少女たちの楽しげな笑い声が響いてくる。

見るとそこには、小学生に混じってバドミントンで遊んでいる車イスの女子高生の姿があった。

「行くよー」と言つて、遙がラケットを振ってバドミントンのシャトルを打ち出している。

和隆は半ば呆れたような顔をして呟いた。

「何やってんだ、あいつ……」

和隆はトコトコと少女らに近付いて行つた。

地面に描かれたコートの中で、元気にラケットを振り回している遙に尋ねかける。

「何やってんスカ、春川さん？」

「見ての通りの、バドミントンです」

彼女は「見て分からないの？」という風に言い返した。

「いや、まあ、それは分かるけど……」

「『二対二でバドミントンの試合をしたいんだけど、三人じゃ数が合わないからお姉さんも一緒にやらない？』って誘われてん」

和隆は呆れ顔を作つて尋ね返した。

「……で、そのお誘いに乗つたのか？」

彼女はあつけらかんとした口調で答えた。

「乗りました」

乗る方も乗る方だが、誘う方も誘う方だな……。

少女たちもよく、車イスの人間をバドミントンなんていうさりげに運動量の激しいスポーツに誘おうと思ったものだ。

その行動力というか積極性というか……その気負いの無さに少し敬服した。

腫れ物に触れるようにとまではいかないにしても、普通はそこまで積極的に車イスの人間に接していくことは出来ないだろう。

遙とペアを組んでいるキャスケット帽子の女の子が言った。

「今までずっと、私たちはお姉さんのことが気になってたんだよ。

車イスで移動するの大変そうだなあ、って。私たちに出来ることはないかなあ、って」

バドミントンは、遙に話しかけるためのきっかけだったらしい。

少女は遙の目を見詰めながら言った。

「私の家はすぐそこのご近所さんだしさ。何かあった時は……何も無くて、気軽に声をかけてよ」

反対のコートに立っているリングのヘアゴムをした女の子と、猫っ毛の少女も頭上でラケットを振りながら明るく追隨した。

「私たちでよければ、いつでも力になります！」

「うん。困った時はお互い様だからね」

遙は自分のことを視線恐怖症だと言った。

他人の視線が怖いと語った。

みんながおかしな目をして、私のことを見詰めてくると……。

しかし現在、目の前にいる少女たちの瞳にはひとかけらの悪意も偏見もなく、遙自身、そこに恐怖は感じてはいないようだった。

「みんな……」

じんと感動したように、少女たちの瞳を見詰め返している。

（なんだ、普通にいい子たちじゃないか）

和隆も少女たちのことを見直していた。

最初は「くそ生意気なガキ共だ」などと思ったりもしたが、なかなか感心な若者たちではないか。

キャスケット帽子の女の子が付け加えるように和隆に言った。

「何かあれば手を貸すよ。ついでに二人の仲も応援するよ」

キャピッと可愛くウインクしてくる。語尾に星マークが付いていた。

「うつせえ、くそガキ」

やっぱり最近の子供は生意気だ、と思った。

和隆は遥を見下ろして質問した。

「それはそうと、春川。お前そんなのに乗っててバドミントンなんて出来るのかよ？」

「世の中には車イスでバスケやフルマラソンをやってる人もいるくらいやからね。競技用の車イスじゃないから小回りは効かないけど、少しくらいなら多分いけるよ」

遥はラケットをぶんぶんと振り回していた。やる気満々である。

「こう見えて私は、昔はスポーツ少女やったしね」

「そうなんだ？ 何かスポーツをやったの？」

「陸上」

「全然種目が違うじゃねーか」

どこから来たんだ、その自信は。

「せっかくだからお兄さん、審判やってよ。ついでにネット係も」
和隆は審判を頼まれてしまった。そのついでに、センターネット
代わりに紐を持たされる。紐の反対は、公園の街灯にくくりつけら
れてあった。

「んじゃあ、試合再開するよー！」

コートに向こうに立つ、猫っ毛の少女がぶんぶんと手を振った。
少女のサーブから勝負が再開した。

遙がそれをレシーブする。

ずりずりと靴を引きずって描いただろうコートの大きさは公式の
ものより大分小さかったし、あくまで遊びなので相手も力を加減し
てくれているのだろう。

しかしそれでも、遙は車イスというハンディを物ともせずによく
戦っていた。

車イスを器用に操り、飛んできたシャトルを確実に打ち返す。
足元に落ちそうになったシャトルも、身を乗り出してギリギリの
所ですくい上げていた。面目躍如の大活躍である。

パコンパコンと小気味いい音が響いてラリーが続いた。

相手が打ち損じ、遙の真上にシャトルが返ってきた。

「おっ、チャンス！」

遙はすつと背筋を伸ばし、車イスに座ったままきれいなフォーム
でスマッシュを決めた。

シャトルは和隆の持つ紐の上を超え、相手コートギリギリの絶妙
な位置に突き刺さった。

「よっしゃ！」

彼女は弾んだ声を上げて、ダブルスを組んだキャスケット帽子の
女の子と「いえーい！」とハイタッチを決めていた。

「今の見た見た、赤坂くん？　我ながらナイススマッシュ」

ぶいつ、と無邪気な顔をしてこちらにVサインを送ってくる。

和隆は微笑ましく思いながら笑って答えた。

「小学生相手になに本気出してんだよ？」

「私はいつでも本気ですよ」

彼女はラケットをバトンのようにくると回し、やんちゃに胸を張っていた。勝ち誇ったような顔をする。

相手の少女二人は、「くそー」と悔しげに唸っていた。

「次は負けないんだからね！」

「おお、遠慮するな。そんなお姉ちゃんは叩き潰してしまえ」

和隆も横からけしかけた。

遥がブーと口を尖らせる。

「ちよつと赤坂くん、どっちの味方よ？」

「俺は基本的に、負けてる方を応援するタイプなんだよ」

パソコンとラリーは続く。

切ったばかりのショートカットの髪の毛が、風に吹かれてふわりと踊る。

昼下がりの公園の中、彼女は子供のように無邪気に少女たちと笑っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7291v/>

車イス少女

2011年9月16日03時15分発行